

# 第Ⅳ章 遺物

## 1 工房関係遺物

### A 鑄造関係遺物 (PL. 27~31, Tab. 5)

十四坪東北部に密集する土坑群の周辺から、埴塼・鞆羽口・鉞滓などの金属加工にかかわる遺物が多量に出土した。これらは後述のように、分析の結果、銅の鑄造に関係したものであることが判明している。井戸 SE 1867 などからは、銅製鍔帯金具の未製品が出土しており、鑄造工房での製作品の一部を推定できる。本工房の鑄造関係遺物のうち、埴塼と鞆羽口は、きわめて特色ある内容をもち、奈良時代の鑄造技術や工人の系譜などを解明する上で、重要な手がかりを与える。また、十三坪の井戸 SE 1315 からも鉄鉗や鉄匙などの鑄造工具とともに、大型砥石や銅製品の未製品が出土した。井戸の構築年代から判断して、十四坪の鑄造工房とは時期を異にする遺物であるが、平城京でも初出の資料を含み、奈良時代の鑄造技術を解明する上で貴重な遺物といえる。このほか埴境小路 SF 2000 上やその近辺にも鑄造関係遺物が集中するが時期の限定は困難である(別表6)。以下に鑄造関係遺物を一括し、種別ごとに説明を加える。

埴塼 (PL. 27・28-1~8) 総数 430 点が出土した。細片が多く、全形を知りうるものは少ない。\* 口径 14cm 前後の半球形を基本とする。溶融した金属を鑄型に移す「とりべ」との区別が難しいが、ここでは、一応埴塼として記述をすすめる。埴塼の大部分は、日常什器の土師器を転用し、内外面に粘土を塗って成形したものであって、通有の粘土製埴塼の出土は、わずか 1 点にすぎない。転用土師器の器種は小型甕と椀に限定される。このうち甕の転用例が圧倒的に多く、縦方向に半載して頸部のくびれを片口に利用したもの、上半部を打ち欠いて丸底を利用したものなどがある。いずれも丁寧に打ち欠いて椀状に整え、長石と石英粒を多量に混入した粘土を内外面に厚く塗って仕上げる。現状では、粘土の剝落したものが多い。すべて口縁近くは火熱によって暗赤色にガラス化し、内面には黒色のカラミがアメ状に付着する。

1 は甕 C を転用した完形の埴塼である。甕の体部を椀状に整え、くびれ部を幅 7.5 cm、高さ 1 cm ほど残して注口に利用し、底面には、打ち欠かいた把手の基部を残す。内外両面に長石・石英粒を含む砂質味の強い粘土を厚く塗る。内面には少なくとも 2 層の粘土の重なりがあり、再使用時に粘土を塗り直し、器面を整えた状況をうかがわせる。黒色のカラミは内底面から口縁下 0.5~2.0 cm に残り、片口付近は赤紫色に変色して発泡する。口径 13~13.5 cm、深さ 2.8 cm、器壁の最大厚 3.6 cm、重量 609 g、量大容量 50 cc 前後である。QT 50 区灰褐色から出土した。2・3 は甕の丸底付近を転用した埴塼である。2 は完形品で内面にのみ粘土を塗る。外面は火熱をうけて脆弱化し、灰黒色に変色する。口縁部は赤紫色に溶解し、一部に小石が溶着する。内面全体にカラミが付着し、発泡による凹凸がいちじるしい。注口部はないが、口縁部外面に付着したカラミの状態から溶銅を注いだ方向がわかる(矢印)。口径 12.8~13.2 cm、深さ 4.6 cm、最大容量 150 cc である。SK 2051 から出土した。3 は 1 に似た浅めの埴塼で

内面に厚く、外面に薄く粘土を塗るが、外面の粘土の大部分が剥落している。推定口径 13.5 cm、高さ 3.6 cm、深さ 2.0 cm である。口縁付近は暗赤色にガラス化し、内面の凹凸面に灰緑色の溶銅が付着する。SK1825 から出土した。4 は浅くやや大型の埴塼で、体部 1/4 を残す。粘土は内面にのみ 1.2 cm の厚さで塗られる。外面は火熱のため灰褐色に変色し、器面の一部が剥落する。復原口径 16.4 cm、深さ 2.9 cm、SD1440 から出土した。5 は底部を欠失するが、2 に似た深めの埴塼で、甕の頸部のくびれ部を利用して片口につくる。粘土は内面にのみ塗られ、2 層の重なりが明瞭である。再使用面は口縁下内面 1.5 cm ほどが暗赤色にガラス化し、以下に黒灰色のカラミが凹凸面を形成する。当初の面にも黒色のカラミがみられ、1cm 近い厚さで粘土の塗り重ねがある。外面は火熱で灰白色に変色する。口径 13.8 cm、復原高 5.8 cm、復原深さ 4.4cm、PE 66 区包含層（バラス層）から出土した。6 は土師器碗 C 転用の埴塼である。粘土は 1 cm 前後の厚さで内面に塗られ、口縁部を覆うように外面の口縁直下におよぶ。外面に塗られた粘土の多くは剥落するが、火熱による変色の状況から、口縁を均一に覆っていたことがわかる。内面の口縁付近は赤紫色～緑褐色に変色し、以下にカラミがアメ状に付着する。口径 13.6 cm、深さ 3.6 cm、SK1971 から出土した。7 は杯 X 転用埴塼である。粘土は内面にのみ残るが、口縁部に突出した粘土の状態から、6 と同様に本来は口縁を覆っていたとみられる。内面の粘土は口縁部が赤紫色に変色する。口縁下 1.5 cm で段を生じ、以下の黒色のカラミが皸状の凹凸をなす。復原口径 14.6 cm、深さ 3.2 cm、SD 1594 出土破片と SD1496 最下層出土片が接合した。

PL. 28-8 は 430 点中唯一の粘土製の埴塼で、口径 12 cm、深さ 4 cm 前後の小型品に復原できる。内外面を平滑につくり、口縁はやや丸味をおびる。内面には緑色味の強い暗灰色の溶銅が付着する。厚さ 1.5 cm 前後あり、SK2025 から出土した。

ふいご  
はぐち

鞆羽口 (PL. 28-9~15) 総数点 141 が出土した。細片が大部分を占め、全形のわかるものはきわめて少ない。十四坪に密集する土坑を中心に出土したが、埋土中に投棄された状態で出土し、使用時の原位置をとどめる例はない。すべて孔径 2.5 cm 前後の小型品に限られる。元口がラッパ状に開き、先端に向かってすぼまる通有の直線羽口とともに、先端が曲がった湾曲羽口が 11 点ある。直線羽口のうちわけは、先端部 41 点、筒部 78 点、元口部 11 点である。いずれも長石、石英粒を多量に混入した砂質味の強い粘土でつくる。

9 は先端部を欠失するが完形に近い羽口である。現存長 14.0 cm ある。通風孔は径が小さく不整形で、内面にシボリ目がみられる。外面は長軸方向に刷毛目を施し、元口には裾部を広げた際の指頭痕が顕著に残る。元口外径 6.9 cm、内径 5.6 cm で、破損部外径 4.7 cm、内径 1.5~1.9 cm である。本品は、内面にシボリ目、外面に刷毛目調整をもつ点で、他の羽口と様相を異にする。SD 1584 から出土した。10・11 は先端部分である。10 は先端の欠損後も使用しており、破面が赤色のガラス質に変質する。炉内で下面に位置したとみられる孔の内面に、カラミが付着する。現存長 8.7cm、孔径 1.5~2.4cm である。長石・石英粒を多く含んだ胎土中に靱殻を混入する。筒部の色調は茶褐色で、先端部が暗灰色に、中ほどが白色の帯状に変色する。その変色状態から、炉内への挿入角度が 25 度前後と推定できる。SD 1584 から出土した。11 は先端部が黒色に溶解し変形している。先端から 2cm ほどの位置に粘土が薄く付着し、炉内挿入角度は 10 度前後とみられる。現存長 6.1 cm、孔径 2.3 cm である。孔は直線的

で、丸棒を抜き取った痕跡が明瞭に残り、孔径 2.3cm である。SE 2070 底面から出土した。13と15は元口部分で、ともに裾部の広がり小さく緩やかであるが、9と異なり裾部を筒部と同じ厚さにつくる。13の裾端部は平坦面をなし、乾燥時に垂直に立てた状況を示す。筒部には顕著な稜があり、7～8面体に近い。胎土に籾殻を混入する。現存長 8.1 cm、元口の外径 7.2 cm、内径 4.5 cm である。SD1495 から出土した。15の端部も平坦面をなすが、裾部に指頭痕はみえず、平滑なつくりである。胎土には長石や石英粒の混入量が多く、わずかにササと籾の混入を認める。現存長 9.2 cm、元口の復原外径 5.8 cm、内径 4.3 cm 前後である。SE1385 井戸枠内から出土した。

12・14は湾曲羽口で、ともに先端部分であるが、形状が若干異なる。12は孔径が 1.7 cm 前後と細く、均一な肉厚で全体が弧状に湾曲する。外面は平滑なつくりで、先端部の端面は濃緑色にガラス化し、周囲が赤紫色から黒灰色に変色する。その変色状態から、通風孔を65度前後の急角度で下方に向けて使用したと推測する。先端部外径 3.4～3.8cm である。QS 49区灰褐色土から出土した。14は12に比べると大型品で、緩やかに湾曲した筒部が先端近くで強く屈曲し、通風孔が頂部をずれて下方にあく。筒部外面には、長軸方向に平行する幅 1.5cm 前後の波状の凹凸が顕著に残る。先端部は粘土を継ぎ足して成形する。筒部は橙褐色、先端部は黒色・赤紫色・緑褐色に変色。変色の状態から通風孔先端が下面に対して垂直に近い状態（85度前後）で使用したと推定される。胎土にわずかに籾殻を含む。先端部外径 5.4×4.5cm、内径 2.1 cm、SK 1819 から出土した。

他に、図示不可能な破片が 134 点あり、部位ごとに特徴をまとめると次のようになる。先端部は、火熱により溶解して変形したものが多く、赤紫色、暗緑色にガラス化したもの、黒色に溶解したもの、表面が発泡して気泡を生じたものなどがあり、細片化がいちじるしい。元口部は、裾を指で折り曲げるように広げてつくるが、その屈曲はさほど顕著でなく、直線におさまるものもある。端面はすべて平坦ないしは丸く処理し、尖るものはない。厚さは体部よりもわずかに薄く、1～1.5cm のものが多く、最も厚いもので 2.8cm、最も薄いもので 1.0cm である。通風孔の径は 2.4～2.7cm 前後におさまる。色調は先端側が暗灰色、元口側が橙褐色ないしは灰白色を呈し、その境が帯状に白く変色したものが多く、筒部破片の中には、外面に曲率をもった材の圧痕を残すものが12点ある。多くはこの圧痕をナデ調整によって消し去るが、13・14のように稜状にその痕跡を残すものもある。同様の圧痕や稜をもつ羽口は、平城京出土品の中にも広く認められる。

出土羽口の胎土を実体鏡下で観察したところ、0.5～5.0 mm 大の鉱物や岩石の礫が多数混入している。その種類は、石英や長石を中心にチャートを含む。石英は火山岩系のものと、深成岩系のものが入り混じっており、一つの岩石を粉砕して胎土中に混入したと考えるより、長石、石英粒を多量に含有する川砂などを混入した可能性が高い。長石はその表面がガラス化しているものが多く、900～1000°C 程度の火熱をうけたと推定できる。

鞆羽口台 (PL. 28-16) 坪境小路北側溝 SD 1499 に投棄された炭化物層出土片と、SD 1500 最下層出土片が接合し、ほぼ全形を知りうる状態となった。縦 9.0 cm、横 7.4 cm の平面方形で、上面が傾斜する粘土塊の上面を長軸にそって弧状にくぼめた土製品である。くぼみは深さ 1.6 cm 前後で、底面に対して 15°50′ の傾斜をもつ。高い方の端部は強い火熱をうけ、小口面を中

心に変形し、一部ガラス質に変質する。傾斜の低い部分は縁部が丸くおさまり、小口の上端がくちばし状に突出する。底面は平坦で、両側面は外反気味に立ち上がる。胎土に長石・石英の細粒を多く含み、羽口、埴埴用の胎土に近い。現存高 3.7~5.8cm。弧状にくぼむ溝の最大幅は 5cm 強で、羽口の平均径に近く、後述するように、羽口の固定台と考えられる。類似品が隣接する十一坪の西一坊坊間路西側溝 SD920<sup>1)</sup> と、左京三条二坊七坪の鍛冶炉<sup>2)</sup>から出土している。\*  
いずれもほぼ同大のつくりで、凹部の傾斜角度も近似する (SD920 出土品は 16°41')。

**かなはし 鉄鉗** (PL. 33-24) 脚部が大きく開いた状態で銹化固着した大型の鉄製鉗である。一方の脚部を折損し、鉗の両先端を欠失するが、全体の残りは良い。現存長 36.0 cm, 復原長 37.6 cm である。脚は角棒の角をおとして丸め、要部近くで幅 1.2~1.3cm の断面隅丸方形、末端に向かって徐々に細まるとともに丸味を強め、端部で 0.5 cm 前後の丸棒となる。要部は幅 2.1 cm, \*  
厚さ 0.7~0.9cm の平坦面をつくり、中央に孔をあけ、鉄鋸であそびをもたせて、かしめる。鉗部は鉗合部がうまく重なるよう、直線的な脚を要部付近で内に曲げて、先端を重ねる。先端部は図示したように復原されよう。SE1315 から出土した。

鉄鉗の出土は平城宮・京で初めてである。奈良時代の類例がなく比較はできないが、古墳時代の鉄鉗とは、著しい形態変化が認められる。すなわち、古墳時代の鉄鉗は要部のつくり出し \*  
が不明瞭で、脚部から鉗部にかけて全体をゆるやかな S 字状につくるのに対し、本例では直線的な脚部、要部、鉗部を明瞭につくり出し、鉗部を鋭いくちばし状につくる。埼玉県台耕地遺跡<sup>3)</sup>、福島県松ヶ平 A 遺跡出土の平安時代の鉄鉗の形態に近い。

**鉄杓子** (PL. 33-25) 匙形の鉄製品で銹化が進み遺存状態は悪い。柄の末端が中空につくられており、袋部に木柄を挿入して使用したと考える。袋部の大半を欠失し、本来の長さは不明である \*  
。現存長 15.1 cm, 匙面は周囲を大きく欠失するが、長さ 4.2 cm, 幅 2.7cm 前後の卵形もしくは木葉形に復原できる。匙面は柄に対して 75° 近い急角度でとりつく。鍛造品で、細長い鉄板の先端に匙面をつくり、中程から下半を折り重ねて棒状に整え、上半部を袋状に丸めて作る。形状は、佐波理匙にも似るが、鉄製の杓子は奈良時代には類例のないものである。江戸時代 \*  
の『鼓銅図録』の中に、似た形状の道具がみられる。大きさは本例よりもはるかに大型であるが、中空の袋部に長い木柄をとりつけ、銅の精錬作業に使用している。この道具は、『日本山海名物圖會』<sup>6)</sup>に図示された冶金器具の中にも見え、「どぶかき」、「炭出し」などと呼ばれている。本例は、こうした近世の絵図中にみえる工具にくらべると、きわめて小型であるが、溶銅の表面に浮いた不純物を除去するための道具と考えられる。銅冶金工具の起源を知る上で、貴重な資料といえよう。SE1315 から出土した。 \*

**砥石** (PL. 29~31-1~22) 総数44点が出土した。多くは、一般的な形状の砥石であるが、数量が異常に多い点、特殊な形態の砥石を含む点などから、ここでは一括して鑄造関係遺物として

1) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984, fig. 36。

2) 奈良国立文化財研究所『昭和62年度平城概報』1988, p. 52。

3) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団『台耕地(II)一関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XX』1984, 第46図-20。

4) 福島県文化センター『真野ダム関連遺跡発掘調査報告VI』1984, 図51。

5) 増田綱・丹羽元国『鼓銅図録』享和元年(1801)~文化2年(1805)ごろ, 日本科学古典全書第九卷所収 1942。

6) (『図録山漁村生活史事典』1981, p. 31, 所収)。

あつかう。個々の寸法，色調，出土遺構などは別表3を参照されたい。

石質から溶結凝灰岩系，片岩系，砂岩系，流紋岩系の4種に分かれ，産地の違いとともに用途差の存在したことが推測できる。最も数量の多いのは流紋岩系の砥石で，33点を数える。黄褐色ないしは淡黄褐色を基調とし，表面に1~2mm大の長石風化による空隙をもつ点に特徴がある。奈良県耳成山や二上山産出の流紋岩とは組成が異なり，産地は不詳である。折損のため本来の大きさは不明であるが，幅5~7cm，厚さ2~5cm大の小型化した砥石が中心となる。その多くは長軸方向の四面を使用し，中央部が大きく研ぎ減り，折損にいたっている。これらの流紋岩系砥石には，小口面に採石時のノミもしくは手斧状工具の削り痕をとどめるものが多い。1には幅2cm前後の手斧の削り痕が，2・3・7・10には平行した条線状の削り痕が残る。後者は櫛歯状の凹凸をなし，刃幅が1.2cm前後のノミ状工具による整形痕とみられる。これらの工具痕は，他の例では小口の使用により消失するが，13のように研磨面の下に整形時の工具のアタリを残すものもある。また流紋岩系砥石の多くには，小口面を中心に刃痕がみられ，4・6・9・11・14では側面にも及ぶ。1は断面が正方形に近い砥石で，上下面の中央近くが浅く溝状に研ぎ減る。10は短軸方向にも凹レンズ状に研ぎ減る。8は曲率のある製品の研磨に用いた砥石で，上面が幅3.0cm，深さ0.8cmの断面半円状にくぼむ。弧は半径1.7cmの正円の一部に復原できる。15は小口の両端を折損するが，折損後に一端を再使用している。11は研ぎ減りの状況からみて，一辺8cm前後の平面正方形の砥石になろう。側面の使用が著しく，大きく磨滅して湾曲する。13は流紋岩系砥石の中では最大のものである。二次的な火熱をうけ，表面は黒変し剝離がすすむ。6面を使用するが研ぎ減りが少なく，一部に整形時の工具痕を残す。12は小型の砥石で上端は折損後も使用している。流紋岩系砥石の中には，幅2.9cm，厚さ1.2~1.7cmのさらに小型品がある。

16は花崗片麻岩製の砥石である。整形時の剝離面の凹凸が激しいが，両側面を中心に使用しており，湾曲気味に研ぎ減る。下面は未使用である。上面の使用もわずかで，長軸方向に多数の研ぎ傷がある。

17から20の4点は雲母片岩を利用した不定形の砥石である。17・18は厚さ1cm前後の板状品で，ともに上面と小口の一端を使用する。研磨により，片理面の凹凸がつぶれ平滑となる。17の上面には刃痕が著しい。19・20は棒状砥石で，ともに一端を折損する。19は長軸方向に全体を使用する。断面が半円形を呈し，大きく使用した平坦面と，稜をもつ4~6面体からなる。20は4面をわずかに使用する。一側面は研ぎ減りによって平坦に近い。21は黒色片岩（スレート）製の扁平な砥石で全体に磨滅して丸味をもち，上面中央に幅0.4cm，深さ0.1cm前後の1条の研ぎ痕を残す。

22は流紋岩質溶結凝灰岩製の大型砥石である。両端を折損するが，幅21cm，厚さ7~9cm，現存長52.7cmである。SE1315から2片に割れて出土した。折損後に火をうけ，全体が変色する。両側面は未使用で，整形時のノミ痕と敲打痕が残る。表面の中央に節理の段が残存する。段を境に下半部を中心に使用し，長軸方向に舌状に大きく研ぎ減る。段の上半部の使用は副次的で，剝離面の凹凸が全面に残る。裏面も大きく全面を使用するが，先端付近の使用はわずかで，元に向かって大きくくぼむ。長軸方向に幅1mm前後の研ぎ痕が縞状に残る。岩石中には径が1~3mm大の石英が多く含まれ，1~5mm大の黒雲母が胡麻塩状に分布する。奈良県春

日山地獄谷石仏周辺に分布する溶結凝灰岩である。同質の砥石片が2点あるが、厚さ4cm前後の小破片である。

砥石に関する奈良時代の史料は、正倉院文書に造営資材として散見する。『造金堂所解』<sup>1)</sup>には雑銅を磨き作る料の砥とともに、佐保山から「運荒砥十材重一千十斤」を運送した記事がある。荒砥一材の大きさは不明であるが、その重量は平均百一斤、約23kg(小一斤=224g)前後であり、造営現場では運んだ材を分割して使用したとみられる。SE1315出土の溶結凝灰岩製の荒砥は、両端を折損するとともに大きく研ぎ減るが、現状で13.8kgもの重量をもつ大型砥石であり、佐保山から切り出された荒砥一材の姿に近いものと推測する。産地は、先述のように地獄谷周辺とみられ、佐保山同様、運搬に便利な平城京近郊から大型の砥石を切り出した可能性があろう。<sup>2)</sup>『造仏所作物帳』には「砥三顆、破砥九十二顆、青砥二十二顆、荒砥三十一顆」<sup>3)</sup>の記事をはじめ、銅鉄工所用物中にも雑物磨料として破砥・青砥をみる<sup>4)</sup>。砥の粉とみられる破砥を除くと、砥・青砥・荒砥の区別があったことがわかる。さらに天平宝字4年(760)の「丈六観世音菩薩」には、『延喜式』にしばしば登場する伊予砥の名がみえ、後世のように産地名を冠した砥石の名称が確立しつつあったことが知られる。また、『和名類聚抄』鍛冶具の項に、「砥」を細密な砥石、「礪」をあら砥石、「青礪」を青砥石としており、奈良時代に既に現在の砥石と同様、精粗の区分が存在したのである。今回の出土品を現在の砥石の基準で分類すると、流紋岩系砥石が中砥、溶結凝灰岩・片岩・砂岩系の砥石が荒砥となろう。

敲石(PL.30・31-25・26) 鉋物や混和材などを敲きつぶしたとみられる敲石が2点出土した。25は細粒黒雲母花崗岩の丸棒状自然石を利用し、一端を折って平坦面を使用する。磨石としても利用しており、小口には敲打した痕跡とともに磨減面が残る。側面も磨石として利用しており、稜をもつ平坦面を形成する。長さ10.3cm、幅4cm前後、厚さ3cmで、手の平にちょうどおさまる太さである。SD1500上層から出土した。26は片岩を棒状に整えたもので、小口的一端が敲打により平坦面となる。長さ16cmである。灰褐色から出土した。他に包含層から、扁平な河原石の側面を使用した磨石(細粒片麻状黒雲母花崗岩)が出土している。長さ7.8cm、幅5.1cm、厚さ2.4cmで、QE61区灰褐色から出土した。

銅製未製品(PL.32-1・2・10) 1は鉋具のC字形外枠の未製品で、SK1824から出土した。全面鑄放しのままの粗面を呈し、軸孔も未穿孔である。革帯を通りやすくするための内傾面は、当初から計画され既に表裏面の区別がある。また軸棒を受ける基部は、穿孔に備え、完成品よりも大きめに作られている。鑄バリは内傾面の中程と、外側の稜部にわずかに認められ、鑄型の合せ目はほぼ中央に位置する。表側の先端部には堰の切断痕が残る。現長縦3.36cm、横1.64cm、基部厚0.4~0.5cmあり、内径長軸からみて、帯幅9寸(2.7cm)の革帯に付属する鉋具の外枠であろう。2は巡方の表金具の未製品で、横幅2.47cm、縦幅1.89cm、厚0.15

1) 『大日本古文書』16, p. 285 及び福山敏男「奈良朝末期に於ける某寺金堂の造営」『日本建築史の研究』1943。

2) 平瀬 補世・薮 関月『日本山海名産図会』(寛政11年(1799)刊、『日本庶民生活史料集成』第10巻所収, 1970)に「諺に砥は王城五里を離れず、帝都に随ひて産すと云も、空ことにもあらずか

し、昔和州春日山の奥より出せし白色の物は刀剣の磨石なりしが、今は掘ことなく其跡のみ残れり。」とある。この春日山の白色砥に関しては不明な点が多い。

3) 『大日本古文書』24, p. 26。

4) 『大日本古文書』24, p. 38。

5) 『大日本古文書』4, p. 420。

cm 前後ある。湯のまわりが悪く、下端の一部に空隙を生じ放棄されたものである。周縁にわずかなバリがあり、上半部両側縁に堰のタガネ切断痕（幅 0.4~0.5 cm）がある。これから、複数の金具を連結して同時鑄造したことがわかる。下端の方形透しや周縁の面取りは、鑄型段階から計画されている。鑄造後の鑄整形を最少限にとどめ、計画寸法と仕上り寸法との誤差をなくす配慮であろう。裏面は上辺と透し孔上部の間の肉をわずかに落とす。鋳足は現状で3隅にしかみられず、そのうち2鋳を折損する。仕上り寸法は、横 2.1 cm（7分）、縦 1.8 cm（6分）に計画したものであろう。鑄型の合わせは裏面側が極端に浅く、0.33 cm である。SE1867 から出土した。

10は隅丸の長方形金具の未製品。周囲に鑄バリを残す。長辺の片側中央にV字状の切り込みがあるが性格は不明。黒色の光沢をもち、鑄型表面をナデつけた痕跡が製品の表面にあらわれている。短辺の下半に堰の切断痕が残る。SE1305 最下層から出土した。

**埴埴・鋳滓等の非破壊分析** 出土した埴埴、鞆羽口、鋳滓、金属片について、蛍光X線分析法を利用した非破壊的な手法によって、どのような金属が含まれているかを定性的に調査した。その結果、主に銅、錫、鉛が検出された（Tab. 5）。鋳滓や金属片のなかには、錫あるいは鉛がないものもあるが、銅は、全ての試料に含まれている。したがって、以上の分析によって、銅または銅合金の鑄造の行なわれていたことが推定できた。

番号	種類	元素スペクトル							
		SbK $\alpha$	SnK $\alpha$	AgK $\alpha$	PbL $\alpha$	AsK $\alpha$	BiL $\alpha$	CuK $\alpha$	FeK $\alpha$
1	埴 埴	?	++	-	++	+	-	++++	++
2	"	-	++	-	++	+	-	++++	++++
3	"	?	++	-	++	tr	-	++++	+++
4	"	-	++	-	?	tr	-	++++	+++
5	"	-	++	-	++++	+	-	++++	++++
6	"	?	++	-	?	tr	-	+++	++
7	"	-	++	-	+++	-	-	++++	++++
8	"	-	++	-	++	-	-	++++	++++
9	"	-	+++	-	+++	+	-	++++	++++
10	鞆 羽 口	-	++	-	++	+	-	++++	+++
11	鋳 滓	-	++	-	++	tr	-	++++	++++
12	"	-	-	-	-	-	-	++++	++++
13	"	-	-	-	?	tr	-	++	++++
14	"	-	++	+	-	+++	tr	++++	++++
15	"	-	++++	tr	++	++	tr	++++	++++
16	銅 片	?	++	+	++	tr	++	++++	++++
17	金 属 片	-	-	-	+	-	-	++	++++
18	"	-	-	-	+	-	-	++++	++
19	"	-	-	-	-	-	-	++	++++

\* +の数が多きほど含有量が多いことを示す。

1 ; SK2051 2・6・7・10 ; SK1825 3 ; QT50 区灰褐色土 4 ; PE66 区バラス土 5・15・16 ; SD1495 8 ; OC50 区灰褐色土 9 ; SK2036 11・13・14 ; SK1886 12 ; SK2026 17 ; SK2025 18 ; SK2001 19 ; SK2016

Tab. 5 埴埴・鋳滓等の蛍光X線による定性分析結果

## B 漆関係遺物 (PL. 34・35, Fig. 41~43)

十四坪北区北寄りの東辺で検出した土坑 SK 2001 には、漆工に関係したおびただしい量の遺物が埋没していた。それらは、漆が付着した土器、漆の塊、漆の膜に大きく区別されるが、それぞれの内容は、なお多岐にわたっている。

### 1 漆容器として使用された土器 (PL. 35, Fig. 42)

SK 2001 から出土した土器の多くには、表面に漆が付着していた。後に第四章—4 J で述べるように、須恵器壺K, 壺L, 壺P, 壺Xは、漆の生産地で、採取された漆液を入れて、平城京

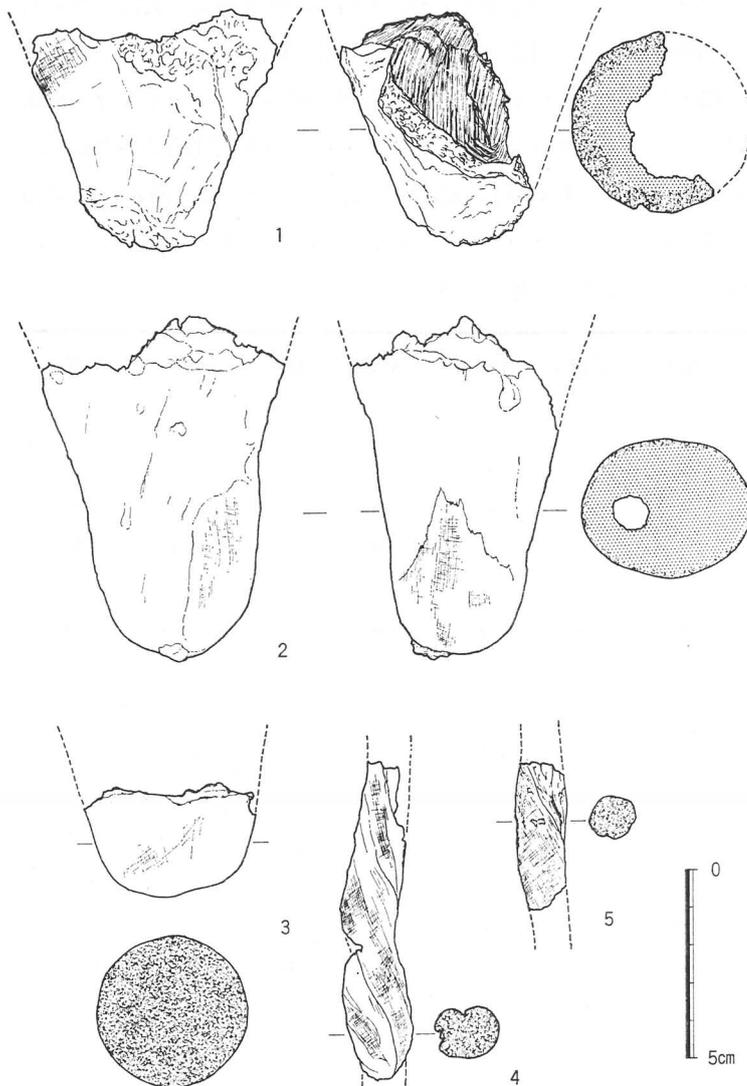


Fig. 41 漆容器の栓 (1:2)

に運搬するために用いられた容器と考えられる。そして当遺跡地に運びこまれた後に、壺に入った漆液は、広口の容器である土師器の甕や須恵器の壺・甕に移し替えられたものと推定される。興味深いことに、運搬容器として使われた須恵器壺類は、二、三を除き、他はすべて破片となって出土した。漆はこれらの破片の内面だけでなく、割れ口の断面にも付着している場合が少なくない。また、内面の漆膜に同じ土器の破片が固着している例もみうけられる。さらに、壺類の肩部付近の割れ口断面の外表面縁辺に、打撃が加えられたことを示す打瘤痕跡の残るものもある。以上のような状

1) 藤原京左京八条二坊に所在する「紀寺」跡の発掘調査で、7世紀後半代の寺院造営に関わる多くの遺物が投棄された土坑群がみつかった。そのうちの一つの土坑から、大量の漆容器の壺が出土している。これには須恵器平瓶・長頸壺・短頸

壺・横瓶など多くの器種が含まれるが、壺類にはいずれも、口縁および体部上半で打ち割って、中の漆をかき出した痕跡が明瞭に残っている(奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報18』1988, p. 39, 第28・29図)。

況からみると、壺Pや壺Xは、中にいれてある漆が完全に固化していない時点で打ち割られたと判断される。それは、おそらく口の狭い壺から、広口の甕などの大きな容器に漆液をいれ替えたときに、壺の

- \* 中に残っている漆液を取り出すために、容器を打ち割って、内壁面に付着していた液をかき取ったものと思われる。

Fig. 42 に示したのは、須恵器盤Aに漆が分厚く付着したもの。口縁部の断片が数片残るだけで、器の

- \* 口径、深さともに復原しがたいが、口径は50cm前後になるものと推定される。漆は主として口縁部内面と口縁端部に固着している。厚い部分では12mmをはかり、数十層の層をなしている。口縁部外面では、端部下2cmまでしか付着せず、しかも薄い。この須恵器盤Aは、おそらく漆を溜めておく器として使われていたもので、漆液の出し入れを幾度となく繰り返したために、
- \* 薄い膜が層状に積み重なり、厚く固着したのであろう。

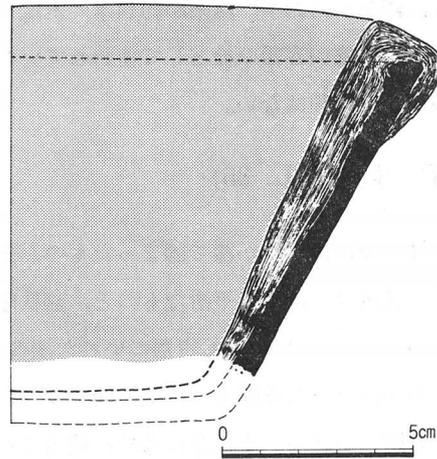


Fig. 42 漆容器に使用された須恵器盤A(1:2)

## 2 漆容器の栓 (PL. 34, Fig. 41・43)

漆の塊の中には、漆をいれた容器の口の栓であったと考えられるものがあり、16個体分が遺存していた。そのうちの7点は、1~3, 5・6のような形状をとるもので、横断面は円形をしている。内部には漆で固まった藁の繊維が詰まり、表面に織り目の粗い布の痕跡が残る。経糸、

- \* 緯糸とも1cmあたり4~5本の密度である。大きさや形状からすると、多量に出土している漆容器として使われた須恵器壺K, 壺L, 壺Pの栓として使用されていたものであろう(Fig. 41・43)。束ねた藁を粗布で覆って栓としていたものに、容器の漆が浸透して固まったものと考えられる。藁束を布で覆う場合に、2~3mmの厚さにくるむもの(2)や、厚さ5~10mmと、かなり分厚く布を巻きつけたと考えられるもの(1)もある。また先端部分3cmだけの破片(3)では、
- \* 中に藁の形跡はなく、布を丸くくるんで、その表面を一枚の粗布で覆っており、その他に、布塊を紙で2~3重にくるんで栓としたものもみられる。

栓と思われる漆塊には、そのほか、分厚く折りたたんだ粗布を振っただけのものが9点出土した(PL. 34-1・4・7)。この表面にみられる布目の痕跡は、織り目かなり細かく、1cmあた

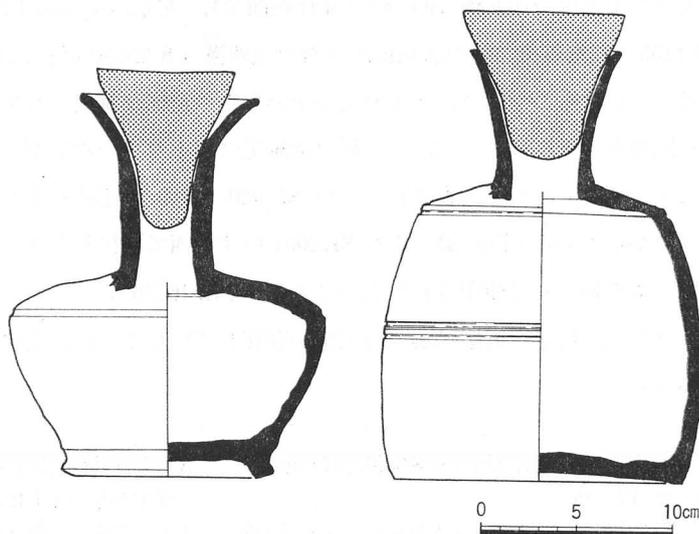


Fig. 43 漆栓の装着復原図(1:4)

り、経糸が約24本、緯糸が約14本の密度である。直径 1.2~2.4 cm 程度の棒状品であり、かなり口の狭い容器の栓として使われていたことがわかる。土師器や須恵器の漆容器にはこれに該当する器種はない。

### 3 漆膜 (PL. 35)

漆の膜には、紙が漆で固まったもの、布が固まったもの、漆だけが固まったものの3種がある。漆紙は、薄くて平滑なものと、無秩序に折りたたまれて複雑なひだ状に固まったものがある(2~4)。いずれも容器にいられた漆の表面を覆うために使われたものと考えられる。

布が固まった漆膜も、漆紙と同じように、表面にいちじるしい皺が生じたものと、比較的平たい膜とがある。また布は漆栓に使用されていたものと同様の粗い織り目の素地で、布目の痕跡が膜の両面に残る場合と片面だけにみられるものがある。この漆布膜も、容器にいられた漆の表面に被せた布が漆で固化したものであろう。

漆膜には、そのほかに土器の内面の曲面をとどめたものが多くある。これは埋没中に漆容器の土器から剝離したもので、土器に接する面は当然ながら平滑であるが、おもて面は平滑な場合と、漆が厚く固って複雑な形に隆起しているものもある。

### 4 小 結

以上のように、SK 2001 には、漆の運搬と貯蔵にかかわる多様な遺物が投棄されていた。なかでも、漆液の運搬に使用された狭口の壺類が打ち割られた状態で出土したことは、この土坑に近接した場所に、漆工の作業場があったことを示唆する。ただし、漆容器だけであるので、もっと限定して、すくなくとも、漆液を精製し、あるいは調合する作業を行う工房があったと言ふべきかもしれない。

これまでの平城宮・京の発掘を通じて得られた、漆工の工房の存在を、より直接的に示す遺物としては、数箇所出土した漆塗布用の刷毛がある。これは木製の小さな柄の先に毛を植え付けたもので、漆が付着している。出土した場所は、平城宮内の3箇所と、平城京では、左京一条三坊十五坪の南北溝 SD 485<sup>1)</sup> (8世紀前半)、左京八条三坊十坪の北の東西小路の南側溝 SD 1155<sup>2)</sup>、右京五条二坊の唐招提寺下層の東西溝<sup>3)</sup> (8世紀前半) などである。いずれも溝の中に埋っていたものであり、漆工の工房そのものの遺構は確認されていない。

今回報告する地域からは、この種の漆刷毛は出土していないが、十四坪に東接する右京八条一坊十一坪で、かつて調査された井戸 SE 930 から、刷毛置きをしつらえた漆容器の円形曲物が見つかる<sup>4)</sup> (Fig. 3)。また SK2001 のすぐ西で検出した井戸 SE2020 から出土した円形曲物も漆容器として使用されたものである (PL. 46-35)。

こうした遺物も、近辺に漆工の工房が存在していたことの証左の一つにあげることができるだろう。

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告VI』1975, p. 80, PL. 85.

2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報—東市周辺東北地域の調査』1976, p.43.

3) 奈良県教育委員会『国宝唐招提寺講堂等二棟修理工事報告書』1972, 挿図第29図。

4) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984, fig. 29.

## 2 金属製品・ガラス製品・石製品

### A 金属製品 (PL. 32・33)

- 銅鈔 (PL. 32-3~6) 朝服の腰帯を飾る鈔帯金具が4点出土した。いずれも巡方である。3は横4.13cm, 縦3.81cmの表金具。表面の黒漆が良好に残る。下辺に沿って長さ2.96cm, 幅0.3cmの透しがあく。高さ0.9cmの甲高につくり, 上面で横3.86cm, 縦3.54cmの面をつくる。内面は鑄放し状態の粗面を呈し, 四隅に長さ9mm, 径1.5mmの鋌足を鑄出すが, うち2足を折損する。完存する鋌足の先端は丸くつぶれ, 折損した2鋌の根元には, 径0.2cmの円孔を, ひとつは深さ0.5cm, ひとつは浅いあたり程度に穿ち, 補修を試みている。黒漆は側面から上面に塗り, 透し孔の部分では端面から一部内面に及ぶ。本品は従来知られている巡方のうち, 最大クラスのもので, 平城宮内裏東方官衙出土の4.23×3.90cmに次ぐ。SE1550第4層から出土した。4は横3.25cm, 縦3.11cmの表金具で, 腐蝕が進み, 外縁が痩せ, 表面が剥落する。厚さ0.12cm前後で, 高さ0.5cmの甲高に作るが, 土圧によりわずかに変形する。透し孔は2.11cm×0.68cmで, 孔の周縁は, 外面が斜めに面取り, 内面は縁にそって一段盛り上がる。内面には斜めに範傷が残る。四隅に鋌足が遺存する。SK2001から出土した。5は厚さ0.11cmの裏金具で, 腐蝕により周縁を大きく欠失し, 透し孔の一部に旧状をとどめる。SK2001から4の表金具とともに出土した。4と組み合わせ可能性が高い。6は厚さ0.1cm前後の裏金具で, 横2.66cm, 縦2.00cm。下半に横1.72cm, 縦0.8cm前後の方形透し穴があく。下辺にのみ面取りをする。孔は径0.15cm前後。SE1305最下層から出土した。

- 方形飾金具 (PL. 32-7) 金銅製の方形板状の飾金具。タガネで上下を裁断された細片で, 銅材として回収されたものか。遺存するのは飾金具の下半部で, 方形の透し穴をもち, 表面に毛彫り文様がある。文様は, 外縁と透し孔に沿って界線をめぐらせ, 短辺側では平行線の間を直交する刻みである。周縁部は表裏面からの鑄がけにより尖る。四隅には裏金具を固定するための鋌孔を穿つ。鍍金は表にのみ行なう。厚さ0.07cm, 横3.2cm。馬具の飾金具であろう。方形飾金具の出土は平城京で初例であるが, セットとなる毛彫り文様をもつ飾鋌が左京九条三坊の東堀河から出土している<sup>1)</sup>。井戸SE1867から出土した。

銅紐 (PL. 32-8) 大刀の紐とみられる破片。銹化が進み, 遺存状態は悪い。厚0.15cm前後。はばき現存横幅2.75cm, 現存縦幅2.4cm。SK1908出土。

- 円環状銅製品 (PL. 32-9) 外径2.5cm, 内径1.5cmの円環状銅製品。断面は高さ0.3cmの山形を呈し, 下面は平坦面をなす。三孔が穿れ小円頭の銅細鋌が遺存するが, すべて根元から切損。鋌は頭部を叩いてかした後, 鑄がけによって周囲と同一面に山形に整える。座金的一种か。SD1495出土。

銅人形 (PL. 32-11) 銅の薄板を人形状に裁ったもの。SE1555下層の砂層から出土。銅材を叩いて幅0.7cm前後, 厚0.02~0.05cmの短冊形の薄板に展延し, 上部の両側面を「く」の字に切って頸部を, 下端をV字状に切って足を表現する。上部は周縁の腐蝕が進み, 頸部の切込

1) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河—左京九条三坊の発掘調査』1983, fig. 23。

み部で折損する。現存長 6.5cm。銅人形はこれまでに、平城宮内の基幹水路や宮東南隅の外濠から約30点が出土しており、京内からの出土は、左京一条三坊 SD 650 に次で2例目である。平城宮出土品に比べ、やや小型で、胴部と脚部を分ける切込みを省略した点に差がある<sup>1)</sup>。

金銅簪 (PL. 32-12) 長さ 10.9cm の銅製簪である。頭部は径 0.9cm, 厚 0.1cm の円形で、周縁に向かって尖り気味に厚さを減じる。脚は断面が丸く、元で径が 0.25cm, 先端に向かって徐々に細くなり、先端近くで径 0.1cm となる。頭部と脚部の境に径 0.2cm, 長さ 0.2cm のくびれ部をもつ。蛍光 X 線分析の結果、頭部表面に鍍金の痕跡を検出した。SE1917 から出土した。

銅鈴 (PL. 32-13・14) 球形の鈴が2点出土した。13は周長 6.3cm, 2寸1分の銅鈴で、井戸 SE 1867 から出土した。遺存状態が悪く、接合部が腐蝕し、上・下に分離して出土した。

表面に塗られた黒漆がわずかに残る。下半部を大きめにつくり、上半部に重ねて接合したものである。球頂部も腐蝕し、鈕を欠失する。下半部内面にはタガネによって切断された鉄片 (0.5×0.4 cm, 厚 0.25 cm) が銹着する。14は周長 6.9cm, 2寸3分の銅鈴下半部で、下面に一文字の切口があく。井戸 SE 1315 から出土した。

海獣葡萄鏡 (PL. 32-18) 井戸 SE 1305 の底から出土したもの。5.0×4.7cm 大の破片であるが、鏡面の径が 12.6cm の中型鏡に復原できる。保存状態は良く、銀色の光沢をとどめる。全体に鑄上りが良く、鏡背文様も鮮明であるが、文様細部の鑄出しには一部甘さがみられる。鏡面は平坦で、外縁付近でわずかに反りをもつ。鏡背文様は、連珠文を配した突界圈によって内区と外区を分け、外縁部の内傾面には雲花文帯をめぐらす。外区文様は葡萄唐草文を下地に、その上に両翼を広げて飛ぶ鳥を連続して配す。鳥は俯視形で表現し、嘴鋭く流麗で燕の姿に似る。下地の葡萄唐草は、葡萄の実と、4箇所に切り込みのある葉の正方形を交互に配し、その間に風にそよぐ葉の側面形、螺旋状に巻いた蔓の先端などを充填する。内区文様は、突界圈寄りに葡萄唐草文が展開する。狡狴とみられる獣を主文様におくが、右前肢を残すのみで、全体の構成は不明。背面径 12.4cm, 内区径 7.0cm, 縁厚 1.27cm, 突界圏厚 0.71cm, 最薄部厚 0.13cm。

本鏡の同範・同型鏡は今のところない。様式的には奈良県高松塚出土鏡に近いが、鏡径に差がある<sup>2)</sup>。大きさや文様構成は、愛知県西幡豆や福岡県真名子出土鏡<sup>3)</sup>に似る。製作年代は、面径の縮小化と外区銘文帯の消失、連珠文による界圈、鳥の俯視形表現などの特徴から、盛唐初期の7世紀末ないしは8世紀初頭に位置づけられよう<sup>4)</sup>。

銅儀鏡 (PL. 32-19) SD1495 下層出土の銅製素文小鏡である。腐蝕が進み、周縁と鈕の上半を欠失する。鏡縁をつくらない薄い平板状の素文小鏡Aで、鑄造後に鑪がけにより面形を整えたもので、隣接する右京八条一坊十一坪の西一坊坊間路西側溝から、類品が2点出土している<sup>5)</sup>。鏡面はわずかに凸面を呈し、面中央部で厚さ 0.12 cm, 鈕は鑄造後の鑪がけで薄い板状に整えられ、径 0.2cm ほどの鈕孔を穿つ。現存径 2.84×2.77 cm, 現高 0.32 cm である。右京八条

1) 奈良国立文化財研究所『年報1984』p. 63。

『東京国立博物館紀要8』1973。

2) 奈良県立橿原考古学研究所『壁画古墳高松塚』1972。高松塚出土鏡は鏡面径 16.8 cm である。

4) 秋山進午「海獣葡萄鏡と走獣葡萄鏡」『富山大学人文学部紀要7』1982。

3) 中野政樹「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同範鏡の分布とその鑄造技術」

5) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984, fig. 33。

一坊十一坪 SD920 出土の素文小鏡Aは、2点ともに面径が1寸1分の規格品であるが、本鏡も面径1寸1分、もしくは一回り小型の1寸鏡に復原できよう。他に、東三坊大路東側溝 SD 650<sup>1)</sup> や、三重県齋宮跡出土品にも類例をみるが、本鏡よりも一回り大きい、1寸3分、1寸4分鏡である。

- \* 銅不明製品 (PL. 32-15・16・17) 15は叩き潰された銅製品で、軸頭状金具または鈴の未製品か。厚さ0.02cmあり変形が著しい。銅材としての回収品か。SE1530から出土した。16は幅1.7cm、厚さ0.05cm、現長1.6cmの銅板片である。上下を裁ち切った帯状製品の一部で、一端には切断痕が、他端にはネジ切った痕跡がある。SE1315掘形から出土した。17は幅1.3cm、厚さ0.08cmの帯状金具である。周縁は鑿がけで角を落とす。3.0cm離れて、
  - \* 径0.4cmの孔が2箇あく。一端は孔の部分でネジ切るが、他端は直線に切った当初の姿を留める。工具の口金か。「の」字状に丸まり、現長3.6cmある。SE1530底面直上から出土した。
- 鎌 (PL. 33-20) 全長20.9cm、刃渡り18cm前後の完形の鎌である。基部から先端に向かって徐々に身幅を狭めた細身の鎌で、棟厚は0.2~0.3cmと薄い。先端近くで強く内湾し、基端部には着柄のための折り返しをもつ。刃元幅は3.0cmある。QB67区灰褐土から出土した。
- \* 刀子 (PL. 33-21) 刃部と茎を大きく切損した刀子で、現長4.6cm、刃元の身幅1.2cm、棟厚0.27cmである。棟関と刃関を明瞭につくり出した平造り角棟の一般的な刀子である。茎は厚さ0.21cmで背方向に反りをもつ。SE1550から出土した。

錐 (PL. 33-22) 現長6.1cmの鉄製の錐である。断面は中央の最大部で0.48×0.42cmの方形をなし、両端に向かって尖るが、ともに先端を折損する。身と茎の錆化に差があり、木柄へ

- \* の挿入長(約3.0cm)がわかる。茎は断面がやや扁平である。PC57区灰褐土から出土した。

鉄斧 (PL. 33-23) 鍛造の無肩式袋状鉄斧である。全長9.6cm、刃幅4.4cmと細身である。袋部に木柄の斧台の先端部がを残す。袋部は厚さ0.3cm前後の鉄板を折り曲げて、内寸2.7×1.2cmの中空につくり、袋部は全長の1/3を占める。X線写真によって、斧台の形状は、基部幅3.0cm、高さ1.3cmの断面蒲鋒形で、着装部を一段薄く削って鉄斧を装着していることが

- \* わかる。着装部の基部は、幅2.7cm、厚さ1.1cmで、先端に向かって厚さと幅を減じ、先端を弧状におさめる。柄の長さ3.3cm。斧台の形状から、横斧であろう。SE1305から出土した。

鉄鏃 (PL. 33-26・27) 2点出土した。26は比較的小型の斧矢式鉄鏃で、刃部を欠損し、現長10.6cm、茎長6.6cm、身部現存最大幅1.80cmである。茎の表面の錆化面に、竹とみられる緻密な繊維痕が付着する。茎元には、糸巻の痕跡があり黒漆が遺存する。糸巻の幅は0.7cm

- \* である。矢柄への装着状況がわかる貴重な資料である。SE2070から出土した。27は大型の鉄鏃の身部破片で、身の周辺および茎を欠失する。鑄のない両丸造で、逆刺の基部が残る。正倉院に伝世する広根式鉄鏃に類似するか。現存長4.8cm、最大幅2.7cmである。茎は基部で幅0.77cm、厚さ0.4cmの断面方形である。SE1555下層から出土した。

棒状不明品 (PL. 33-28) 現長13.9cmの鉄製品で、角棒の角を丸め、断面は隅丸方形である。

- \* 両端を折損し、一端で方0.6cm、中央で方0.5cm、他端が0.7×0.6cmと、中央部が若干細ま

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告VI』1975, p. 105, PL. 103.

2) 三重県齋宮跡調査事務所『三重県齋宮跡調査事務所年報1983』1984, p. 44.

る。断面形からみて、鎌や工具の茎とは考えがたい。現状でわずかに湾曲する。SE 1315出土。  
**鉄釘** (PL. 33-29~36) 11点出土。錆化が進むが、10点は頭部の形状がわかる。方頭釘4点、  
 円頭釘1点、折頭釘5点がある。29・30は井戸 SE 1555 出土品で、ともに脚部の先端を欠失す  
 るが、寸法・形状が近似し、同一規格による方頭釘とみられる。方 1.6 cm、厚さ 0.5cm の頭  
 部に、0.6cm 角の脚がつく。30の脚は頭部の一方に偏在する。現存長は 12.1cm と 12.4cm \*  
 で、本来は4寸半規格の釘か。31は QM 67 区灰褐色土から出土したもので、方 1.7cm の方形  
 の頭部から 0.9cm 角の脚がのびるが、脚を大きく折損する。32は SE 1555 出土の円頭釘で、  
 径 2.3cm の円形笠形の頭部の芯をずれて、0.4cm 角の細身の脚がつく。現長 5.0cm。折頭  
 釘は脚の上端を叩きのばし、ほぼ直角に曲げて釘頭としたもの。脚の断面形が長方形の33・34  
 と正方形の35・36がある。33は PC 63 区灰褐色土から出土した。頭部の扁平な形状から、中世の \*  
 折頭釘であろう。復原長 11.9cm。34は現長 5.9cm の小型品で、くびれ部から先を欠く。井  
 戸 SE 1530 底から出土した。35は幅 1.0 cm、長さ 1.5 cm の大きめの頭部をもち、現長 3.7  
 cm ある。SE 1555 灰色粘土層から出土した。36は折り曲げた頭部を欠き、現長 13.0cm、井  
 戸 SE 1555 から出土した。

## B ガラス製品 (PL. 32, Tab. 6) \*

**ガラス小玉** (PL. 32-39~42) ガラス製の小玉が十四坪の井戸 SE 1555 の下層砂と井戸 SE  
 1560 の埋土から各2点出土した。他に土器埋納遺構 SX 1400 から12点が出土している。いず  
 れも鉛ガラスで、銀化が進み白色に変質して痩せる。右京八条の西一坊坊間大路西側溝 SD 920  
 出土のガラス小玉に近似<sup>1)</sup>、本来は濃緑色を基調としたガラス玉であろう。

番号	遺構	直径 (cm)	高さ (cm)	孔径 (cm)
PL. 32-39	SE1555	0.77×0.73	0.37	0.33
40	"	0.64×0.62	0.36	0.30
41	SE1560	0.58×0.56	0.22	0.37
42	"	0.60×0.55	0.34	0.22

Tab. 6 ガラス小玉法量表

**ガラス埴塼** (PL. 32-37・38) ガラスを溶解した埴塼の小片が2点あり、それぞれ別個体であ \*  
 る。右京二条二坊十六坪の井戸 SE 0540 出土の完形の埴塼に近似<sup>2)</sup>する。37は 2.7×3.5cm 大  
 の口縁部破片で、厚さ 1.1cm、口縁端部を外傾面につくる。外面に暗赤色、口唇部から内面にか  
 けて濃緑色の釉がかかる。胎土に長石・石英の小粒を多量に含み、堅く焼きしめる。表面に  
 通常の敲き目はない。SD 1499 上層から出土した。38は厚さ 1.0cm の体部から厚さ 1.7 cm の  
 底部にかけての破片で、表面には格子の敲き目を密に施す。内面は平滑で、全体に淡緑色の釉 \*  
 がかかり、厚い白色の釉が流下する。37に比べ大粒の石英・長石粒を密に含む。SD1495 上層  
 から出土した。ガラス埴塼は、この他に、平城京東市近くの東堀河、平城京左京三条二坊七坪、  
<sup>3)</sup>  
<sup>4)</sup>

1) p. 82 註5) 前掲書, fig. 33.

2) 奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十  
 六坪発掘調査概報』1982, fig. 24.

3) p. 80 註2) 前掲書, p. 43.

4) 奈良国立文化財研究所『昭和57年度平城概報』  
 1983.

平城京左京八条一坊三坪の池 SG 3500<sup>1)</sup> からも出土している。すべて砲弾形の器形で、内面に緑色の釉がかかる。これらは分析の結果、銅で着色した鉛ガラス溶解用の坩堝と判明している。

## C 石製品 (PL. 32)

- 石鏝 (PL. 32-43・44) 2点出土した。43は黒色粘板岩製の完形の丸柄である。表面および側  
\* 面は平滑に磨かれるが光沢はない。裏面は、2方向の顕著な擦痕が残る粗い仕上げで、裏面周  
縁は角を落とし、わずかな傾斜面をつくる。最大幅は横 4.28cm, 縦 2.55cm, 弦長 3.4cm, 厚  
さ 0.6cm 前後である。潜り穴は3箇所縦方向に配置される。SK 2108 から出土した。44は  
両端が大きく打ち欠かれ、上辺と下辺の一部を残す小片で、破面には放射状に穿った潜り穴が  
2個認められ、その配置から巡方とみられる。表面の平坦面および傾斜面は、丁寧<sup>じゅんぽう</sup>に磨かれて  
\* ガラス質の光沢をもつ。潜り穴は径 0.2cm, 深さ 0.3cm の孔を対に穿ち、先端部を連結させ  
たもの。石質は出雲地方産出の緑色溶結凝灰岩(碧玉)で、濃緑色地に緑褐色の縞模様をもつ。  
和名抄という出雲石にあたるものか。縦 3.28cm, 厚さ 0.75cm。SK 1373 から出土した。
- 軽石 (PL. 29-23) SK2006 下層出土の軽石である。一端を欠損するが、よく磨滅し、現長 4.3  
cm, 幅 4.6 cm の隅丸方形を呈する。最大厚 2.4 cm, 現重量 19.9 g である。軽石は他に  
\* SK 1886 と包含層からも小片が出土しており、いずれも磨滅した平坦面をもつ。
- 紡輪 (PL. 30-24) 細粒の片麻状黒雲母花崗岩を径 4.7~5.0cm, 高さ 3.4cm の半球状に整  
形したもの。頂部中央に径 0.6 cm, 深さ 0.45cm の浅い円錐形の孔をもつ。側面には対称位  
置にわずかな平坦面が残る。形状から紡輪の未製品とみられ、敲打によってあらかじめ概形を  
整えた後に、研磨整形する工程がわかる。重量 120.3g あり、SD 1495 から出土した。本例の  
\* ように側面の対称位置に平坦面を残す石製紡輪は、左京九条三坊の東堀河にも出土例がある<sup>2)</sup>。
- 琥珀 SK 2036 から赤褐色の琥珀の小塊が出土した。十数片に細片化し、原形は不明である。  
風化した貝殻状破面や原石面をとどめており、製品の原材とみられる。総重量 2.2g ある。
- 水晶 SE 1560 埋土から無色透明な水晶の小片が出土した。

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条一坊  
三・六坪発掘調査報告書』1985, fig. 45。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京東堀河一左京九  
条三坊の発掘調査』1983, fig. 21。

### 3 銭 貨 (PL. 36・37)

この調査では奈良時代の銅銭4種61点と中国銭7種7点の計68点が出土した。奈良時代の銅銭はすべて遺構にともなって出土し、中国銭は中世の遺物包含層（灰褐色土）から出土したものである（別表4）。なお土器埋納遺構から出土した和同開珎37点については、後述（p. 138）する。皇朝銭の分類は、『平城宮報告VI』（pp. 97～103）に従う。\*

**和同開珎**（1～16）別項で扱う37点以外に16点が出土した。完形品が12点あり、平均重量2.74g、平均径2.46cmである。土坑SK1510出土の2点（11・12）は錆化が進み遺存状態が悪いが、他はいずれも井戸からの出土品で、遺存状態は良い。全体に铸上りが良く、画線も細く鮮明な銭文をもつ。すべて「開」字の門構えの上端が隸書風に開いた「新和同」に属する。1は今回出土した和同銭中最大の銭で、径2.52cmあり、3・7・14・16なども大型の部類に入る。1・5・6・16は背面内郭四隅が丸い和同開珎Eである。9は外縁が細く、古泉界の分類で「細縁」とよばれる。6は「珎」字が他の3字に比べて小さく、内郭と遊離しており、「小珎」とよばれる和同開珎Cである。11は残りが悪いが孔が大きい「広穿」である。さらに細部をみると、14の「和」字第3画が内郭に対して斜めにつくなど、微妙な差異もある。和同銭は総じてつくりが良く、不良銭は少ないが、範傷をもつもの（3）、铸文の一部がつぶれたもの（4・8・16）、表裏の範の型合わせが極度にずれたもの（2・4・8）、内郭孔の甲張りをとる際の鑿切断がずれて孔が不整形となったもの（5・8・13）などがある。\*

**萬年通寶**（17）完形品が1点出土した。外縁幅が広く、「濶縁」とよばれる最も一般的な萬年通寶Bである。「年」字第4画が縦につき、「通」字の用は直線的で細長い。铸上り良く銭文は明瞭であるが、背面の铸出は浅く不鮮明である。外縁に範傷がある。\*

**神功開寶**（18-23）6点出土し、うち5点が完形品である。いずれも铸上り良く、残りも良い。22のみ「功」字の旁を「力」につくり、「開」字も不隸開につくる正字の「力功神功」（神功開寶B）、ほかは最も一般的な神功開寶で、「開」を隸開につくり、「功」の旁を長い「刀」字で表現する「長刀」（神功開寶E）である。全般に背面の铸出しが浅く、範の型合わせがずれたもの（19・21）や、範傷のあるもの（21）がある。内郭孔は鑿で打ち放したままで不整形のものが多い。また神功銭の外輪部には整形時の轆轤仕上げの痕跡が明瞭に残る。\*

**富本銭**（24）井戸SE1555の底面から和同開珎8点、萬年通寶1点、神功開寶2点とともに出土した円形方孔銭である。表面の上下に「富」「本」の2字、左右に七曜文を亀甲形に配す。母銭を範に押しつける際に時計まわりのずれを生じ、铸文に重複がみられる。「本」の字は大と十の合字「本」で表現される。背面は無文。黒褐色に変色するが保存状態は良い。径2.48cm、重量4.16g、縁厚0.15cm前後である。裏面の内郭は幅広く、四隅はわずかに丸味を帯びている。\*

**中国銭**（25～30）中国銭は7点出土した。磨滅による銭種不明銭1点があるが、残りはすべて北宋銭である。25は真書の淳化元寶（990年初铸）で外縁幅広く濶縁である。26は景德元寶（1004年初铸）である。27は祥符元寶（1008年初铸）で、背面の铸出しは浅く、内郭は不明瞭である。28は篆書の景祐元寶（1034年初铸）で、外縁の腐蝕が進み残りが悪い。29は行書の元豊通寶（1078年初铸）で、濶縁で文字は小さい。30は分楷の政和通寶（1111年初铸）で、濶縁小字である。銭種不明銭は元寶の2字しか判読できないが、銭容から宋銭とみられる。\*

## 4 土 器

- この調査では、整理箱で600箱に達する土器が出土した。弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の土器がごく少量あるほかは、奈良時代に属する。土師器、須恵器が大部分を占め、他に緑釉陶器などの施釉陶器、黒色土器、硯・土馬などの特殊土製品、製塩土器や統一新羅の陶質土器がある。土器は溝、土坑、井戸、柱穴の遺構およびそれらの遺構を覆う中世の整地土（灰褐色土）や、部分的に残存した砂質土などの奈良時代の遺物包含層から出土している。遺構出土の土器のうち量的に最も多いものは溝、土坑出土の土器で、井戸出土のものがそれに次ぎ、柱穴から出土した土器は少量である。ここでは主として遺構出土の土器を中心として報告する。弥生時代、古墳時代、中世の土器については小片のこともあり、省略する。
- \* 土器の記述に当たっては、器種名、製作手法、年代などは基本的に既刊の『平城宮報告』に従う。記述の煩雑を避けるため、最初に土器の調整手法について記しておく。土師器の食器類では、a手法は口縁部をよこなでし、底部外面は不調整のものを示す。b手法は底部外面を削り、c手法は削りが口縁部まで及ぶものである。e手法は口縁部上端だけをよこなでし、それ以下は不調整のものを示す。また、ヘラ磨きの有無によって0～3手法を区別する。0手法はヘラ磨きを行わないもの。1手法は口縁部外面、2手法は底部外面、3手法は口縁部と底部外面をヘラ磨きするものを示す。このa～e手法と0～3手法の組み合わせによって調整手法を表現する。また、色調・胎土の差により土師器を2群に、須恵器を4群に分けている。土師器I群土器は灰褐色を呈し、胎土にほとんど砂粒を含まないもので、II群土器は灰褐色～暗褐色を呈し、胎土に微小な砂粒を含むものである。須恵器I群土器は青灰色を呈し、胎土に黒色・白色粒子を含む。II群土器は灰色味の強い青色を呈し、黒色粒子を多量に含む。この黒色粒子は、なで、削りによって墨をぼかしたようになるのが特徴となる。III群土器は硬質で粗砂粒を多く含むもの、IV群土器は灰白色で焼きが甘く、粉をふいたような胎土のものである。土師器は大部分がII群土器で、I群土器は極めて少ない。須恵器では、I群土器が最も多くII群土器がこれに次ぎ、III群・IV群土器はない。その他、以上の分類に属さない土器が須恵器には多量にあり、土師器にも少量見られる。必要がある場合以外、他の詳細な説明は省略する。

土器の記述は、まず遺構ごとに溝、土坑、井戸、柱穴の順に行ない、施釉陶器、統一新羅の陶質土器、硯・土馬などの土製品は最後にまとめた。また、墨書土器、刻線文・篋描き土器、漆附着土器などは別項を設けた。

- 図示にあたっては、実測図は、縮尺1/4を基本とし、適宜他の縮尺も用いた。実測図中の線は、稜線の他は、手法の変換点部位の境界の表現を主眼とした。写真は2/5を基本とし、1/2, 1/3, 1/5も用いた。実測図に付した番号は写真図版でも共通している。1～199は土師器、201～399は須恵器、施釉陶器・黒色土器・統一新羅陶器は400番台、硯などの特殊土製品は500番台とした。

大別名称	略年代
平城宮土器I	710 A. D.
平城宮土器II	725
平城宮土器III	750
平城宮土器IV	765
平城宮土器V	780
平城宮土器VI	800
平城宮土器VII	825

Tab. 7 平城宮土器の大別

## A SK 2001 出土の土器 (PL. 38)

十四坪の土坑 SK 2001 からは、整理箱で40箱に及ぶ大量の土器が出土した。土師器、須恵器ともに多様な器種にわたり、平城宮土器Ⅲの良好な資料<sup>1)</sup>である。また、須恵器壺類をはじめとして漆が付着したものが多く、漆工関係の遺物としても注目される。

**土師器** 杯A・杯B・皿A・皿B・皿C・碗A・碗C・碗D・鉢・高杯・盤・壺B・壺E・甕A・甕B・竈がある。多少の器種を欠くが、食器、貯蔵器、煮沸具の基本的なセットを揃える。I群土器はきわめて少なく、特に記したものを以外はすべてII群土器である。全体に風化、磨減が著しく、調整及び暗文の観察が困難なものが多いが、比較的明瞭に観察できるものに限って図示した。

杯A (1~3) 杯A I (1; 口径19cm)・杯A II (2・3; 口径16cm)・杯A III (口径14cm)がある。<sup>2)</sup> 1・2は a<sub>0</sub> 手法, 3は c<sub>0</sub> 手法で調整する。2は内面に螺旋+放射暗文(以下、「暗文」と略記する)がある。

皿A (4・5) 皿A I (口径 22 cm)・皿A II (口径 19 cm)・皿A III (4・5; 口径 17 cm) がある。a<sub>1</sub> 手法で調整し、内面に暗文がある。

皿C (8・9) 小型粗製の皿。e 手法で調整する。\*

碗A (6・7) 6は口径 12.0 cm, c<sub>0</sub> 手法で調整するII群土器の碗A III。7は口径 13.8 cm, c<sub>8</sub> 手法で調整するI群土器の碗A II。他に、碗A I (口径 19 cm)と思われる小片がある。

碗C (10・11) e 手法で調整する。口縁端部の形状は、内傾、直立、丸くおわるものの3種がある。

碗D (12) b<sub>0</sub> 手法で、口縁部のよこなで以下は削りで調整する。口縁端部は軽く巻き込む。\*

皿B (13) 復原口径 25.0 cm, 口縁端部を欠失する。内面に暗文がある。風化のため、外面の磨きの有無は不明。

高杯 (14・15) 14は杯部で、口径 29 cm。外面はヘラ磨きを行ない、内面に暗文がある。15は脚部で、I群土器である。10角形に面取りを行ない、内面には粘土紐巻上げ痕とシボリ痕を残す。\*

壺B (17) 粘土紐接合痕と指頭圧痕を顕著に残す小型粗製の壺。口縁部外面を一周よこなでする。内面に漆が付着するものがある。

壺E (16) 外面を丁寧なヘラ磨きし、胎土も精選した小型精製の壺。

甕 (18・19) 口径 30 cm 前後の大型品(19)と口径 16 cm 前後の小型品(18)がある。風化が著しいが、外面は頸部以下に縦刷毛、口縁部内面に横刷毛をほどこす。漆が付着する例がある。\*

**須恵器** 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯L・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・鉢A・高杯・壺A・壺A蓋・壺B・壺E・壺G・壺H・壺K・壺L・壺P・壺X・水瓶・平瓶・甕がある。貯蔵器である壺類の個体数が非常に多いのが特徴である。

杯A (221・222) 杯A I (口径 20 cm)・杯A II (221; 口径 16 cm)・杯A III (222; 口径 12 cm)に分かれる。すべてI群土器で、底部はヘラ切り不調整。221は、底部内面に焼成後に\*

1) 個体数の算出も可能であり、詳細は後述する(p. 105参照)。

2) 口径は個体数が少ないため、平均値ではなく、概略の値を記した。

刻んだ3本の刻線がある。

杯 B (209~216) 杯 B I (口径 20 cm)・杯 B II (209・210・213; 口径 13 cm)・杯 B III (211・212; 口径 13 cm)・杯 B IV (214・215; 口径 10 cm)・杯 B V (216; 口径 8 cm) に分かれる。209 は体部下半に丸みがあるが、他は口縁部まで直線的に立ち上がる。高台は、端部が

- \* わずかに内傾するもの (210・214) と平坦なものがある。212・214は灯火器として使用し、211 は口縁部に漆が付着する。I 群・II 群土器ともにあり、比率は 9:1 である。

杯 B 蓋 (201~208) 口径により、杯 B I 蓋 (201・202)・杯 B II 蓋 (203・204)・杯 B III 蓋 (205・206)・杯 B IV 蓋 (208)・杯 B V 蓋があり、それぞれ杯 B I~杯 B V に対応する。杯 B IV 蓋・杯 B V 蓋の端部は下方に鋭く突出するが、杯 B I 蓋~杯 B III 蓋はやや丸みをおびる。口縁

- \* 部が湾曲するものは少ない。207 は金属器を模したもので、つまみは円環状の形態になる。I 群・II 群土器ともにある。

杯 C (219) 土師器杯 A の形態を模したもので、口縁端部が内側に巻き込む。体部下半にはロクロを利用した強いなでを行なう。I 群・II 群土器ともにみられる。

杯 L (217・218) 杯 B に似た形態を持つが、器高が低く、口縁部が外湾する。

- \* 皿 B (224) 口径 20~30 cm の大型品。すべて I 群土器。

皿 B 蓋 (223) II 群土器で、外面をロクロ削りする。縁部のみ残存する。

皿 C (220) 平坦な口縁端部である。火襻を残すものがある。すべて I 群土器。

壺 A (226) 球形の胴部に直立する短い口縁を付したもので、蓋 (225) が伴う。内面に漆が付着したのものがある。

- \* 壺 B (230) 直立する短い口縁部と比較的平坦な肩部をもち、体部と胴部の境は鈍い稜をなす。体部外面全体に自然釉が厚くかかり、内面はなで調整を行なうが、叩きの当て具の痕跡が残る。愛知県猿投窯址の製品。

壺 G (233) 直立する胴部に細い口頸部を付す徳利形の器形。底部に糸切り痕を残す。

壺 H (232) 肩に稜をもつ体部に、外反する口縁部を付した広口の壺。

- \* 壺 K (229) 肩の張る体部に、外反する長い口縁部を付す器形。口縁部、体部ともに多量に出土したが、互いに接合する例はきわめて少ない。自然釉がかかるものが多い。ほとんどすべての個体に漆が付着する。器形、高台の形状、胎土ともに多くの変異がある。

壺 L (231) 球形の体部に、外反する口縁部を付す器形。内面に漆が付着。

- \* 壺 P (227) 肩に稜をもつ鐘形の体部に外反する口縁部を付す器形。図示した例は、断面に漆が付着しており、漆の使用状況を復原する一つの手がかりとして興味深い。平城宮跡での出土例は少ないが、平城京内では前川遺跡<sup>1)</sup>(左京九条一坊)などに類例を求められる。

- \* 壺 X (228) 従来の分類にはあてはまらない器形。樽形の体部に、直立する短い口縁部を付す。胎土には多量の砂粒を含み、焼成も不良なために見て土師器のような外観を呈す。底部にはヘラ切り痕を残すが、底部外周は手持ち削りで仕上げる。完形で出土し、内面全体に多量の漆が付着する。産地は不明。いわゆる「ロクロ土師器」である可能性もある。

甕 (234) 小破片が多く、完形に復せる例はない。壺に比較して3分の1の出土量しかない。内面に漆が付着するものがある。

1) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告書』1974, PL. 23-85。

## B SD1500 出土の土器 (PL. 39)

十三坪と十四坪を画する坪境小路の北側溝 SD1500 からは、整理箱50杯に及ぶ大量の土器が出土した。そのほとんどが土師器と須恵器で、ごく少量の黒色土器・施釉陶器を含む。土器は上下3層に分層して取り上げた。しかし、出土状況を見ると、上層～最下層にわたり平城宮土器Ⅰ～Ⅴの土器が混在し、かつ層位をこえて接合する例もあることから、一括して記述する。 \*

### 土師器

土師器の出土量は整理箱で約30箱である。供膳形態、貯蔵形態、煮沸形態のほとんどすべてにわたる器種があり、出土量が多いことと合わせて当遺跡における土器の使用状況の一端を知ることができる。しかし短期間の様相を示すものではないという資料的制約から、個体数の算出は省略した。Ⅰ群・Ⅱ群土器ともにみられるが、Ⅰ群土器はきわめて少なく、文中で特に記したものの以外はすべてⅡ群土器である。以下、特徴的なものを中心に、器種ごとに記述を行なう。 \*

杯A (20～23) 法量により、杯AⅠ (20・21)・杯AⅡ (23)・杯AⅢ (22) に分けられる<sup>1)</sup>。平城宮土器Ⅰ～Ⅴにわたって多量に出土した。20は b<sub>1</sub> 手法で調整する平城宮土器Ⅱに属し、22・23は a<sub>0</sub> 手法の平城宮土器Ⅲにあたる。21は a<sub>0</sub> 手法で調整し、内面に暗文はない。胎土に角閃石を含み、河内地方の産であろう。 \*

杯B (34) 内面に螺旋+放射二段暗文を持つ平城宮土器Ⅰ。他に、平城宮土器Ⅱ～Ⅳのものも出土している。

杯C (33) a<sub>1</sub> 手法で調整。内面に暗文がある。

皿A (24～32) 皿AⅠ (27～29)・皿AⅡ (24～26)・皿AⅢ (30～32) がある。a 手法、b 手法、c 手法が見られ、内面に暗文をもつものもある。 \*

皿B (52・53) 52は放射二段暗文があり、b<sub>2</sub> 手法で調整する平城宮土器Ⅰ。53は a<sub>0</sub> 手法で調整し、平城宮土器Ⅲに属する。

皿C (35～38) e 手法で調整する小型の皿。皿CⅠ (37・38)・皿CⅡ (35・36) がある。

椀A (41～43) 椀AⅡ (41)・椀AⅢ (42・43) がある。平城宮 6ABO 地区 SK820 で、椀AⅠとした口径 20 cm を越える大型品はみられない<sup>2)</sup>。41・42はⅠ群土器で、c<sub>8</sub> 手法で調整する。43は c<sub>0</sub> 手法で調整するⅡ群土器。 \*

椀C (39・40) 口縁部を一周よこなでし、以下は不調整。口縁部の形状、胎土に個体ごとの差が認められる。。

鉢B (47) b<sub>0</sub> 手法で調整。口縁端部は内側に巻き込む。

高杯 (54～57) 54は螺旋+放射+連弧暗文のある平城宮土器Ⅱ。杯部と裾部の外面にヘラ磨きを施す。脚部内面の下半に削りを施すが、上半には接合時のしぼり痕が残る。56・57は脚部の破片で、前者は平城宮土器Ⅲ頃、後者は平城宮土器Ⅴに比定できる。57の裾部内外面には、よこなでを施す前の刷毛調整の痕跡があり、脚部内面には成形の際の粘土紐巻上げ痕が残る。 \*

盤B (49) 底部内面に螺旋暗文、口縁部付近に放射暗文があるが、風化が著しいため、その \*

1) 時期により各器種の法量は変化するので、数値は省略する。なお、各器種の時期別の法量については、奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅶ』別表6 土器法量変遷表を参照されたい。  
2) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅶ』p. 78。

間に関しては不明。把手の剥落痕があるが、高台はないと思われる。

壺A (48) 肩部の2箇所把手をもち、外面を丁寧にヘラ磨きする。同一個体の口縁部破片と底部破片から図上復原した。

壺B (44) 小型粗製の壺。内外面に成形時の指頭圧痕が残る。

- \* 壺E (45・46) 外面を丁寧にヘラ磨きする。砂粒をほとんど含まない精選された胎土である。

鍋 (50) 内面と口縁部外面をよこなでし、体部は不調整。出土量は少ない。

甗 (51) 外面は体部下半まで縦刷毛、それ以下によこなでをほどこす。2箇所についた把手は柱状の形をしており、珍しい例である。

甗 (58・59) 58は体部があまり張らずに最大径が口縁部にある器形で、外面に縦刷毛、内面

- \* には下から上方向への削りをほどこす河内型の甗である。59は2箇所に把手がつく甗B。体部下半まで縦方向、それ以下は不定方向の刷毛目をほどこす。

他に、杯B蓋、皿B蓋、竈が出土している。

### 須恵器

須恵器も供膳形態、貯蔵形態の器種をほぼそろえるが、土師器と同様の理由から個体数の算

- \* 出は行なわない。以下、器種ごとに説明を行なう。

杯A (235~242) 法量により、杯A I・杯A II・杯A III・杯A IVに分かれる。I群・II群土器ともにみられる。ほとんどの個体は底部がヘラ切り不調整のまま、あるいは、その後になでを加えたものであるが、241はヘラ削りを行なう。236は、底部外面に墨書がある。

- \* 杯B (254~261) 杯B I・杯B II・杯B III・杯B IVがある。高台は、端部が外傾するもの、平坦なもの、内傾するものがある。259・260は底部外面を硯として使用。

杯B蓋 (243~253) 杯B I蓋~杯B IV蓋があり、それぞれ杯B I~杯B IVに対応する。縁部は屈曲するものとしなないものがあり、端部は丸みを帯びるものと鋭く下方に突出するものがある。I群・II群土器がみられ、平城宮土器I~Vにわたる。251は内面に朱が付着する。249は円環状のつまみを有するもので、金属器の模倣形態である。

- \* 杯E (267) 底部を欠失。口縁端部はわずかに内傾する。I群土器。

皿C (268・269) 口縁端部が外傾する。264は底部に墨書がある。

皿D (264・265) 皿Cに高台を付したもの。重ね焼きの痕跡が残る。

皿E (262・263) 口径 10 cm 前後の小型の皿。焼成は不良で、灰白色を呈する。灯火器として使用。

- \* 高杯 (266) 杯部の破片。外面下半をロクロ削りする。他に、脚部の破片も出土している。

鉢D (275) 外反する短い口縁部と肩の張る胴部からなる。体部下半をロクロ削りする。

壺A (272) 球形の体部に短い直立する口縁部を付したもの。肩部には自然釉がかかり、蓋との重ね焼きの痕跡がある。体部下半は、ロクロ削りを行なう。

壺A蓋 (270・271) 壺A I蓋 (270; 口径 19 cm), 壺A II蓋 (271; 口径 13 cm) がある。

- \* 壺A I蓋は口径 19 cm で、13 cm 前後のものが一般的なのに比べてかなり大きく、珍しい例である。

壺C (273) 扁平な球形の体部に、短い直立する口縁部を付した小型品。類例は少ない。

壺E (274) 短い口縁部と狭い肩部をもつ広口の壺。

壺G (280) 胴長の体部に長い口頸部を付す器形。底部に回転糸切り痕が残る。

壺M (278・279) 球形の体部に短い口頸部を付す小型の壺。ロクロ水挽成形。280は、底部に成形段階では穴があいていたが、それを最終整形でふさいでいる。

壺Q (276) 肩の張る体部に外反する口頸部を付す器形。体部下端にロクロ削りを行なう。口縁端部を欠失する。 \*

壺X (277) 平底で、球形の体部である。体部に1箇所、焼成前の穿孔がある。体部下半はロクロ削りをし、底部は糸切り不調整。肩部には自然釉がかかる。外反する短い口縁部を付した壺Lに近い形態になると思われる。類例は左京九条三坊十坪でも出土している<sup>1)</sup>。

平瓶 (281・282) 扁平な体部で、把手を付す。口縁部は欠失。胴部下半をロクロ削りする。281は、自然釉が降着する。 \*

甕A (283) 外反する口縁部を付す器形。端部は丸くおさめる。胴部外面は格子目叩きの上にカキ目をほどこす。

甕B (284) 内湾気味に開く口縁部で、端部は内傾する。体部外面は格子目叩きの上にカキ目をほどこし、内面は当て具痕を軽くなで消している。

他に、杯C・皿A・皿B・皿B蓋・鉢A・盤・壺D・壺H・壺K・壺L・水瓶・横瓶がある \*  
が、小破片のものが多いため図示は省略した。

また、坪境小路南側溝 SD1495 からも、整理箱20箱におよぶ土器が出土した。ほとんどが土師器と須恵器で、少量の黒色土器を含む。器種構成、および出土状況ともに坪境小路北側溝 SD 1500 出土土器に近似するので、詳しい記述は省略する。

## C SD 1387・1440・1345 出土の土器 (Fig. 44) \*

**SD 1387 出土土器** 十三坪を東西に2分する坪内道路 SF1320 の西側溝である。土師器と須恵器が出土し、数量・器種は少ないものの、ほぼ平城宮土器Ⅲの範疇でとらえられる。

**土師器** 杯A (60~63)・皿A (64)・碗C (65)・甕 (66・67)・などがある。杯A・皿Aはa<sub>0</sub>手法で調整するものが多いが、63はb<sub>0</sub>手法である。内面は風化のために、調整の観察が困難だが、暗文をもつものがある。甕は、内外面の剝離がいちじるしいが、外面に縦刷毛、内面に横刷毛の痕跡を残す。 \*

**須恵器** 杯A (290)・杯B (287~289)・杯B蓋 (285・286) などがある。

杯Bには、杯BⅡ・杯BⅢ・杯BⅣ、杯B蓋には杯BⅢ蓋・杯BⅣ蓋がある。I群土器・II群土器ともにみられる。

**SD1440 出土土器** 坪境小路南側溝 SD 1495 の南方2mにあり、SD 1387のすぐ東方から始まる。検出した総長は短い、土師器・須恵器ともに出土量、器種が豊富で、平城宮土器Ⅱ~Ⅲの好資料である。 \*

**土師器** 杯B (69) は口縁部まで直線的に外反して立ち上がり、外面に密なヘラ磨きをほどこす。内面は、放射暗文は確認できるが、螺旋・連弧暗文の有無は風化のため不明。杯B蓋 (68) は、復原径25cm。同一個体の口縁部と体部の破片から図上復原した。外面には4方向 \*

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』1986, fig. 19-9, PL. 18-2.

の密なヘラ磨きをもつ。杯C (73) は、 $a_0$  手法で調整し、内面に暗文がある。皿A (74)・鉢B (70) は  $a_0$  手法、椀C (71) は  $e$  手法で調整する。盤A (75) は  $c_3$  手法で、把手及び内面の暗文を施さない。高杯 (72) は杯部の破片。風化がいちじるしいので詳しい調整は不明だが、内面に暗文をもつ。すべてⅡ群土器。

- \* 須恵器 杯A (295)・杯B (293)・杯B蓋 (294)・椀B (292)・壺C (291)・甕がある。椀Bは、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、低く細い高台を付す。壺Cは、肩部に2条の沈線を入れる。

**SD 1345 出土土器** 十三坪の西半分をさらに東西に分割する地割溝である。出土土器には、若干の時期幅があるが、ほぼ平城宮土器Ⅲまでにおさまる。

- \* 土師器 杯A (81・82)・杯C (79)・皿A (76・77)・皿C (80)・鍋A (78)・甕がある。81は、 $a_0$  手法で調整し、内面に放射二段暗文をもつ平城宮土器Ⅰ。82は  $b_0$  手法で調整。鍋Aの体部外面には、多方向の刷毛目をほどこす。76は灯火器として使用。

須恵器 杯A (299)・杯B (297・298・302)・杯B蓋 (296・300・301)・壺・甕がある。杯B蓋は、すべて縁部が屈曲しない笠形の形態をなす。297には、焼成前の穿孔がある。

## \* D 土坑出土の土器 (PL. 41・Fig. 45)

調査区全域にわたって検出した多数の土坑から、大量の土器が出土した。ここでは、工房関係遺物に共伴した土器や時期的にまとまっているものを中心に述べる。

**SK 2078 出土土器** (PL. 41—83~89・303~305) 十四坪の中央やや西寄りにある土坑。平城宮土器Ⅱの特徴を示す。土師器杯A (83・84)・杯C (85・86)・皿A (88)・壺蓋 (87)・鍋 (89)、

- \* 須恵器杯A (303)・杯B (305)・杯B蓋 (304) などがある。83・84は  $a_3$  手法で調整し、内面に螺旋+放射+連弧暗文がある。85は外面に墨痕がある。

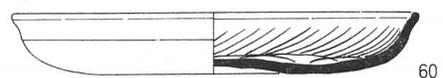
**SK 1322 出土土器** (PL. 41—90~97・306~319) 十三坪の中央付近にある不整形な土坑。平城宮土器Ⅲの特徴を示す。遺物の保存状況は全般に不良で、特に土師器では手法などの観察が困難なものが多い。土師器は、杯A (91・92)・皿A (93)・皿C (94)・鉢B (95~97)・壺蓋

- \* (90)・甕などがある。杯Aは、 $a_0$  手法・ $b_0$  手法で調整し、内面に暗文がある。皿Aは磨滅のため、暗文の有無は不明。鉢Bの口縁端部は内側に巻き込むもの (95~96) と尖るもの (97) がある。壺蓋の口縁端部は内側に軽く巻き込む点で、一般のものやや異なる。杯Aを倒立させた形態に近いが、底部と体部の境に稜をもち、外面全体を丁寧に磨く。須恵器は、杯A・杯B (309~311)・杯B蓋 (306・307)・杯E (312)・杯L (308)・皿A (313・314)・皿C (315)・壺E (317)・壺K (319)・壺M (318)・甕などがある。ほとんどがⅠ群土器で、Ⅱ群土器は僅少である。杯B蓋は、縁部が屈曲せず、笠形の形態をとる。杯Eは口縁端部が内傾し、杯Lでは外湾する。ともに金属器の模倣形態である。壺Kは、肩部以下をロクロ削りする。

**SK 1373 出土土器** (PL. 41—98~101・320~328) 十三坪の坪内道路 SF 1320 の上に掘られた

- \* 土坑で、石帯を伴出した。平城宮土器Ⅴの一括資料であるが、保存状態は良くない。土師器は、杯A・皿A (98~100)・皿B (101)・甕などがある。すべてⅡ群土器で、皿Aは  $b_0$  手法、

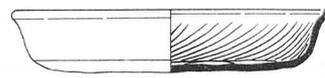
S D1387



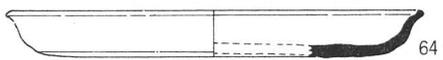
60



61



62



64



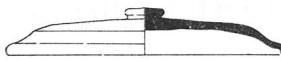
65



63



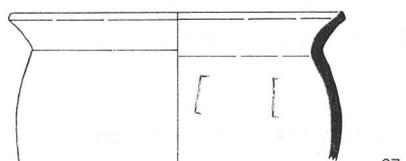
66



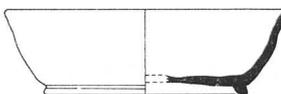
285



286



67



287



288



290



289

S D1440



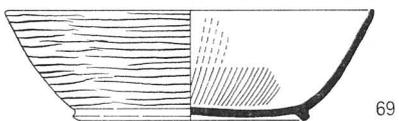
68



71



73



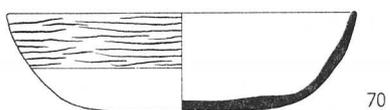
69



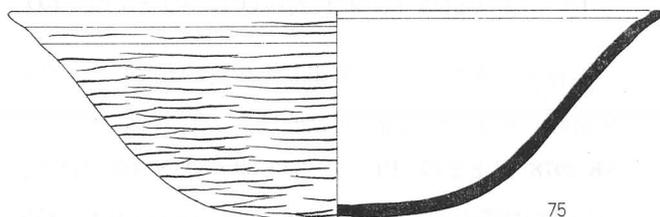
72



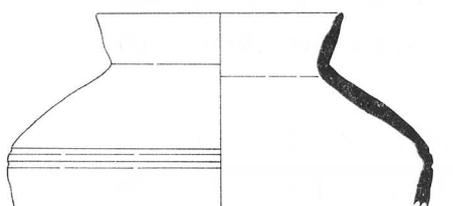
74



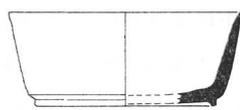
70



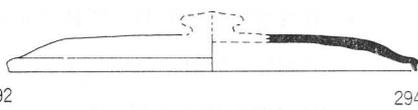
75



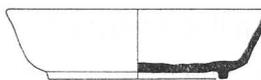
291



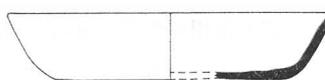
292



294

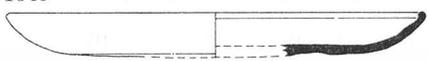


293



295

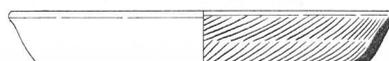
S D1345



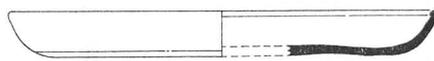
76



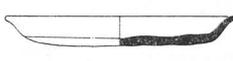
79



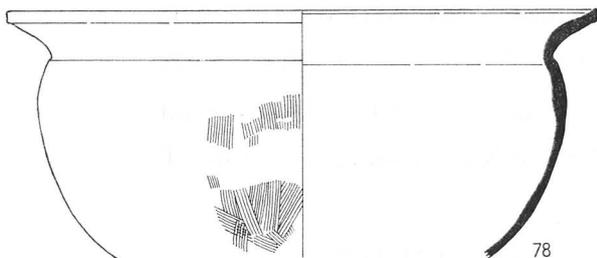
81



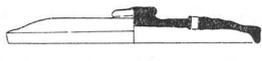
77



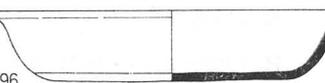
80



78



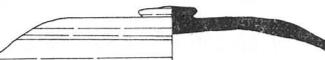
296



82



297



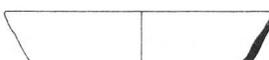
300



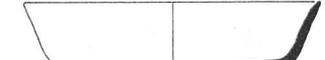
298



301



299



302

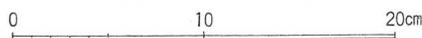


Fig. 44 SD 1387・1440・1345出土の土器

c<sub>0</sub> 手法、皿Bは b<sub>1</sub> 手法で調整する。皿Bの外傾指数<sup>1)</sup>は43で、外反が強い。須恵器は、杯A (324)・杯B (327)・杯B蓋 (325・326)・皿A (320)・鉢D (322)・壺E (321)・壺L (323)・盤 (328)・甕・杯Bなどがある。器種・法量ともにバリエーションが少ない。皿Aは底部と体部の境界が屈曲せず、ゆるやかに移行する。

- \* **工房関係の土坑出土の土器** (Fig. 45—102~123・329~338) 十四坪の中央部周辺には、埋土に炭化物を含む土坑が密集している。そのなかから、埴塼、鞆羽口、鉢滓などとともに少量の土器が出土した。これらは、工房に係る遺物としてとらえることができる。102~110, 329~331はSK1910出土。土師器は保存が悪く、調整、及び暗文の不明なものが多い。壺蓋(108)は、つまみ本体は残存しないが、剥落痕跡から板状のものであることがわかる。甕B(107)は内面と体部上半に刷毛目、体部下半に削りをほどこす。須恵器の出土量は、土師器に比して少ない。皿E(330)は灯火器として使用。椀B(331)は細い高台を付す。平城宮土器Ⅱ~Ⅲ。111~116はSK1773出土。保存状態は良くないが平城宮土器Ⅱのものともみられる。椀C(115)はⅠ群、Ⅱ群以外のもので、乳褐色を呈する緻密な胎土で、厚手である。杯E(114)はc<sub>1</sub>手法で調整。杯AⅠにⅠ群土器が1点ある。117~119, 333~335はSK1845出土、336はSK1824出土、120~122はSK1908出土、123・337・338はSK1942出土。いずれも平城宮土器Ⅱのものである。SK1824からは帯金具の未製品も出土している。117・118はc<sub>0</sub>手法、120・123はb<sub>1</sub>手法で調整する。高杯(119)の裾部内外面には刷毛目が残る。337はSK1831出土の破片と接合した。

**SK1775 出土土器** (Fig. 45—124~126・339~341・401) 十四坪の中央やや南方で検出した小

- \* 土坑。上部がすり鉢状で、下部は垂直に落ちる形状を呈する。遺物は主として上部から出土。十四坪中央部の土坑はほとんどが平城宮土器Ⅱ・Ⅲのものに限られるが、SK1775のみは平城宮土器Ⅴである。土師器は、杯Bが1個体、皿Cが1個体、甕が3個体、鏝甕が1個体、竈が1個体出土した。鏝甕(126)は胎土に粗い砂粒を大量に含み、茶褐色を呈する、いわゆる生駒西麓の胎土である。須恵器は、杯Aが2個体、杯Bが3個体、杯B蓋が3個体、壺Aが1個体、甕が4個体出土した。ほとんどがⅠ群土器で、Ⅱ群土器は杯Aに1個体ある。401は内面のみが黒い黒色土器A類の鉢Aで、内外面ともに丁寧な磨きをほどこす。

## E 柱穴出土の土器 (Fig. 45)

- 土坑・溝に比較して、柱穴出土の土器はきわめて少量、かつ小片である。ここでは、復原可能で、時期がある程度判別できるものに限って図示した。127は、SB1545出土の土師器高杯
- \* 脚部。Ⅱ群土器で、杯部と裾部を失う。奈良時代後半のもの。128・342はSB1326の柱抜取り穴から出土した。128は土師器皿Aで、c<sub>0</sub>手法で調整。342は須恵器壺蓋で、つまみを欠失する。奈良時代後半。129はSB1403出土の土師器皿AⅠ。b<sub>0</sub>手法で調整するが、風化のため内面の暗文の有無は不明。平城宮土器Ⅲか。334はSB1404の柱抜取り穴から出土した須恵器杯B。Ⅰ群土器で、高台端面は内傾する。130はSB1478出土の土師器盤B。c<sub>3</sub>手法で調整し、内面に螺旋暗文をほどこす。奈良時代後半か。

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅱ』p. 91参照。

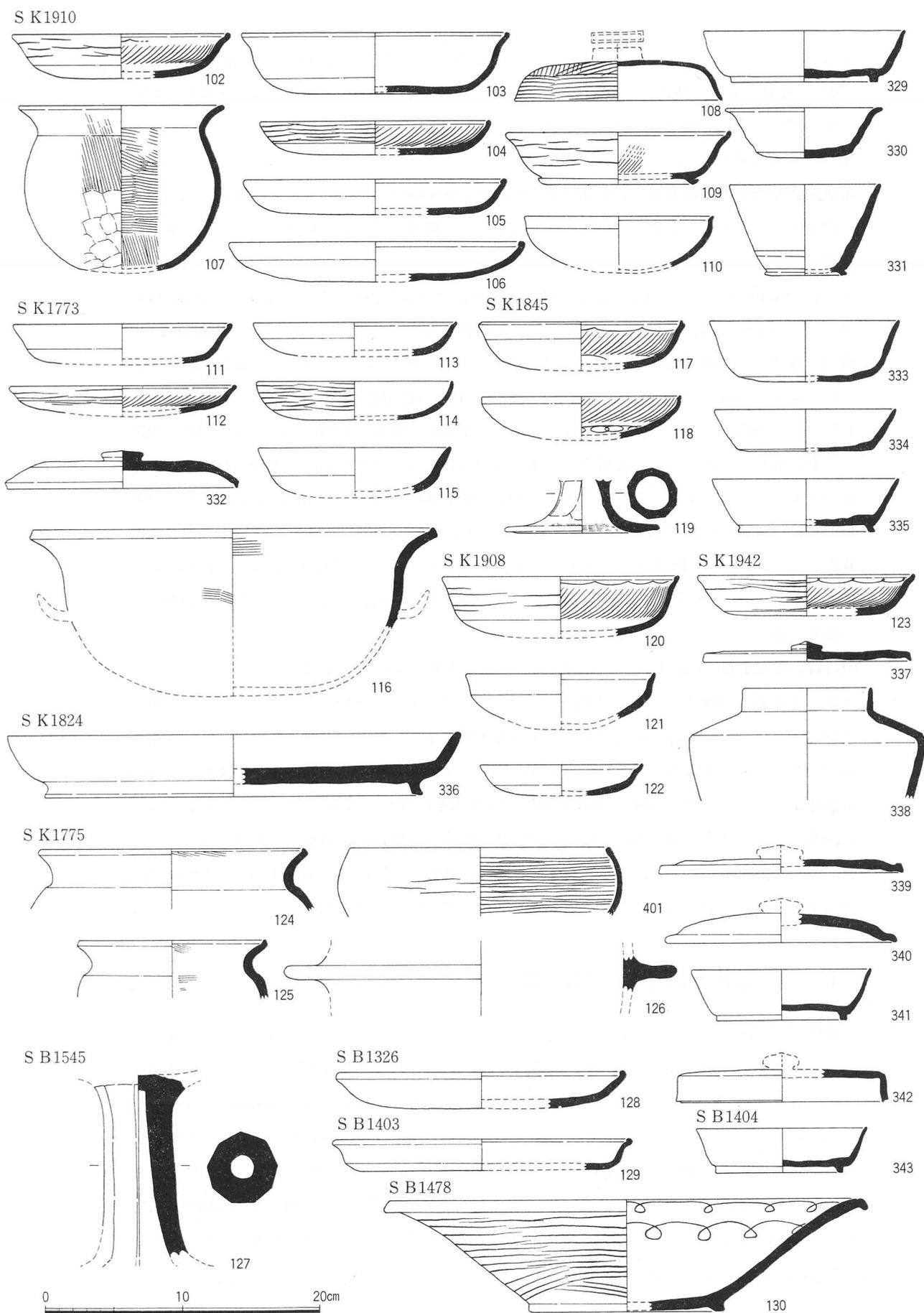


Fig. 45 土坑・柱穴出土の土器

## F 井戸出土の土器 (PL. 42, Fig. 46)

十三坪で7基, 十四坪で12基の計19基奈良時代の井戸を検出し, 多量の土器が出土した。土器は, 主として井戸枠内, および井戸枠採取穴から出土し, 井戸掘形に含まれている土器は概して少量かつ小破片である。出土した土器を通覧すると, 完形品の数量が多いこと, 井戸ごとに器種構成に変化がみられるという特徴がある。そのため, 図化が可能なものはできるだけ図示し, 内容の把握が容易になるようにつとめた。以下, 出土土器の器種・年代を中心として, 井戸ごとに記述を行なう。

**SE 1305 出土土器** (PL. 42-362) 掘形からは, 土師器碗A, 井戸枠内からは土師器杯A・杯B蓋, 須恵器壺A (362) が出土した。掘形の土器は平城宮土器 III, 井戸枠内の土器は平城宮土器IV~Vに属する。

**SE 1315 出土土器** (PL. 42-144~149・354~361) 掘形からは, 土師器杯A (144・145)・皿A・蓋・碗A (146)・碗C (147)・鉢B・甕・竈, 須恵器杯A・杯B (354)・杯B・皿C・皿E (355)・鉢A・壺A・壺A蓋・横瓶・平瓶・製塩土器が出土した。ほとんどが破片となっているが, 器種・数量ともに比較的豊富で, 他の井戸の掘形から出土する土器が断片的であるのに比べて, 特異な存在である。土師器杯Aに連弧暗文のある個体があり, 平城宮土器II~IIIにあたる。井戸枠内底部直上からは, 土師器皿C (148), 須恵器杯B蓋 (357) が出土した。その上部の灰黒粘土層からは, 土師器杯A・皿A (150)・皿C (149)・碗A・甕・竈, 須恵器杯A・杯B (356)・鉢A・壺L (361)・壺M (359)・横瓶 (360), 製塩土器が出土した。148・149は灯火器として使用。底部直上の土器は平城宮土器IV, 灰黒粘土層のものは平城宮土器Vに属する。

**SE 1335 出土土器** (Fig. 46-151~156) 掘形からは, 土師器杯Aが出土した。井戸枠内からは, 土師器杯A I (151)・杯A II (152)・皿A (153・154)・碗C (155・156)・高杯, 黒色土器A類が出土した。151は c<sub>3</sub> 手法で調整する。156は, 内面に工具の先端の痕跡が残る。掘形の土器は平城宮土器II, 井戸枠内の土器は, 平城宮土器IV~Vに属する。

**SE 1360 出土土器** (Fig. 46-370) 掘形から, 平城宮土器II~IIIの土師器小片と製塩土器, 井戸枠内からは, 平城宮土器Vの須恵器杯B (370) が出土した。

**SE 1365 出土土器** (Fig. 46-157~170・364~369) 掘形から, 須恵器皿Cが出土した。井戸枠内からは, 土師器杯A II (163~166)・杯C (167)・皿A (168・169)・皿C (159・160)・碗A (157・158)・碗C (170)・鉢B (161)・甕 (162), 須恵器杯A (364・365)・杯E (367)・杯L (366)・皿C・壺Mが出土した。169は b<sub>3</sub> 手法で調整。159・160は灯火器として使用。159は内外面全面に厚く煤が付着する。掘形の土器は平城宮土器II~III, 井戸枠内の土器は, 平城宮土器IIIを主体にIV・Vもある。

**SE 1375 出土土器** (Fig. 46-363) 掘形からは, 土師器杯A, 須恵器壺A (363)・壺M・杯B蓋, 製塩土器, 井戸枠内からは, 土師器皿C・高杯・須恵器壺Mが出土した。掘形の土器は平城宮土器III, 井戸枠内の土器は, 平城宮土器III及びVに属する。

**SE 1385 出土土器** (Fig. 46-172~174・371・372) 掘形には土師器杯A, 須恵器杯B蓋, 製塩土器がある。井戸枠内からは土師器杯A・碗A・甕 (172~174), 須恵器壺L・壺M (371・

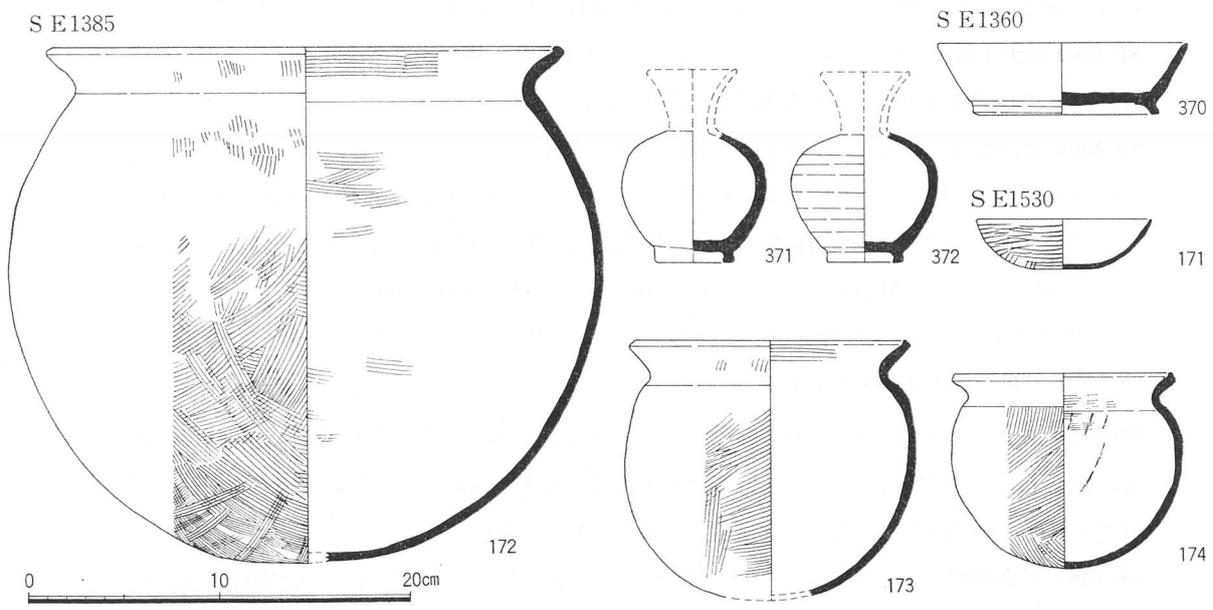
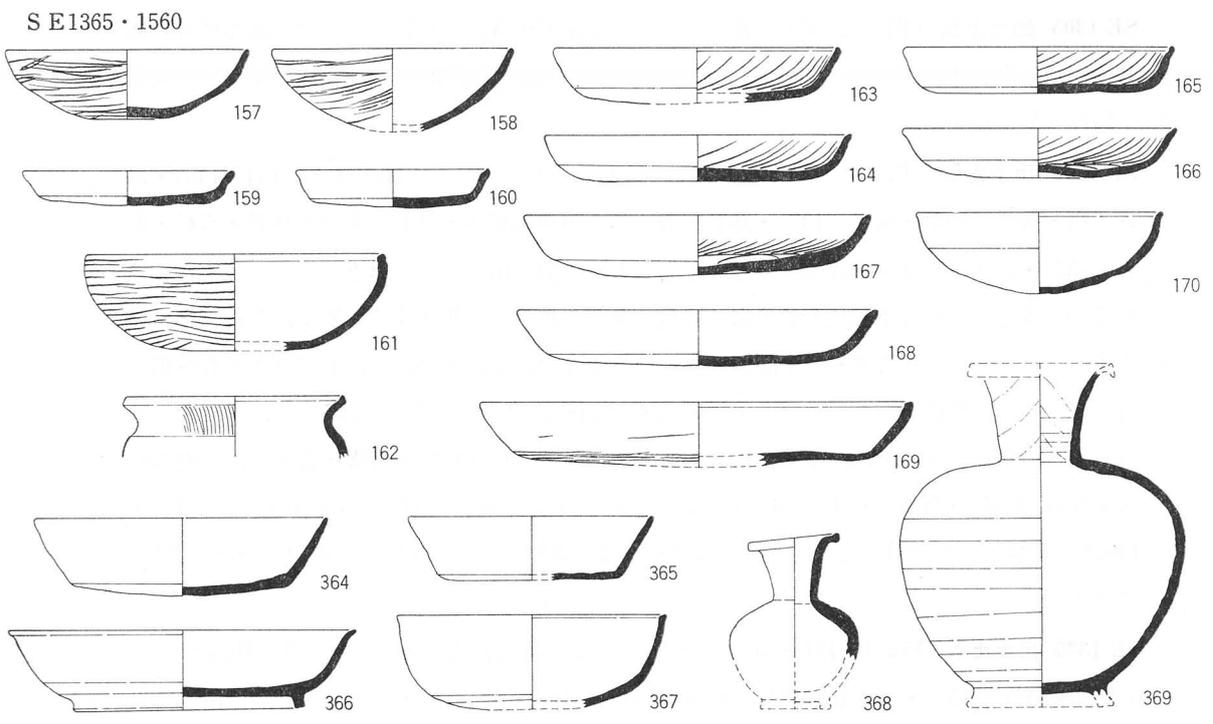
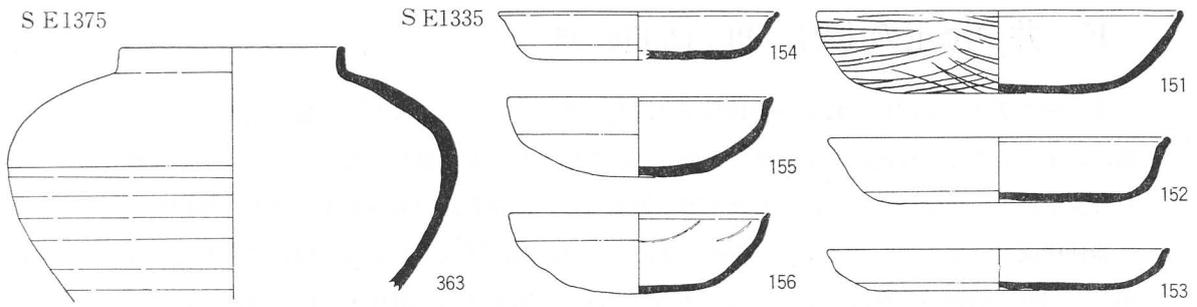


Fig. 46 SE 1375 · 1335 · 1365 · 1560 · 1385 · 1360 · 1530 出土の土器

372) が出土した。土師器甕の出土量が多い。173 は、底部に焼成後の穿孔がある。また、174 は外面全体に厚く煤が付着する。372 は、体部をロクロ削りする。掘形の土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、井戸枠内の土器は平城宮土器Ⅱ及びⅤに属する。

**SE 1530 出土土器** (Fig. 46-171) 掘形から土師器杯A、須恵器杯A・杯B、製塩土器、井戸枠  
\* 内から土師器杯A・碗A (171)、須恵器壺M、製塩土器が出土した。掘形の土器は平城宮土器Ⅰ～Ⅱ、井戸枠内の土器は平城宮土器Ⅴに属する。

**SE 1550 出土土器** (PL. 42-131～136・344～347・402) 掘形からは、製塩土器などが出土した。平城宮土器Ⅲか。井戸枠内から土師器杯A・杯B蓋 (134)・皿A (135～136)・碗AⅡ (133)・碗AⅢ (131・132)、須恵器杯A (347)・杯B (344～346)・杯B蓋、壺M、黒色土器A類碗  
\* (402)、製塩土器が出土した。碗Aのうち、131は a<sub>3</sub> 手法、133は c<sub>3</sub> 手法、132は c<sub>0</sub> 手法で調整する。131の底部には木の葉の圧痕がある。132は口縁部に煤が付着し、灯火器として使用している。また、135の底部内面には一定方向の刻線があり、俎板に転用したものと思われる。402は、e 手法を削った b<sub>3</sub> 手法による。土器は、上下4層に分層して取上げたが、平城宮土器Ⅳ・Ⅴのものが混在し、層位との整合性は明確でない。133・136・344・346・347・402が最下  
\* 層の暗灰色砂質土 (第4層)、それ以外が上部の粘土層 (第2・3層) から出土した。

**SE 1555 出土土器** (PL. 42-138～143・348～353) 掘形には製塩土器があり、井戸枠内からは土師器杯A (138・139)・皿C (140・141)・碗A・甕 (142)・小型甕 (p. 103 註1) 参照・罌甕 (143)、須恵器杯A (348)・杯B・杯B蓋・皿C・壺A (351)・壺L (349・350)・甕 (353)、製塩土器が出土した。348は底部を硯として使用している。掘形の土器は平城宮土器Ⅱ以降か。  
\* 井戸枠内の土器は平城宮土器Ⅲ・Ⅳ及びⅤに属する。

**SE 1560 出土土器** (Fig. 46-368・369) 掘形から土師器杯A、製塩土器、井戸枠内から土師器碗A・高杯、須恵器壺L (369)・壺M (368) が出土した。

**SE 1700 出土土器** 掘形からは土師器高杯・盤B (または壺A)・甕、須恵器杯A・平瓶・壺または甕、製塩土器、井戸枠内から土師器碗C・高杯・甕・須恵器杯A・杯B・杯B蓋、井戸枠  
\* 抜取穴から土師器杯A・杯C・皿C・碗A・碗C・甕、須恵器杯A・杯Bが出土した。

**SE 1867 出土土器** (Fig. 47-175～181・373～377) 掘形から、土師器甕、須恵器杯B・杯L・壺、製塩土器、井戸枠内から土師器杯C (178)・皿A・皿C (175)・碗A・碗C (179)・鉢B (180・181)・高杯 (176・177)・小型甕、須恵器杯B (376)・杯B蓋 (373)・皿C・壺L (374・375)・壺Q (377)・甕、製塩土器が出土した。175は、内面に刻線がある。また、口縁部の  
\* 2箇所に煤が付着し、灯火器として使用している。177の裾部内面にも煤が付着し、倒立させて灯火器として使用したものと思われる。375の高台内面には墨書がある。また、須恵器壺には漆が付着したのものがある。掘形の土器は平城宮土器Ⅱ以降、井戸枠内の土器は平城宮土器Ⅲ・Ⅳ及びⅤに属する。

**SE 1870 出土土器** (PL. 42-137, Fig. 47-182・378) 掘形から土器は出土していない。井戸枠  
\* 内から土師器甕 (137)、須恵器横瓶 (378)、井戸枠の抜取穴から土師器杯A (182)・杯C・皿C・盤、須恵器杯B蓋が出土した。皿Cには漆が付着する。井戸枠抜取穴の土器は平城宮土器ⅡまたはⅢに属する。

**SE 1880 出土土器** 掘形から土師器杯A・皿A・鉢・盤・壺・甕・竈、須恵器杯B蓋、井戸枠

抜取穴から須恵器杯B・皿E・甕が出土した。掘形の土器は平城宮土器Ⅰ～Ⅲ頃。

**SE 1917 出土土器** 掘形・井戸枠内に土器はなく、井戸枠抜取穴から土師器杯A・皿A・鉢B・高杯、須恵器杯A・杯B蓋が出土した。

**SE 2019 出土土器** 井戸枠内から、平城宮土器Ⅱの土師器杯A・皿A・高杯が出土した。

**SE 2020 出土土器** 井戸枠内から、平城宮土器Ⅱ～Ⅴの土師器皿Cや黒色土器が出土した。\*

**SE 2070 出土土器** 井戸枠内から須恵器壺類の体部破片が出土した。

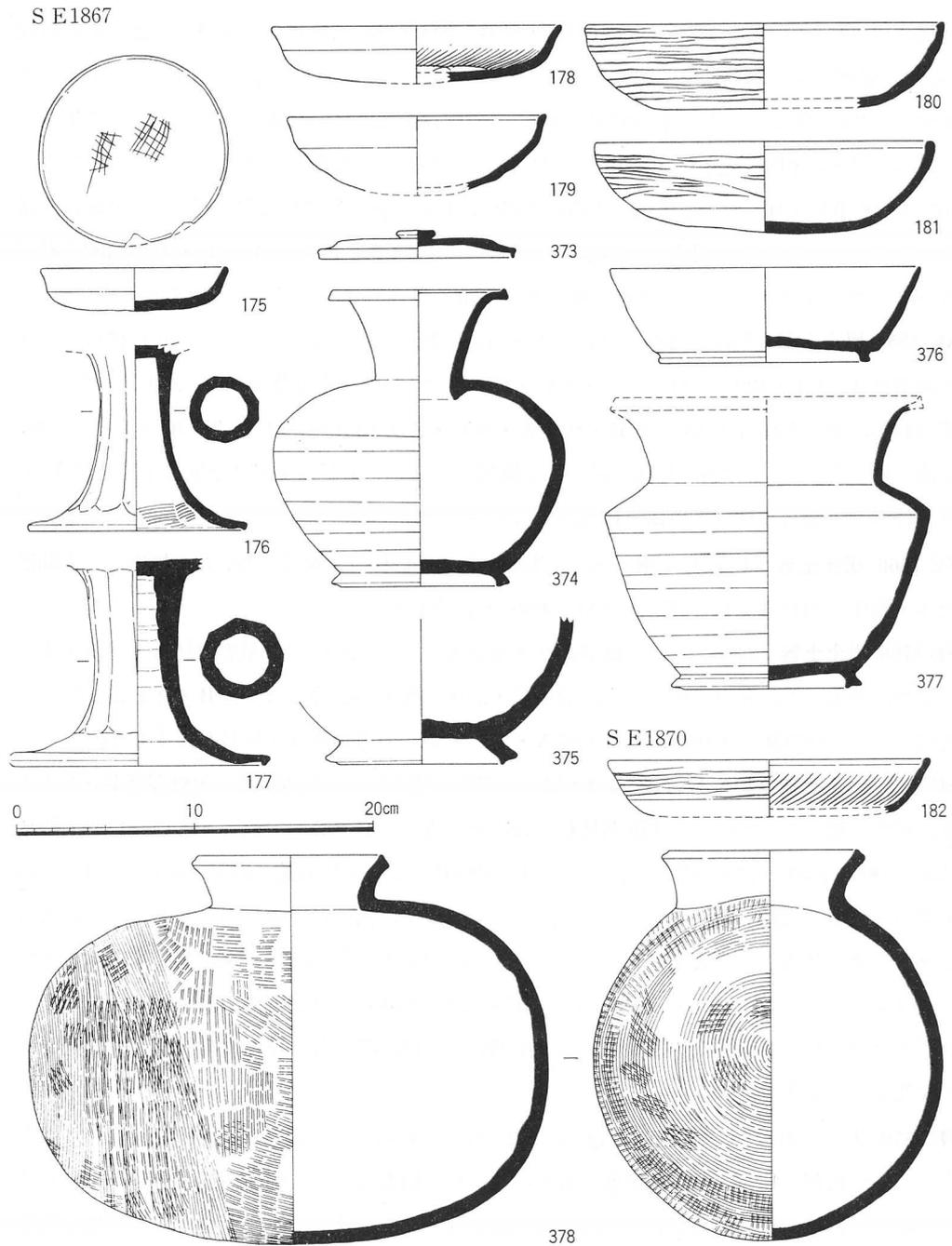


Fig. 47 SE 1867・1870 出土の土器

## G 施釉陶器・統一新羅陶器 (PL. 43)

施釉陶器は、二彩陶器1点、緑釉陶器3点、白磁1点の計5点が出土した。白磁が中世のものである他は、奈良時代の遺構及び中世の整地土（灰褐土）から出土したものである。

二彩小壺（404）は、球形の体部下半から、高台をもつ底部にかけての破片。胎土は白色で  
\* 軟質、砂粒をほとんど含まない。釉は淡い緑色。底径3.6 cm。SD1495 下層出土。他に緑釉小壺底部のみの破片が SD1495 上層と PB49 区灰褐土から各1点出土している。

緑釉椀（403）は、平底で、口縁部が内湾しながら大きく開き、端部が丸く肥厚する。全面にロクロによるなで調整をほどこし、底部は部分的に削る。白色の、砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、焼成の堅緻な軟陶である。体部全面に薄く釉をかけるが、底部内外面は露胎で残す。  
\* 釉の色は、全体に淡緑色から淡赤褐色に変化しているが、部分的に本来の濃緑色をとどめる。口径17.4 cm、器高6.3 cm。十四坪の、工房関連遺物を出土した SK1947 の出土。共伴遺物から年代を平城宮土器Ⅱの時期に限定でき、奈良時代初頭に遡る鉛釉陶器の例として貴重なものである。また、多彩陶ではなく単彩陶であることが注意される<sup>1)</sup>。

統一新羅陶器（405）肩部と、体部から底部にかけての破片が3点ある。うち2点は接合し、  
\* 残り1点も直接接合はしないが胎土、色調、焼成、施文原体などから同一個体と認められる。底部は平底で高台をもたない。外面は比較的丁寧ななで調整を行なうが凹凸が残り、内面には粘土紐の接ぎ目となで調整の痕跡がある。基本的に、粘土紐の積みあげによって形をつくり、その後ろにロクロ回転を利用してなで調整を行なっている。  
また、底部外周は手持ちによる削りを行なう。施文は、  
\* まず肩部とその下に2条、体部中ほどと下半に1条ずつ浅い沈線をめぐらす。その後、器面全体に扇形文を上下にずらしてほどこす。この扇形文は、型押しや棒状工具を回転させてほどこしたのではなく、櫛状工具の両端を交互に支点としながら押し引く手法により、反時計回りに施文したものである。焼成は堅緻で青灰色を呈し、胎土は須恵器と異なるところがない。釉はかからない。器形復原は困難だが、おそらく細頸の瓶になると思われる。そっくりの器形は見当たらないが、比較的近似するものに、高台を除いて、口縁部が受け口状に開いた雁鴨池<sup>2)</sup>  
\* 出土の長頸瓶を類例にあげることができよう (Fig. 48)。十四坪の SK 2073（平城宮土器Ⅱを伴出）・SK 2084・OP 53 区灰褐土から出土した。



Fig. 48 雁鴨池出土の陶器 (1:4)

1) 年代のわかる三彩陶器の最古の例には神亀6 (729) 年の墓誌をともなった小治田安萬侶墓がある。それに対して、川原寺出土の緑釉水波文樽が7世紀後半の造営にかかわるものとみて、日本における鉛釉陶の生産の開始は、単彩陶が先行する可能性が指摘されている（田中琢「鉛釉陶の生産

と官営工房」『日本の三彩と緑釉』1967）。

2) 文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』（図版編）1978、図版217右上・図面144右下。Fig. 48は東京国立博物館・中日新聞社『新羅千年の美—韓国古代文化展』1983、p. 53による。

## H 特殊土製品 (PL. 44, Fig. 49)

タコ壺 (512) 須恵質のタコ壺が2点ある。512は、体部はロクロなどで、把手部はなでと粗い削りで調整する。把手部に円孔をあける。全高 12.0 cm, 口径 6.4 cm。直接接合する破片が, SD1500 及び SD1538 から出土した。このほか, これとほぼ同形で, やや小型の須恵質のタコ壺が SD 1500 から1点出土している。\*

土錘 (501~511) 土錘Aと土錘Bの2種類がある。土錘A (501~503) は平面楕円形で, 側面に網紐を掛ける溝をもつ断面扁円形のものである。501は長さ 4.8 cm, 幅 3.4 cm, 最大厚さ 3.1 cm, SE 1335 出土。502は SB 1391 出土, 503は QR 66 区灰褐土から出土している。土錘B (504~511) は細長い紡錘形を呈し, 内部に貫通する細い穴がある。511は須恵質で, 長さ 5.5 cm, 最大径 2.4 cm, 孔径 3.5 mm を計る。両端を大きく欠失するが, 一端は面取りをしている。表面は, 一部焼成後に磨いた面がある。504~510は土師質で, 全体に磨滅, 折損がいちじるしいが, 長さ 4.0~4.5 cm, 最大径 1.2~1.6 cm, 貫通孔直径 3~4 mm, 重量 6~8 g の範囲におさまる。貫通孔の形状から, 棒状のものを芯にして製作したものと推定される。\*

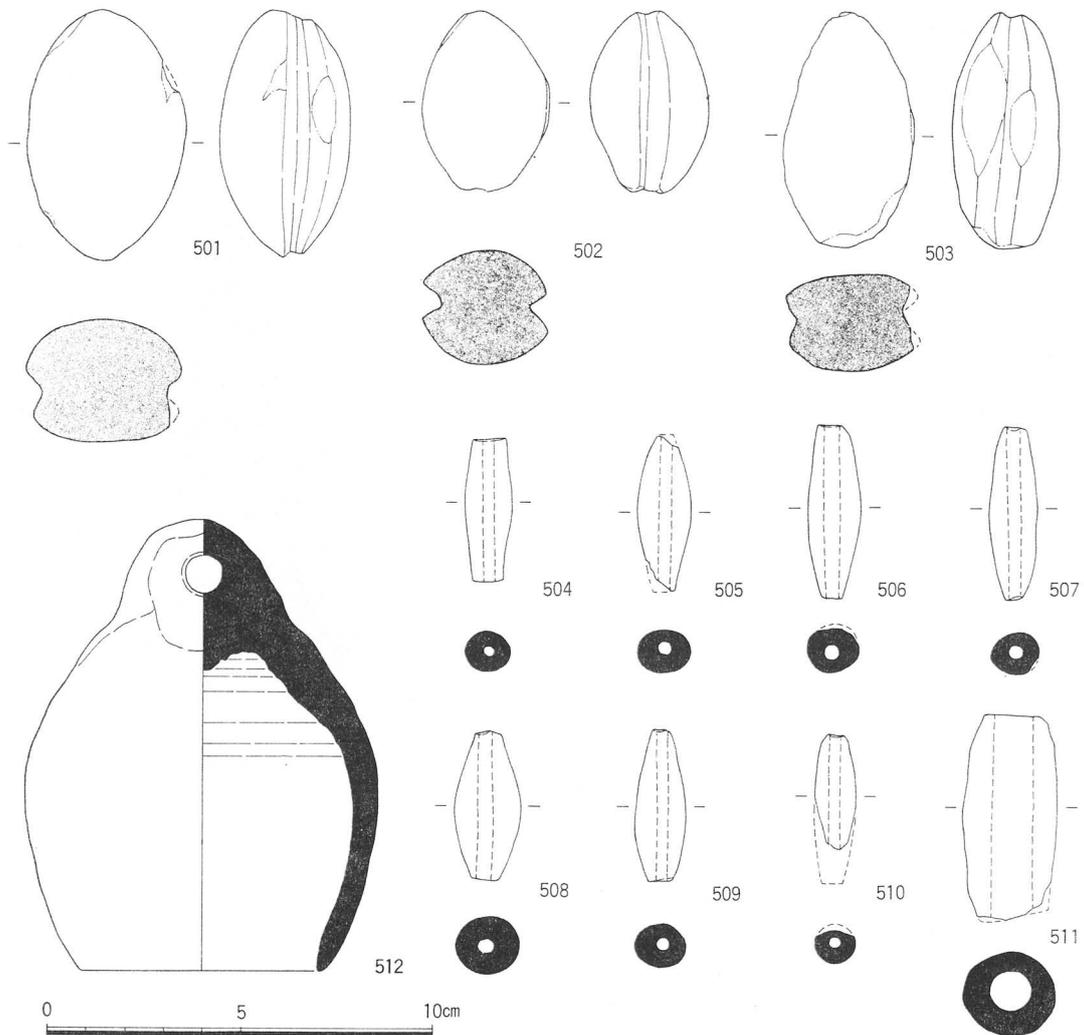


Fig. 49 特殊土製品

504は両端を断ち切って面を作るが、他はそうした調整は行なわない。灰褐土（PH 59区、PI56区、QT59区）から各1点、SB 1549 柱穴、SD 1495、SD 1500 から各1点出土。

紡輪（513～515） いずれも土師器破片を利用し、周縁を円形に打ち欠いて整え、中心に小穴を穿つ。直径 3.0～4.5 cm。穴の径 3～7 mm。厚さ 5～7 mm。SK 1628、SD 1495、SD \* 1563、SE 1550、SE 1867、QS 45区暗灰褐砂質土から各1点出土している。

土製円盤（516） 須恵器破片を打ち欠いて磨り、不整円形にしたもの。長径 4.1 cm。厚さ 0.6 cm。PA67区灰褐土から出土した。用途は不明。

獣脚（519・520） 須恵器の獣脚が2点出土した。519は5本の指を削り出しによって表現したもので、接地部を削りによって平滑に仕上げる。焼成は堅緻で、一部自然釉が降着する。斜 \* 方向の剝離面があり、壺Aにつくものか。現存高 3.6 cm。PA 52区灰褐土出土。それに比して520はやや形骸化しており、指の表現を失う。削りにより10角形面に取りをし、なで調整は行なわない。現存高 8.0 cm。火舎の足か。十三坪の SK 1356 出土。

ミニチュア土器（517・518） 517は須恵器の蓋で、宝珠形のつまみをつけ、口縁端部は鋭く下方に突出する。上面には、濃緑色の自然釉が厚くかかる。直径 5.6 cm、高さ 1.5 cm。十三 \* 坪の SE 1385 から完形品で出土した。葉壺の蓋になると思われる。518は土師器の小型甕<sup>1)</sup>で、口縁部を一周よこなでし、胴部は不調整。内面には調整の際の工具の先端の圧痕が残る。粘土紐巻上げによる成形で、外面に接合痕が観察される。底部外面に「大」の刻線がある。砂粒をあまり含まない、精選された胎土である。SE1867 出土。他に、土師器高杯の脚部が、SD 1499 から出土している。

\* 土馬（521） 総計286片出土した。全形を知ることができるのは2点のみで、他は胴部、脚部の破片である。521は左の前、後脚と右の前脚の一部を欠く他はほぼ完形。反りのない頭部で、目は竹管の押圧、鼻と口は篋による切り込みで表現する。粘土のつまみあげによって鞍とたてがみを表わし、粘土小片を貼り付けて手綱とする。胴部の横断面は蒲鉾形で、尾は下方に垂れ下がる。まず棒状の粘土により胴部・尾部をつくり、次いで別途成形した四肢を接合し、 \* 顔や鞍などの細部の表現を行なったと推定できる。全長 17.5 cm、復原高 10.8 cm。奈良時代前半に属する。SD 1500 出土。土馬の大部分は坪境小路両側溝から出土した。

墨書人面土器 SD 1495 から墨書人面土器と思われる破片が1点出土した。土師器甕の頸部の破片で、外面に刷毛目を施し、肩部上端にわずかに墨線の一部が認められる。

製塩土器 製塩土器は、SK 1316・1347・1506・1964・1965 から多量に出土し、その他、多 \* くの土坑・井戸・柱穴・溝から少量ずつ出土している。多量に出土した例のうち SK 1347は平城宮土器IIまたはIII、SK 1506・1965は同IIIの土器を伴っている。製塩土器はすべて細片となっており、器形の復原は困難だが、全体を通じて、胎土に多量の砂粒を含み、器面に粘土紐の接ぎ目を残す粗製品が最も多く、このほか胎土に少量の砂粒を含み、内面に布目を残すものが少量みられる。

1) 従来、この器種の呼称には鉢C（『平城宮報告IV』）、壺B（『平城宮報告IX』）などが用いられてきた。器形、調整ともに壺Bに類似するが、法量に明確な差があり、また、壺Bにはしばしば墨書人面を描くのに対して、そうした例はみられな

い。西一坊坊間路西側溝 SD920 の調査により、類例が多数出土し、小型甕・小型甕とセットをなすことが明らかとなったので、ここでは小型甕と呼んでおく。また、平城京内では普遍的に出土するが、平城宮での出土はきわめて少ない。

## I 陶 硯 (PL. 43)

陶硯は総数16点出土した。内訳は、圈足円面硯9点、蹄脚硯1点、無脚円面硯1点、低圈足硯2点、宝珠硯または風字硯1点、羊形硯1点、亀甲文硯蓋1点である。このほかに、須恵器杯蓋内面、杯身内外面、あるいは甕体部破片を利用した多数の転用硯がある<sup>1)</sup>。

**圈足円面硯** (527~529) 輪状の高い台脚を有するもの。527は陸の周縁に堤を設けない無堤式で、溝状の深い海をもつ。外堤の端部を欠くものの、ほぼ全形を知ることができる。外堤部下端に1条、台脚の下端に2条の突帯をめぐらし、長方形の透しがある。外径27.4cm、硯面までの高さ8.9cm。SK1376出土。529も無堤式だが、海は溝状にはならず、陸からゆるやかに移行する。長方形の透しをもつ。QT57区灰褐土出土。528は陸の周縁に堤を設けて陸と海を区別する有堤式の圈足円面硯。3点ともに硯面に墨が残り、陸は使用により平滑になっている。\* SD1495出土。

**蹄脚硯** (530) 硯部に獸脚の退化形式である三角柱状の脚柱をつける。硯部と脚柱は別々に成形し、後に接合する。脚柱と陸の大部分を失うが、無堤式であろう。脚柱の数は28前後に復原できる。海には墨が残る。復原径22.8cm、現存高は4.5cm。QT57区灰褐土出土。

**無脚円面硯** (525) 円盤の外周やや内側に突起を一周させて硯面を区切ったもので、有堤式にあたる。海と陸を区別しない。全面ロクロなどで調整。外径11.6cm。全高1.8cm。硯面は使用により摩耗している。PQ45区暗灰砂質土出土。

**低圈足硯** (526) 中央の上げ底状に水平な部分を硯面とし、その外側に一段下がる海を設ける。この型式は大小2点あり、526は復原外径18cm前後で、QG62区灰褐土出土。もう1点は外径12.6cm、高さ1.4cmで、SD1495出土。\*

**宝珠硯または風字硯** (524) 硯面上端に桜花形弧状のくりこみがあり、宝珠硯もしくは風字硯と思われる。断面が八角形の短い脚台が1箇所残る。脚台は宝珠硯であれば4箇所、風字硯であれば2箇所であろう。底面には濃緑色の自然釉が厚くかかる。硯面は、脚部より内側は使用によって著しく摩耗しているが、外縁部には摩耗はみられない。また、脚台の接地部も摩耗している。SD1412出土。東海地方の製品か。\*

**羊形硯** (522) 羊頭形の装飾をつけた形象硯。頭部のみが残り、硯部を欠失する。角は基部と先端のみが残る。目は突起によりあらわし、別途成形した耳・角を貼りつける。口には篋による切り込みを入れ、鼻・角は沈線、顔面の獸毛は刺突により表現する。頭部には1条の沈線を入れる。焼成は堅緻で、青灰色を呈する。全面を丁寧ななどで調整しており、顔面左半分には自然釉がかかる。坪境小路南側溝SD1495上層出土。左京四条四坊九坪に類例がある。\*

**亀甲文硯蓋** (523) 上面に沈線による亀甲文、及び花卉状の毛の表現をもち、亀形硯の蓋とみられる。横断面はかなり湾曲し、端部を鋭く突出させて硯部とのかみ合わせを良くする工夫をしている。前縁部は面取りを行ない、稜をもつ。上面には黒灰色の自然釉が薄くかかる。SK1398出土。類例は、和歌山県大日山I遺跡から出土している。<sup>3)</sup>

1) 陶硯の分類名称は、奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース41』1983に従った。

坪発掘調査報告』1983, p. 24。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四條四坊九

3) 和歌山県教育委員会『近畿自動車道と和歌山線埋蔵文化財調査報告』1972, p. 80。

## J 小 結

### 1 SK 2001 出土土器について

SK 2001 から出土した土器は、工房関係の遺物に伴って多量に投棄された状況を呈し、一括性が高いと考えられるとともに、工房における土器の使用状況の一端をも示しているといえる。<sup>1)</sup> 出土した土器は、土師器が174個体以上、須恵器が334個体以上にのぼり、単一の土坑としては、量的にもまとまっており (Tab. 8)、平城宮土器Ⅲに属する好資料でもある。以下、土師器・須恵器の順に分析を加え、SK2001 出土土器のもつ特性を考察していきたい。

#### a. 土 師 器

土師器は全体の34.3%を占める。そのうち、杯・皿などの食器が39.0%、貯蔵器の壺が22.5%、甕・竈の煮炊具が38.5%となる。ここで、SK2001 出土土器のもつ特性を明らかにするために、これまでに分析が行なわれてきた他の遺構との比較をしたい。まず、平城宮土器Ⅲに属する平城宮内裏北外郭の土坑 SK 820 では食器が93.4%、貯蔵器が1.9%、煮炊具が4.5%となる。<sup>2)</sup> 両者を比較すると、SK 820 では食器が9割以上を占めるのがまず目を引くが、これは平城宮内における宴会の際に使用した土器を一括投棄したという事情によるものであろう。ここで、むしろ平城京城における生活の状況を反映している遺構との比較が有効になると考える。平城宮土器Ⅰに属する下ツ道東側溝 SD 1900A では、食器が53.0%、貯蔵器が1.1%、煮炊具が45.9%である。<sup>3)</sup> また、平城宮土器Ⅱに属する左京一条三坊十五坪の溝 SD 485 では、食器が66.6%、貯蔵器が0.8%、煮炊具が33.2%となる。<sup>4)</sup> 両例ともに食器が5～6割、煮炊具が3～4割を占めており、これが平城京内における土器使用の実態に近いと思われる。しかし、この場合でも貯蔵器の占める割合は僅かに1%前後であり、SK2001 で22.5%を占めているのは、異常に高い比率である。SK 2001 の貯蔵器には、壺Eが1個体あるほかはすべて壺Bであるので、結局、壺Bの個体数の多さが全体での貯蔵器の比率を高めていると言える。壺Bをみると、漆の付着しているものは11個体29%にのぼる。このようなことから、壺Bは漆の容器として使用していたと推定でき、それが全体でも2割ほどの量を占めていることが、一つの特徴として指摘できる。

#### b. 須 恵 器

須恵器は全体の65.7%を占める。そのうちわけは、杯・皿などの食器が41.6%、壺・甕などの貯蔵器が58.4%である。食器と貯蔵器の比率は、SK 820 では92.6%と7.4%、SD 1900A では86.2%と13.8%、SD 485 では81.4%と18.6%となり、食器が8割を越える比率で存在しているのに対し、SK 2001 は貯蔵器が6割近くを占めることに大きな特徴がある。さらに、貯蔵器内での壺と甕の比率を見てみると、SK 820 では42.9%と42.9%、SD 1900A では52.2%と26.1%、SD 485 では30.5%と54.9%となる。SK 820 とSD 1900A では、個体数が20前後と小さ

1) 個体数の算出は、須恵器壺K・L・Pは肩部、他の器種は口縁部の残る破片の個体識別によった。

2) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅶ』p. 76。

3) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅵ』p. 40。

4) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅸ』p. 55。

	土師器	個体数	漆附着個体数 (比率)	比率 (%)	
食器	杯A	{ I 5 II 3 III 2 } 10		2.9 1.7 1.1 } 5.7	
	杯B	1		0.6	
	皿A	{ I 5 II 6 III 6 } 17		2.9 3.4 3.4 } 9.7	
	皿B	2		1.4	
	皿C	{ I 3 II 2 III 2 } 5	68	1.7 1.1 } 2.8	
	碗A	{ I 2 II 1 III 2 } 5		1.1 0.6 1.1 } 2.8	
	碗C	12		6.9	
	碗D	1		0.6	
	鉢	2		1.1	
	高杯	3		1.1	
	盤	3		1.7	
	貯蔵器	壺B 壺E	38 1 } 39	11(29%)	21.8 0.6 } 22.5
	煮沸具	甕 甕B 甕	60 6 1 } 67	9(19%)	34.5 3.4 0.6 } 38.5
	計		174		100.0

	土師器	須恵器	計
食器	68(39.0) (32.9)	139(67.1) (41.6)	207 (40.7)
貯蔵器	39 (22.4)	195 (58.4)	234 (46.1)
煮沸具	67(100) (38.5)	0	67 (13.2)
計	174(34.3)	334(65.7)	508 (100.0%)

※杯B・皿B・壺Aは蓋と身とからなっているので、集計にあたっては、蓋・身の個体数を合計せず、いずれかその多く出土しているものの方の数を採る。

	須恵器	群 別			個 体 数	漆附着個体数 (比 率)	比率 (%)	
		I	II	他				
食器	杯A	{ I 3 II 4 III 4 }			{ 3 4 4 } 11		3.3	
	杯B	{ I 身蓋 II 身蓋 III 身蓋 IV 身蓋 V 身蓋 }	4			4 } 25	1 (25%)	19.5
			16	9		5 } 11	1 (4%)	
			4	1		11 } 12		
			11			12 } 12		
			12			8 } 12		
	杯C		6	2		12 } 5		41.6
	杯F		12			5 } 9	1 (11%)	
	杯L		1			1 } 2		
	皿A	{ I 13 II 2 }			{ 3 2 } 5		0.6	
	皿B	{ I 2 II 5 III 2 }	1		{ 2 6 2 } 8		0.6	
	皿C	{ I 12 II 6 III 10 }		1		{ 12 6 10 } 28		1.5
	鉢A					1		2.4
	鉢					8		0.3
貯蔵器	壺A	{ 身蓋 B G E H K L P X 水瓶 平瓶 横瓶 甕 }	5 6			{ 5 6 } 6	3 (60%)	1.8
				1		1		0.3
				1		1		0.3
				1		1		0.3
				1		1		0.3
				97		97	96 (99%)	29.0
				20		20	19 (95%)	6.0
				18		18	8 (100%)	5.4
				2		2	2 (100%)	0.6
				2		2	2 (100%)	0.6
				1		1		0.3
				1		1		0.3
	計					44	15 (34%)	13.2
計					334		100.0	

Tab. 8 SK 2001 出土土器の構成

いために偶然の作用する要素が大きいと思われ、82個体の貯蔵器が出土した SD 485 の数値が実態に近いであろう。また、平城宮土器Vに属する平城宮内裏北外郭の土坑 SK 2113 では貯蔵器が54点のうち壺40.7%、甕55.6%である<sup>1)</sup>。こうしてみると、貯蔵器のうちわけは、甕が5割をやや越える比率で存在し、壺が3割から4割を占めるとみられる。それに対してSK 2001では、甕が22.6%、壺が77.4%と、甕と壺の比率が逆転していることに意味をみいだすべきであろう。また、壺の器種においては壺Kが97個体と圧倒的に多く、次いで壺Lが20個体、壺Pが18個体あり、この3種で全体の90.6%を占める。壺K・壺L・壺Pは95%を越える高い比率で漆が付着しており、漆壺として使用されたものである。付着した漆は塊状となっており、断面にも付着する例も多い。土器はすべて破片となって出土し、意識的に打ち割られた痕跡をもつものもある。漆壺の栓が出土したことも考えあわせると、壺K・壺L・壺Pは、壺Xとともに、漆の生産地から漆液をもたらすための運搬具であったと思われる。SK 2001における須恵器壺類の比率の高さは、漆の運搬具の多さによるものなのである。

また、壺Kにはいくつかの類型があり、高台の形態及び胎土によっておおよその分類をおこなうことができる (Fig. 50)。まず、高台はa形態；端部が平坦で、接地面が水平なもの、b形態；端部が平坦で、外傾するもの、c形態；端部が凹面をなして外傾するため接地面が稜をなすもの、の3者がみられる。一方、胎土は、青灰色を呈するものは少なく、灰褐色～灰白色のものがほとんどを占める。含有鉱物の差による分類では、1；石英、長石粒をほとんど含まないもの、2；径1～2mmの長石粒を含むもの、3；黒色の微粒子を含むもの、がある。焼成は全体に良好、硬質で、自然釉が降着するものが多い。高台の形態と胎土との関係を見るとa形態の高台には1、2の胎土、b形態の高台には1の胎土、c形態の高台には2、3の胎土が対応する。従来は、平城京城で出土する壺Kは漠然と陶邑窯の製品であり、年代は平城宮土器Ⅲまでに限られると考えられることが多かったが、漆の運搬具として搬入された場合もあるという観点にたってみると、岐阜県老洞古窯跡群<sup>2)</sup>、富山県小杉流通業務団地内遺跡<sup>3)</sup>、京都府周山窯址<sup>4)</sup>、兵庫県川端窯址<sup>5)</sup>を始め、各地で焼成されており、年代も平安時代まで下がる例もある。漆の運搬具として使用された壺Kは、青灰色を呈して胎土に砂粒をほとんど含まない陶邑窯址産のものとは明らかに異なり、こうした地域の製品と考えた方がよい。なお、壺P・壺Xについては現在ではその生産地は特定できていない。食器及び甕は、ほとんどの個体が陶邑窯址産のものであるという結果を得ているので、壺と他の器種の間には明確な産地の差が認められる。これは漆の生産地付近で焼成した壺を漆の運搬具として使用したことによるもので

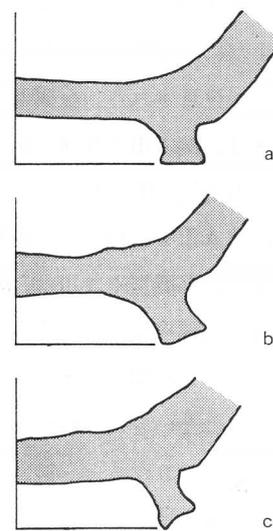


Fig. 50 須恵器壺Kの高台形態

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅶ』p. 92。  
 2) 岐阜県教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981。  
 3) 富山県教育委員会『小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要』1987。

4) 京都大学文学部考古学研究室『丹波周山窯址』1982。  
 5) 兵庫県教育委員会『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書1』1987。

あろう。また、須恵器杯B I・杯B I蓋・杯C・壺A・水瓶・甕にも漆が付着したものがみられる。このうち、杯B I・杯B I蓋・杯Cの食器は1点ずつしかなく、恒常的に漆容器として使用していたものではないであろう。漆は薄い膜状となって付着しており、パレットとしての使用が考えられる。それに対して壺A・甕には漆が厚い塊状となって付着し、漆容器として使用していたとみられる。須恵器壺Aや須恵器・土師器甕に貯えた漆を、漆工の際に土師器壺B<sup>1)</sup>に小出しにし、須恵器の杯・皿をパレットとして作業を行っていたという、工房での具体的な様子まで想定できる。

### c 年代

平城京内での平城宮土器Ⅲの実態は不明な点が多いが、まとまった資料としては、前川遺跡<sup>2)</sup>(左京九条一坊)や左京八条一坊六坪 SK3300<sup>3)</sup>の出土土器などをあげることができる。また、\* 関連資料としては、左京四條四坊九坪 SK2412<sup>4)</sup>出土土器がある。SK2001出土土器は、こうした平城宮土器Ⅲの解明に資する好資料であり、土師器碗A(以下碗Aと省略する)を中心として分析を行なってみたい。

まず、平城宮土器Ⅲの基準資料である平城宮 SK 820 出土土器では、碗A I(口径 18.7cm)、碗A II(口径 16.8 cm)がある。それに対し、SK 2001 では、碗A II、碗A III(口径 12.5 cm) \* が主体で、碗A Iはその可能性のある小破片が2個体あるにすぎない。前川遺跡、SK3300 においても同様の傾向がみられる。こうした碗Aのありかたの差が平城宮と平城京との土器の差のひとつとしてあげられるかもしれない。あるいは、SK 820 にたまたま碗A IIIが欠落していたということも考えられるが、むしろ碗A Iが特殊な存在であって、基本的に碗Aは、碗A II・碗A IIIの2種で構成され、推移していったというのが、平城京における実態ではなかろう \* か。碗Aが、金属器の模倣形態として出現したとすれば、正倉院宝物<sup>5)</sup>や興福寺金堂鎮壇具<sup>6)</sup>にみるように、祖型になったと考えられる金銀器碗に碗A II、碗A IIIと法量が近似するものがあることが注目される。金属器を志向したという考えに依拠すれば、碗Aの出現期にすでに碗A I、碗A II、碗A IIIの3種の区分が成立していたとみられる。碗A Iが平城宮における特殊な存在で、出土量も限られるということが明らかになりつつある現在、特に平城京域においては碗A \* II、碗A IIIを主体として推移していったとするほうが妥当であろう。

また、平城宮土器Ⅲは、碗Aを組成に含むことが重要な指標としてあげられている。しかし、碗Aを器種構成にもたず、「ほぼ天平年間中頃」で平城宮土器Ⅱの新相とされている左京四條四坊九坪 SK2412 出土土器は土師器杯・皿類に連弧暗文が皆無で、須恵器杯B蓋に顕著な屈曲がみられないという特徴をもち、法量分布からみても、平城宮土器Ⅲの古相とするべきかもしれない \* 。そうすると、碗Aの出現をもって平城宮土器Ⅲを2期に細分でき、SK2001 出土土器はその新相とすることができるが、平城宮内での良好な資料が不足しており、ここでは以上の見通しを述べるだけにとどめ、将来の検討を待つこととしたい。

1) SK2001 においては土師器杯・皿に漆が付着したものはみられないが、本遺跡の他の遺構の出土例では薄い膜状に付着し、須恵器食器と同じ使用形態であったことがわかる。

2) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告書』1974。

3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条一坊三

・六坪発掘調査報告書』1985。

4) 奈良国立文化財研究所『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』1983。

5) 宮内庁『正倉院の金工』1976。

6) 帝室博物館『天平地宝』1937。

## 2 外国製品について

- 平城宮・平城京内における奈良時代の外国産の土器には、唐および統一新羅の製品が知られている (Tab. 9)。唐の製品には、三彩、青磁、白磁があり、大安寺、左京八条条間路東堀河など7遺跡から計200片以上が出土している。統一新羅の製品には緑釉陶器と陶質土器があり、
- \* 4遺跡から計5点が出土している。未だ資料不足の感が強いが、唐三彩の出土は平城京内だけであること、統一新羅の製品については、平城宮では緑釉陶器・陶質土器ともに出土しているが平城京内は陶質土器に限られる、などの特徴を指摘できよう。陶質土器の器形は、壺・瓶であり、新羅では日用土器としてのほか、蔵骨器としても多く用いられる器種も含まれる。今回報告した統一新羅陶器は、その伴出土器からみると従来の年代観<sup>1)</sup>とは合致しない。この点も今後問題になる。

このような外国製品の平城京への流入の背景とその使用形態に関しては、今後の資料の増加に待つ所が大きい。

調査数次	調査年	条坊位置	遺構	種類器種	文献
10	1962	平城宮 内裏北方	溝	唐 白磁 碗	奈文研『平城宮報告Ⅶ』1976
110	1978	平城宮 東院	整地層	唐 青磁 双耳壺	奈文研『昭和53年度平城概報』1979, 同『年報1979』1979
32	1965	平城宮 東院	溝	統一新羅 緑釉 壺	奈文研『年報1966』1966
172	1986	平城宮 内裏東方	SD 2700	統一新羅 陶質 壺	奈文研『昭和61年度平城概報』1987
奈良市 127	1987	右京五条 一坊十五坪	包含層	唐 三彩 杯	奈良市『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1988
156-32	1985	右京八条 一坊十四坪	土坑	統一新羅 陶質 瓶	本書
	1966	大安寺 (左京六条)	焼土層	唐 三彩 陶枕	奈文研『奈文研年報1967』1967, 大安寺史編集委員会『大安寺史・史料』1984
奈良市 73	1984	左京二条 二坊十二坪	包含層	唐 三彩 陶枕	奈良市『平城京左京二条二坊十二坪発掘調査現地説明会資料』1984
奈良市 130	1987	左京三条 四坊十一坪	包含層	唐 白磁 円面硯	奈良市『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1988
奈良市 93	1985	左京七条 二坊六坪	井戸	唐 三彩 輪花杯	奈良市『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』1988
93	1975	左京八条 三坊十坪	SD 1155	唐 青磁 壺	奈文研『平城京左京八条三坊発掘調査概報一東市周辺東北地域の調査』1976
奈良市東市 4	1983	左京八条 条間路位置	東堀河	統一新羅 陶質 壺	奈良市『平城京東市跡推定地の調査Ⅱ一第4次発掘調査概報』1984
160	1985	左京九条 三坊十坪	土器溜	統一新羅 陶質 壺	奈文研『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』1986 奈文研『年報1986』1987

Tab. 9 平城宮・京出土唐・統一新羅陶器一覧表

1) 金 元龍「統一新羅土器初考」『考古美術』162・163, 1984。

### 3 土器の胎土分析

出土土器の一部について胎土分析を行ない、産地推定など今後の検討に備えた。試料は SK 2001 出土須恵器を主とし、統一新羅陶器なども扱った (Tab. 10)。

試料をそれぞれ約 0.5 g ずつ採取して、ほう酸リチュウムと混合し、ビードサンプラーを用いてガラス化した。ガラス化したものを、蛍光 X 線分析法により測定した。なお、標準試料として、JG-1, JB-1 を用いた。

この分析では、資料 No. 7 の  $\text{Al}_2\text{O}_3$  の含有量が他に比べて高く、粘土成分が多いことを示している。また  $\text{CaO}$  が少ないことも注目される。

これらのデータは、今後の産地推定のデータとして基礎的知見に資することができる。今後、土器の胎土分析にあたっては、ここで試みたような定量分析を進め、分析データの集積をはかる必要がある。

番号 成分	1	2	3	4	5	6	7	8	9
$\text{SiO}_2$	71.0	67.0	69.0	72.0	69.0	66.0	67.0	71.0	72.0
$\text{TiO}_2$	1.2	0.97	1.3	1.0	0.88	1.1	1.0	0.98	1.0
$\text{Al}_2\text{O}_3$	19.0	21.0	20.0	19.0	20.0	23.0	26.0	20.0	17.0
$\text{Fe}_2\text{O}_3$	3.9	6.0	4.8	4.0	4.8	4.5	4.3	3.7	5.9
$\text{MnO}$	0.030	0.031	0.031	0.034	0.028	0.030	—	—	0.068
$\text{MgO}$	1.5	1.1	1.3	0.83	0.71	1.3	0.56	1.1	1.1
$\text{CaO}$	0.54	0.35	0.34	0.44	0.75	0.37	0.089	0.38	0.51
$\text{Na}_2\text{O}$	0.62	0.43	0.65	0.86	1.3	0.89	0.24	0.48	0.90
$\text{K}_2\text{O}$	1.8	2.5	2.6	2.2	2.6	2.4	1.5	2.6	2.1
$\text{P}_2\text{O}_5$	0.047	0.049	0.061	0.058	0.046	0.065	0.046	0.054	0.085
$\text{Rb}_2\text{O}$	0.013	0.016	0.015	0.014	0.016	0.017	0.012	0.018	0.014
$\text{SrO}$	tr	tr	tr	tr	0.014	tr	tr	tr	0.011
$\text{ZrO}_2$	0.026	0.029	0.026	0.028	0.031	0.028	0.022	0.028	0.028
合計	99.676	99.475	100.123	100.464	100.175	99.7	100.769	100.34	100.716

1~3・6; 須恵器壺K 4; 須恵器壺P (PL. 38-227) 5・8; 須恵器壺L 7; 須恵器壺B (Fig. 45-338) 9; 統一新羅陶器 (PL. 43-405)

1~6・8; SK 2001 7; SK 1942 9; SK 2084

Tab. 10 土器の蛍光 X 線による定量分析結果 (数値は重量比を示す)

## 5 木 製 品

今回報告する各調査区から、工具、紡織具、服飾具、部材など、100点をこえる木製品が出土した。その大半は井戸に埋没していたもので、ほとんどが破損品である。SE 1870 では井戸の側板に大形曲物容器の底板が数枚転用されており、SE 1375 の井戸側板の一枚には多足机の天板が再利用されていた。いっぽう、10基の井戸から出土した齋串の中には完形品が多く、埋没していた理由が、破損したために投棄された他の木製品とは異なっていたことを示している。なお、いくつかの木製品について年輪年代測定を行なっているので参照されたい。

### A 木工具 (PL. 45)

- a 錐 柄 (1) 丸棒状の木柄で、現状では3片に割れており、完全には接合しない。心 き り  
\* 持丸材を利用し、周側面を縦方向に細かく削って、断面をほぼ円形に整形している。一端の木口面に不整形の茎孔をとどめ、茎を焼き込んで挿入した痕跡がある。SE 1550 出土。現存長さ 15 cm, 径 1.0~1.2 cm, 茎孔の直径 0.4 cm, 同長さ 5.1 cm である。ムラサキシキブ材。
- b 刀 子 (2~7) 刀子は7点出土した。いずれも破損品で、刀身を欠くものもある。と う す  
2・3は、側面形が柄の中央部分で刀背方向に曲折するI型式に属する<sup>1)</sup>。2は柄の中に鉄刀身  
\* の茎だけが残る。SE 1385 出土。長さ 12.8 cm, 幅 1.6 cm, 厚さ 1.3 cm, 茎孔(柄元)縦 0.8 cm, 横 0.5 cm。3は柄元を欠損し、割れ口に焼き込みによる茎孔の一部をとどめる。SE 1550 出土。現存長さ 12.0 cm, 幅 1.7 cm, 厚さ 1.4 cm。4は刀身の大半と柄の後半部を欠く。柄は残存部分では曲折しておらず、長さからみて、柄元から柄頭まで直線状の丸棒であるIII型式と推定される。柄の断面形は卵形である。刀身は柄元に近い部分が残るが、錆化が進み、本来の  
\* 形状をとどめていない。SE 1305 出土。柄の現存長さ 7.5 cm, 幅 1.4 cm, 厚さ 1.0 cm。5も刀身の前半部と柄の後半部を欠損している。刀身は平造り。棟厚 2.5 mm。柄はていねいに削って断面楕円形に整形し、柄元から柄頭にかけて少しずつ太くつくる。SE 1917 出土。現存長さ 6.1 cm, 柄元での幅 1.0 cm, 同厚さ 0.8 cm, 柄の中央付近での幅 1.2 cm, 同厚さ 1.0 cm。6は刀身の一部が残り、茎部分に柄の木質が付着する。刃関と棟関をつくり出した角棟の平造り。  
\* 棟厚 0.3 cm。SE 1550 出土。7は刀身を欠き、柄も後半部を折損する。柄の断面は円形に近く、柄元木口に茎孔が残る。柄の現存長さ 5.5 cm, 厚さ 1.1 cm, 茎径(柄元) 0.65 cm × 0.3 cm, 茎孔の長さ 4.2 cm。SE 1385 出土。PL. 33-21 の刀子は柄を欠く刀身の一部。刃関・棟関をつくり出した角棟の平造り。現存長 4.6 cm, 刀身幅 1.1 cm, 棟厚 0.2 cm。SE 1550 出土。2・6・7がムラサキシキブ材, 3がアカガシ亜属材, 5がカキノキ材, 4がケヤキ材。
- c 刀子鞘 (8) 二枚合せの鞘と考えられる。小片であるために全容を知りたいが、外面は縦方向に  
\* ていねいに削り平滑に整形する。内面は浅く割りぬくだけで、細かい調整を施さない。2枚合わせると、幅 1.5 cm ほどの刀身を納めることができる。SE 1870 出土。現存長さ 4.0 cm, 幅 2.3 cm, 厚さ 0.7 cm。スギ材。

- d 筥 (9) ヒノキの板片を細長い撥状に加工したもので、身の部分は先縁にむけてや や へ ら  
\* 薄く削っている。柄尻は両側面から斜めに削り落して圭頭状につくる。身の片面と両側面、先

1) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』1984, pp. 8・9。

縁部分に黒褐色ないし黄白色の固形物が薄く付着している。SK1886 出土。長さ 12.0 cm, 厚さ 0.3 cm, 身の長さ 1.0 cm, 同幅 1.3 cm, 柄の幅 0.6 cm~1.2 cm。

## B 紡織具 (PL. 45)

- いとまき a 糸巻 (10) 糸巻の構造は、数本の杵木と、それを固定する横木、横木の心に通す軸棒からなるが、10はそのうちの横木。板の中央を広く残し、両端を棒状に削り出して杵部をつくる。相欠き仕口の中央には軸穴があく。長さ 8.2 cm, 幅 2.0 cm, 厚さ 1.0 cm, 軸穴径 0.8 cm。SE1880 出土。ヒノキ材。
- つむ b 紡輪 (11) 小さな円板の中心に糸巻棒をとおす紡錘車で、糸巻棒は残っていない。周縁部は両面から削って薄くつくる。ヒノキ柾目材。SK 1886 出土。直径 3.4 cm, 厚さ 0.5 cm。

## C 服飾具 (PL. 45)

- ひおうぎ a 檜扇 (12) 薄いヒノキの割板でつくった白木の檜扇。3枚分の骨がある。末は方頭形であるが、片方の角を斜めに切り落している。なかほどから本にかけて両側縁を削って撥状に狭め、下端は半円形にそろえる。下端から 2.5 cm の位置に要孔があく。ふつうは骨の中央付近に綴じ目をいれ、あるいは側面にV字形の切り込みをいれて綴じ合わせるが、12にはいずれの加工もない。綴じ目なしで綴じ合わせたのだろう。SE2020 出土。長さ 28.0 cm, 末幅 4.5 cm, 本幅 1.3 cm, 厚さ 0.15~0.2 cm。
- たてぐし b 横櫛 (14~32) 横長の板材の側縁から細い歯を挽き出し、表面を平滑に研磨した横櫛で、7基の井戸から合計19点出土した (Tab. 11, Fig. 51)。中でも SE 1555 の最下層から7点まとまって出土したのは注意をひく。すべて破損品で、全形のわかるのは20だけである。棟の断面形は丸くつくられているもの (a類) が多く、圭頭形になるもの (b類) や角張った稜をつくるもの (c類) は数点に限られる。高さ 5.4 cm の大形品 (20) から、1.8 cm の小形品 (16) まで大小各種のものがある。3 cm あたりの歯数は23本から43本の間であり、平均歯数は30本。概して棟の断面形が b・c類のものは歯の間隔が粗い傾向がみとめられる。a・b・c類いずれも、表面はきわめて平滑に研磨されている。歯の両側面も挽き放しではなく、研磨され、歯元に比べて歯先に近い方がわずかに薄くつくられている。歯の断面形も扁平な凸レンズ状を呈しており、これも研磨による整形である。櫛の歯の間隔は、用途によって加減される。

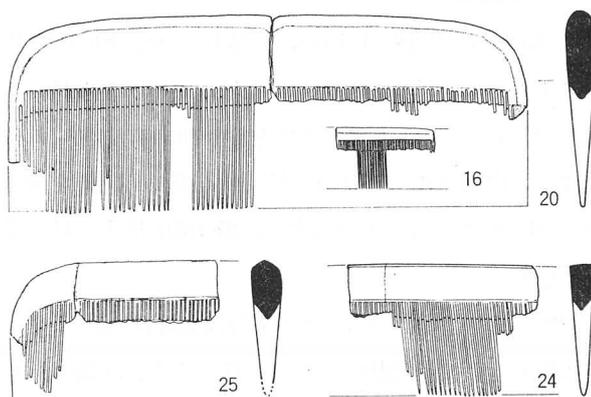


Fig. 51 横櫛実測図 (1:2)

る。つまり、髪をとかし、もつれを防ぐための櫛は歯が粗く、髪を梳き、汚れを取りのぞくための櫛は歯が密につくられる。横櫛は一般に後者の範疇に入るが、今回報告する横櫛の中でも、歯の間隔に精粗の違いがみられる。歯と歯の間隔をとくに歯元の部分で計測してみると、広いもので 0.6 mm 前後、狭いものでは 0.4 mm 前後で、

No.	遺構	幅 cm	高さ cm	厚さ mm	歯長 cm	歯数	歯厚 mm	歯間隔 mm	分類	材 質
14	SE1305	2.3	—	6.8	—	30	0.55	0.48	a	ツ ゲ
15	SE1305	4.9	—	8.0	—	27	0.52	0.59	a	イスノキ
16	SE1305	3.4	1.8	3.7	1.4	43	0.55	0.35	a	〃
17	SE1365	4.7	—	8.8	—	26	0.55	0.66	a	ツ ゲ
18	SE1550	1.8	—	8.4	—	29	—	—	c	イスノキ
19	SE1550	5.2	—	4.2	—	27	0.50	0.60	a	〃
20	SE1555	13.7	5.2	8.0	3.3	27	0.55	0.50	a	ツ ゲ
21	SE1555	7.1	—	8.4	—	23	0.85	0.55	a	イスノキ
22	SE1555	9.0	3.1	5.9	2.2	33	0.45	0.44	a	〃
23	SE1555	5.6	—	7.4	—	27	0.53	0.51	b	〃
24	SE1555	5.0	3.5	5.9	2.6	26	0.55	0.65	c	〃
25	SE1555	7.8	2.8	4.7	2.4	34	0.45	0.50	a	ツ ゲ
26	SE1555	1.5	—	4.8	—	30	—	—	a	イスノキ
27	SE1560	6.2	—	6.8	—	31	0.50	0.39	a	〃
28	SE1560	4.4	—	3.2	—	35	0.45	0.43	a	ツ ゲ
29	SE1560	1.4	—	6.1	—	34	—	—	a	イスノキ
30	SE1560	2.1	—	6.9	—	32	0.45	0.41	a	〃
31	SE1867	2.2	—	9.3	—	28	—	—	b	〃
32	SE2070	3.8	3.4	5.8	2.5	27	0.55	0.64	a	ツ ゲ

(幅は現存値, 歯数は本/3 cm, 分類は背の断面形)

Tab. 11 横 櫛 寸 法 表

最も狭いのは16の0.35mmである。16は最小の横櫛で、歯の厚さも最も薄く、歯の密度も3cmあたり43本と他に比べ多い。0.35mmという間隔は、すくなくとも歯元の近くでは、歯を挽き出す鋸の幅を示すものであろう。参考までに、近年まで製作が続けられているツゲ櫛の加工に使われている歯挽き用鋸の幅は横櫛のアラ歯用の1.3mmから、梳き櫛用の0.35mmまで数種類<sup>1)</sup>ある。最も薄い鋸の幅が出土品にみられる歯の間隔の最も狭い寸法と一致することは興味深い。

c 堅 櫛 (12, Fig. 52-1) 縦長の板材の一端から長い歯を挽き出した櫛。他端は弧形を3たてぐしつ連ねた形につくり、中央の両側辺を弧状に抉って、握り部分とする。歯の切り通し線は直線状であるが、刻線を施してはいない。歯の部分は左右端を欠き、3本の歯が残る。本来は11本

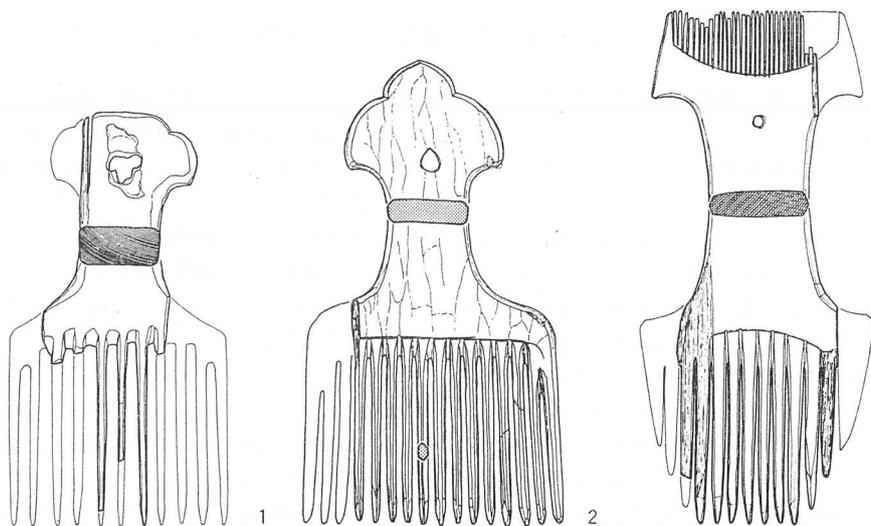


Fig. 52 堅櫛の出土例 (1:3)

1) 石川裕子「つげ櫛職人」『埼玉県立民俗文化センター研究紀要』第3号 1984, pp. 1~32。

前後であったと推定される。歯の密度は 8 mm につき 1 本で、鋸で挽き出したのち、削って厚さ 2~3 mm の扁平な板状に仕上げ、先端は剣先状に尖らせている。長さ 16.5 cm、握り部分の幅 3.1 cm、厚さ 1.5 cm。SE2020 出土。ツゲ材。

本例に類似した堅櫛が平城宮 6AAD 区基幹排水路 SD2700 から出土している (Fig.52-2)<sup>1)</sup>。それに比べると本例は粗製で分厚く、歯の密度も粗い。また平城宮 6ABP 区 SD3715 から \* 同じ位の大きさの堅櫛が出土している (Fig. 52-3)<sup>2)</sup>。これは一端に太くて長い歯を、他端に細く短い歯を挽き出した精製品である。

## D 容 器 (PL. 46~48・50)

まげもの a 円形曲物 (33~51) 円形曲物は13基の井戸から合わせて16点、SK1886 から3点出土した。完形品は少なく、多くは底板と側板が分解している。底板は原則として正円形であり、中 \* でも43では、正円形につくるために、周縁端部に施したコンパスによる刻線が部分的に残っている。それに対して33や38のように、底板の直径が部位によっては 0.5~1.1 cm も異なるものがある。使用材は、35の底板がスギ材、ほかはすべてヒノキである。

底板の大きさは、小さいもので直径 9.1 cm、大きいもので 33.9 cm ある。大半は 15~20 cm の間にあるが、はっきりとしたまとまりはみられない。いずれも底板を側板の内側にはめ \* 込み、側板の上から木釘を打ち込んだ釘結合曲物である。33・34・36・38は容器の内面に柿渋 \* 様の塗料を塗っている。<sup>3)</sup>

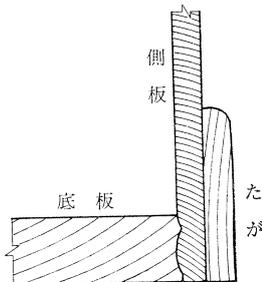


Fig. 53 円形曲物34の接合法

円形曲物の完形品は4点ある。33は側板の上縁端部が土圧で変形し大部分を欠失しているが、高さ 14.0 cm に復原できる。側板は重ね合わせ部分で樺皮紐を使って綴じ合わせる。<sup>4)</sup> 側板の綴じ \* 合わせは2箇所、1列外5段綴じと1列内3段綴じである。側板は板目材の薄板で、内面に縦平行線のケビキをいれる。底板とは8カ所に木釘を打ちこんで接合するが、とくに側板の重ね合わせ部分に2本ずつ接近させて2箇所に打ちこんでいる。この曲物

- 1) 奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城概報』1987, p. 21。
- 2) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告XI』1982, p. 196。
- 3) 柿渋というのは、とくに渋味の強い柿から抽出したもので、そのまま塗料として用いたり、油、墨、糊などと混ぜ合わせて、防腐や防水のために、紙や布、木材などに塗られた。文献史料で、柿渋の使用の形跡が確かめられるのは、鎌倉時代に成立した『源平盛衰記』の中にみられる「渋塗りの立鳥帽子」という記述が最も古い。(稲見聖子「赤山渋の生産と流通」『埼玉県立民俗文化センター研究紀要創刊号』1984. 7, pp. 81~114)。
- 4) 曲物側板の綴じ合わせ方法の表記は奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』(前掲)

の次の記述に従う。「まず側板の外面にあらわれる樺皮綴じを1列綴じと2列綴じに区分する。1列にしる2列にしるそれぞれの列が何段の樺皮綴じで構成されているかによって、2段とか3段とよびわける。つぎに樺皮綴じの綴じはじめと綴じ終りが、側板の上下縁外側なのか、それとも上下縁の内側かによって、前者を外綴じとよび後者を内綴じとよびわける。また上下縁のいずれか一方が外綴じで一方が内綴じの場合は例えば上外下内綴じとよぶことにする。このようにして以下では、1列内3段綴じ、1列外4段綴じ、1列上外下内3段綴じなどとよびわける。2列の場合には側板外面の端に近いほうを前列とし、遠いほうを後列として例えば前上外下内3段後内2段綴じとよぶことにする。」(同書 pp. 47・48)。

容器の内面には全面に柿渋様の塗料が塗付されている。SE 1555 出土。外径 17.1~18.2 cm。

34は側板の下部にもう一重の籬をはめた釘結合曲物。側板の綴じ合せは2箇所、2列前上外下内5段・後上外下内4段綴じと1列内3段綴じである。籬は幅が3.0 cm ある。籬の綴じ合せは2箇所、2列前外2段・後内1段綴じと1列内2段綴じ。底板との結合木釘は7箇所、  
\* ほぼ等間隔に打ち込んでいる。なお側板との密着をはかるために、側板の囲側面を浅くくぼませている (Fig. 53)。内面には全面に柿渋様の塗料が塗られている。側板は柾目材、籬は板目材である。SE2020 から出土した。外径 17.0~18.2cm、高さ 10.9cm である。

35は内面全面と側板外面、底板外面の広い範囲に黒漆が厚く付着している。漆容器として用いられた釘結合曲物。側板の綴じ合わせは2箇所、1列上外下内5段綴じと1列内2段綴じである。  
\* 底板との釘結合穴は、該当部分が漆で厚く被覆されているので確認しにくい、ほぼ等間隔に5本の釘が打ちこまれていると推定される。SE 2070 出土。外径 23.1~23.8 cm、高さ 5.9 cm。この曲物の側板は、他と同様にヒノキの薄板が使われているが、底板はスギ材である。

36は曲物柄杓の身で、柄は残っていない。側板の綴じ合わせは1箇所、2列前上外下内4段・後上内下外3段綴じ。側板重ね合わせ部分の上寄りに、1.5 cm 四方の方孔をあけて柄孔とし、対応位置のほぼ中位に直径 0.6 cm の円孔を貫通させている。内面全面に柿渋様の塗料が塗付されている。SE2020 から出土した。外径 13.6~14.0 cm、高さ 10.8 cm である。なお  
\* 年輪年代測定の結果、この底板の最外年輪年代は716年であることが知られる。

b 長方形曲物 (52・53) 四隅を丸く切り落した長方形の底板に低い側板を結合したもので、折敷、折櫃とよばれるもの。52は側板の大部分が破損しているが、ほぼ全形を復原することが  
\* とができる。側板は底板の周縁のやや内側に置いて樺皮紐で結合し、底板の長辺に各2箇所、短辺に各1箇所、2孔一対の結合孔があく。側板の位置には浅い溝状のアタリ痕跡が残っている。側板の内面四隅に縦平行線のケビキがはいる。スギ材。SE 2020 出土。長さ 24.0 cm、幅 19 cm 以上、高さ 5.6 cm。53は52よりも大型の長方形曲物の底板の破片。側板と結合孔一対があり、中に樺皮紐が残る。底板の厚さ 0.8 cm。ケンボナシ材。SE 1315 から出土した。

\* c 蓋板 (54) 円形の板状品で、スギの板目材の木裏側の周縁を斜めに削り落して縁端を鋭くつくる。容器の蓋として使用したものだろう。SE 1917 から出土した。直径 15.6 cm、厚さ 1.0~1.2 cm である。

\* d 大型曲物 (55~62) 長径が 60 cm から 70 cm におよぶ大型の曲物で8点ある。そのうちの7点は SE 1870 の井戸側縦板として再利用されていたもので、いずれも縦方向に割れた破損品である。62は SE1867 から出土。側板を残すのは60・61の2点だけ。底板の加工は、長径方向にやりが  
\* んなで削ってととのえているが、表側と比較すると、裏面の整形は粗略である。

側板と底板の結合は、底板よりひとまわり小さ

No.	遺構	直径 cm	厚さ cm	釘穴数	木取
33	SE1555	16.3~17.4	1.0	9	板目
34	SE2020	21.2~22.3	1.2	7	板目
35	SE2070	13.1	0.7	4	柾目
36	SE2020	13.3~13.6	0.9	5	—
37	SE1550	[23.2]	0.8	(4)	板目
38	SE1335	19.2~19.7	0.6~0.7	3	板目
39	SK1886	16.1~16.4	0.5~0.7	(3)	柾目
40	SK1886	16.4	0.5	(5)	柾目
41	SK1886	16.3	0.5~0.6	(2)	柾目
42	SE1335	20.2	0.5	(0)	柾目
43	SE1867	17.4	0.5	4	柾目
44	SE1305	13.9~14.4	0.6~0.7	4	柾目
45	SE1560	17.4	0.5	(2)	柾目
46	SE1385	21.6	0.6~0.8	(2)	板目
47	SE1870	15.9	0.7~0.8	(1)	柾目
48	SE1870	20.0	0.6~0.8	(1)	板目
49	SE1867	23.7	0.7~0.9	(2)	柾目
50	SE1315	9.1	0.5	(0)	柾目
51	SE1917	33.9	0.8~0.9	(2)	板目

(復原値), [現存値]

Tab. 12 円形曲物底板寸法表

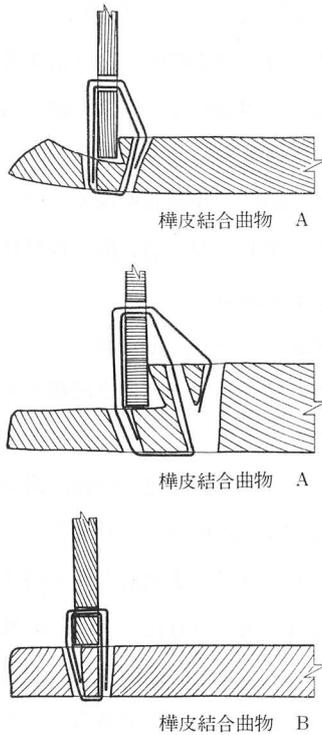


Fig. 54 樺皮結合の模式図。

い側板を底板の上にあてて、底板に2孔一対、側板に1孔をあけ、樺皮で結び合わせる方法がとられている。これを樺皮結合曲物とよぶ。樺皮結合曲物には、底板上面の周縁を一段低くつくり、ここに側板をたてて樺皮紐あるいは樺皮紐と木釘で結合するもの（樺皮結合曲物A）と、低い段をつくらず<sup>1)</sup>に樺皮紐だけで結合するもの（樺皮結合曲物B）がある。

材質は55がスギ、他はすべてヒノキである。55・56・57・62は樺皮結合曲物Aで、釘は使わず、底板の周縁を一段おとして、樺皮紐だけで底板と側板とを結合している。底板の周縁の一段低くした部分は、外側から内側へ傾斜する面につく<sup>\*</sup>っており、側板の固定がはかられている。

全体は楕円形を呈し、55・56・62では長径方向の両端を幅広くつakって把手としている。57も同様とみられる。55・56は一端の把手部分を欠損しているが、破損面には手斧で切り目を入れて折り取った形跡をとどめる。また56では、長辺側<sup>\*</sup>の割れ目に沿って3箇所<sup>\*</sup>に補修用の小孔がうがたれているので、井戸枠に転用される以前に、すでに破損し、修復して使

われていたことがわかる。

58も樺皮結合曲物Aであるが、底板周縁の一段低くした部分が水平面である点が55・56などと異なり、把手もつくられていないと推定される。これには側板との樺皮結合のための1箇所<sup>\*</sup>に3孔あく部分もあり、側板の内側に接した位置にも2箇所、小孔がうがたれている。また割れ面に沿った2箇所<sup>\*</sup>に修復用の小孔があく。58には長径方向の両端近くに長方形のほぞ穴が切り取られている。この方形孔の心間寸法は49.5cmあり、切り口は粗い。SE 1870の井戸枠に転用された際の加工とはみなしがたく、また曲物製作時にあけたものとも考えられない。59・60・61は樺皮結合曲物Bで、おおむね長方形を呈し、両端の短辺を弧状につくる。58には<sup>\*</sup>55などと同様に両方の短辺に幅広の把手が作りだされている。60と61には側板の一部が結合された状態が残っている。この2点には、側板をたてる位置にあらかじめ施された刻線が断続的にみとめられる。59以外では、底板の裏面に直線状の刃物痕跡が無数に残っており、俎（まないた）のような使われ方もあったことを示している。また60の底板の裏側には、小範囲であるが2箇所<sup>\*</sup>に黒漆が付着している。62が柾目材、55が斜柾目材である他は、いずれも板目材が<sup>\*</sup>使われている。大きさは56が長さ73.0cm、復原幅48.0cm。59が長さ70.5cm、復原幅55.8cm。60が長さ65.4cm、復原幅43.5cmである<sup>2)</sup>。

e 把手(63) 心持ちの丸棒の側面を平坦に削り落した芯材に、幅3mmの樺皮紐を斜格子状に編みつけたもの。現状では樺皮紐がかなり緩んでいる。SE1335から出土した。芯

1) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』(前掲) p. 48。

2) 類品が奈良県桜井市大福遺跡で出土している。井戸枠に転用されていたもので、底板には55や56と同じように、楕円形の長辺の両端に把手部分を

つくる。法量も69cm×48cmと共通している。ただし底板と側板とは樺皮結合B方式によって結び合わされており、今回報告するものの中にはみられない。桜井市教育委員会『桜井市大福遺跡・西之宮黒田地区発掘調査報告書』1987参照。

材はムラサキシキブで、直径 0.7 cm である。

- f 漆器鉢 (64) 九条条間小路の南側溝 SD 1495 から出土した漆器の破片。漆器は木質部が腐蝕して失われ、内外面の漆膜だけが遺存している。破片は口縁部のもので、口径 17.5 cm、器高 8 cm ほどの鉢形の器であったと推定される。口縁部は全体にゆるやかに内湾し、端部は丸くおさめる。漆膜

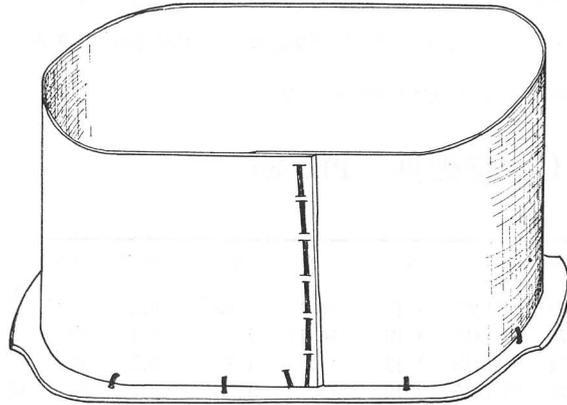


Fig. 55 大福遺跡出土の大型曲物復原図

の裏側には木地であるケヤキ材の組織痕が明瞭に残っており、このことから布着せをせずに素地に直接黒漆をかけたことが知られる。漆膜の厚さは内外面とも 0.4 mm 前後で、均質に塗られている。素地は挽物で、心を避けた材の側面から器をロクロで挽き出した横木取りの製品。素地は 1 mm 強の厚さに復原でき、きわめて薄い。

## \* E 食器具 (PL. 50)

- a 杓子形木器 (65・66) 65・66は扁平なヒノキの板目材から“しゃもじ”に似た形をかたどったもので、2点とも同じ形態。身は縦長で狭く、先縁はゆるやかな弧形につくり、刃のように薄くしている。身の側縁も表裏両面から斜めに削る。柄は身との境から撥状に幅を狭め、末端は尖る。65・66とも SE 1550 掘形出土。65は全長 28.7 cm、身の長さ 10.0 cm、同幅 3.6 cm、同厚さ 0.5 cm。66は全長 25.1 cm、身の長さ 8.7 cm、同幅 3.6 cm、同厚さ 0.5 cm。

- b 箸 (67・68) ヒノキの木片を小割りにしたのち、棒状に整形したもの。67は一辺 0.5 cm の角棒につくるが、68は角を削り落してやや扁平な丸棒につくる。68には柿渋様の塗料を塗っている。平城宮 6AAB 区土坑 SK820 出土の完形品 302 点の計測値をみると、いずれも直径は 0.5 cm 内外で、最大の長さ 24 cm から最小の長さ 14 cm までばらつきがあるが、そのうち長さ 17~22 cm の箸が全体の 80% を占めている<sup>1)</sup>。したがって 67、68 も箸とみなしてよからう。2点とも SE 2020 から出土した。67は長さ 21.1 cm、68は長さ 21.3 cm、直径 0.4~0.5 cm である。

## F 部材 (PL. 50)

- 多足机の天板 (91) SE1375 の井戸側板に転用されていたもの。本来の天板の長辺の両側を欠き、短辺の両端に井戸枠組みのための仕口が切り取られている。ヒノキ板目材の木表を机の天板の表面に、木裏を裏面に使っている。板裏の短辺寄りに厚さ 1 cm、幅 7.9 cm の、断面が台形を呈する脚座をつくり出し、脚をさし込む<sup>2)</sup>柄孔をあける。現状では 4.8 cm 間隔で各 5

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅶ』1976, p. 120。

2) 東大寺正倉院に伝わる多足机には 18, 22, 26, 28, 32 足の例がある。

箇所に残る柄穴の中には、穴底に2つの小さな円孔が貫通するものと、1つあくものが1つずつある。さし込んだ脚を固定するための釘穴であろうか。長さ 84.1 cm, 現存幅 21.0~21.8 cm, 厚さ 1.5~1.8 cm である。

## G 祭祀具 (PL. 49)

いぐし

No.	遺構	型式	長さ	幅	厚さ	木取	
69	SE1305	C IV	(20.1)	3.05	0.3	柱目	齋 串 (69~90) 細長い薄い板の両端 *
70	SE1315	C III	(18.1)	1.9	0.1	板目	をとがらせ、側面に切り込みなどを施した
71	SE1315	C III	18.8	1.7	0.2	板目	串状品で、祭祀具の一つ。齋串は聖なる区
72	SE1315	C III	15.5	1.5	0.2	柱目	域の結界をあらわし、外部の悪気を遮断す
73	SE1335	C III	19.0	2.1	0.1~0.2	板目	域の結界をあらわし、外部の悪気を遮断す
74	SE1530	C I	18.1	2.2	0.1~0.2	板目	るといふ役割を担っていたと考えられてい
75	SE1550	C III	17.6	(2.0)	0.3	板目	る。今回出土した22点の齋串はすべて井戸 *
76	SE1560	C III	(19.2)	(2.0)	0.2	板目	の埋土の中から出土した。いずれもヒノキ
77	SE1560	C V	—	1.5	0.2	板目	材である。
78	SE1560	(C V)	—	(2.5)	0.15	柱目	SE 1315 から3点(70~72), SE 1560 か
79	SE1555	C IV	(31)	2.2	0.2	柱目	ら3点(76~78), SE 1867から5点(80~
80	SE1867	C III	22.0	3.2	0.2~0.3	柱目	84), SE1870 から5点(85~89)と、まと *
81	SE1867	C III	18.3	2.7	0.1~0.2	柱目	まっけて埋っている傾向がみうけられる。中
82	SE1867	C III	17.2	2.3	0.2	柱目	でも SE1315 の2点(70・71)や SE1870
83	SE1867	C III	(14.6)	(2.1)	0.25	柱目	の5点(85~89)は形状、木取りともほぼ
84	SE1867	(C III)	—	2.6	0.2	柱目	同じであり、同一材から製作されたものと
85	SE1870	C III	22.8	2.6	0.2	柱目	考えられる。これら22点の齋串は井戸に関 *
86	SE1870	C III	21.9	2.7	0.2~0.1	柱目	わる祭祀に使用されたものであろう。22点とも上端を圭頭状にして、下端を剣先状につくった
87	SE1870	C III	(21.9)	2.7	0.15	柱目	もので、さきに分類した型式に従うとC型式に属する。側面の切り込みには、上端近くの側面
88	SE1870	C III	—	2.4	0.1~0.2	柱目	の左右1箇所 <sup>1)</sup> に施したものが大半を占めるが、74のように切り込みがないもの
89	SE1870	(C III)	—	2.7	0.1	柱目	(C—I型式)や69・76のように切り込みが2箇所のもの(C—IV型式)もある。なお83は圭
90	SE1385	(C IV)	—	1.8	0.3	柱目	頭の頂部から割り目をいれている。77は側面の左右に上方から3回、下方から少なくとも2回切

単位: cm, ( ) は推定

Tab. 13 齋 串 寸 法 表

わる祭祀に使用されたものであろう。22点とも上端を圭頭状にして、下端を剣先状につくったもので、さきに分類した型式に従うとC型式に属する。側面の切り込みには、上端近くの側面の左右1箇所<sup>1)</sup>に施したものが大半を占めるが、74のように切り込みがないもの(C—I型式)や69・76のように切り込みが2箇所のもの(C—IV型式)もある。なお83は圭頭の頂部から割り目をいれている。77は側面の左右に上方から3回、下方から少なくとも2回切り込みをいれる(C—V型式)。78は上下両端を欠き、確証はないが、C—V型式の齋串と考えておく。79は両側面の左右対称位置の7箇所(推定)に三角形の切り欠きを施すもの(C—VI型式)。90もC—VI型式かと推定される。

## H その他の木製品 (PL. 50)

92・93は荷札形の木筒で、表面に墨痕のないもので、ヒノキ材である。2点ともSK1886から出土した。

94は、先端を針状にとがらせた断面円形の小さな製品。周側面は縦方向にていねいに削り、上端は斜めに削り落す。削りの痕跡は摩耗せずによく残っている。用途不明。SE 1560 出土。長さ 2.6 cm, 上端径 0.5 cm, ヒノキ材である。

1) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』(前掲) p. 70。

95は細長い薄い板の一端を圭頭状につくり、他端を一側面から大きく、他側面から小さく斜めに削り落したもの。後者の削り落し端部は傷んではいるものの、原形を保っている。表面の削り調整は粗略であり、斎串の下半部を削り落したものととも思われるが確証はない。SK1886から出土し、長さ 9.9 cm、幅 3.2 cm、厚さ 0.3 cm である。ヒノキ材。

- \* 96は弧状につくられた幅 2.8 cm、厚さ 2.5 cm の角材で、広葉樹であるシキミの心去り材を使っている。中央部分を 1 cm 厚くして、そこに縦 1.6 cm、横 2.0 cm の方孔を側面から貫通させている。上下に貫通する釘穴が 4 箇所あり、そのうちの 1 つには断面が一辺 0.6 cm の方形になる角釘が残る。この釘は下端を欠失しているが、平らに叩きのぼした釘頭を直角に折り曲げる折頭釘である。釘を打ち込む場所には、あらかじめ、すり鉢状のくぼみを削り込み、おそらく釘穴も前もって穿っていたと思われる。作りは全体に粗略で、一部に樹皮をとどめている。SE1555 から出土した。長さは 31.3 cm である。

97は広葉樹（アカガシ亜属）の心去り角材を加工したもの。一側面を中央から両端にむけて少しずつ削り込み、端近くに切り込みをいれる。一端を欠くが、おそらく切り込みは両端に施されたのだろう。加工は粗略である。SE1870 から出土した。現存長さ 44.1 cm、中央部での

- \* 幅 4.4 cm、同厚さ 2.8 cm、末端部の幅 3.5 cm、同厚さ 2.8 cm である。

98も97と同様にアカガシ亜属材に削り加工を施したもの。細長くて分厚い板材の末端先縁を表裏面から斜めに削り落して鈍い刃状につくる。この先縁近くの一面は表面が摩耗しているが、他面は削りの痕跡がはっきり残る。加工は粗略である。SE1867 から出土した。現存長さ 36.8 cm、先縁近くでの幅 6.4 cm、同厚さ 2.0 cm である。

- \* 99は SE1870 の井戸枠縦板の一枚に転用されていたスギ板材（PL. 46）である。長方形の分厚い板目材の四周を、短辺の縁辺は幅 4 cm、長辺側は 2~3 cm 幅に、片面から削り落して傾斜面につくる。また、両短辺の縁端近くに各 2 箇所、両長辺側に各 4 箇所、直径 4~5 mm の釘孔が残る。表裏両面ともにやや腐蝕しているが、製作時の表面削り整形の痕跡がみとめられ、他に加工痕跡等はない。縦 35.5 cm、横 66.0 cm、厚さ 2.2~2.4 cm である。

- \* 100 は冠の残片である。荒目の織物に黒漆をかけたもので、冠の下端の周縁部と推定される部分も残っている。類品は平城宮跡 6AAO 区土坑 SK219 出土品の中にもあり、奈良県東大寺正倉院に伝世する「<sup>1)</sup> 礼服御冠残欠」ともほぼ共通する。この種の冠は、古文献にみる「漆冠」、<sup>2)</sup> 「漆沙冠」と考えられている。 かんむり

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告Ⅱ』1962, p. 75, PL. 56-1。

2) 関根真隆『奈良朝服飾の研究』1974, pp. 182 ~187・194・195。

## 6 木簡・漆紙文書・墨書土器

今回出土した文字史料には、木簡・漆紙文書、それに墨書・刻書土器などがある。

木簡は2点出土したのみで、しかもうち1点は井戸の枠板に書かれたものである。漆紙文書は十四坪東半のSK2001から計66点出土した。しかし小さい断片が多く、積読できないものの割合が高い。平城宮・平城京では、これまでに他に6件の漆紙文書の出土例がある。しかるに京内出土例の5件はいずれも左京におけるものであり、右京での出土はこれが初めての例である。墨書・刻書土器は発掘区内各所の溝・井戸・土坑等から125点出土した。

### A 木 簡 (PL. 51)

(1) 秦五□□米一斗 十一月十七日□ 164×25×5 051

十四坪の井戸 SE1867 から出土した<sup>1)</sup>。地名表記がなく、「人名+米」という表現をとる。類似した表記は、東隣の十一坪の調査の際、西一坊坊間大路西側溝 SD920 から出土した木簡「千麻呂米□」にも見られ、千麻呂の所有ないし管理する米を整理するために作成されたものと考えられている<sup>2)</sup>。今回出土したのも同様の性格をもつものであろう。

なお、「秦」は氏の名であろうが、秦氏といえば天平5年(733)「右京計帳」(実際は計帳手実)によって、右京八条一坊に少初位上秦常忌寸秋庭を戸主とする戸のあったことが知られる(大日本古文書第一巻494頁)。この戸が八条一坊の何坪に属したものは残念ながら不明であるが、一坊内に秦氏の分布がみられることは注目される。

それは秦氏が奈良時代において鑄造の技術を有し、大蔵省被管の典鑄司の鑄工には秦氏が多いという特徴のあることが平野邦雄氏によって指摘されているからである<sup>3)</sup>。本遺跡の鑄造関係工房の性格については、第V章—5において渡来系技術者の雑工人との関係の可能性を指摘しているところであるが、この木簡はそれにひとつの補強材料を与えるものといえよう。

(2) □<sub>米</sub>  
私□  
  
□笑竹  
稲三  
  
稲稲  
  
稲稲  
  
弊医私和笑竹  
  
和  
  
擔擔 私瓮  
  
通通 790×186×39 061 \*

十四坪の西辺に位置する井戸 SE1550 の枠板に書かれたものである。同じ文字が重複して書かれ、習書と見られる。

1) かつて SE1880 としたことがある(奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城概報』1987, p. 76)が、本書では、遺構番号をこのようにあらためた。今後はこの番号によらねたい。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984, p. 37。

3) 平野邦雄「埴化系技術の二系統」『大化前代社会組織の研究』1969, p. 162。

## B 漆紙文書 (PL. 51・52)

(1) 壹拾

□

「壹」の左側に、第4画目と重なるように細い縦の線が見えるのは、墨界線であろう。現状  
\* では「拾」の横まで伸びているようには見えない。

(2) 壹拾陸□

(1)と同じく大字を用いている。また、字の大きさ、筆跡とも(1)とよく似ており、本来(1)と同じ文書に属する断片の可能性が大きい。

\* (3)

2本の縦界線の間で、横界線の上の部分に文字が残る。「五」が書かれた部分は、紙が文字面を内側にして湾曲しているため、見えにくい。「五」の下の横界線は、「五」の第4画目と重なっている。界線の間隔は約16mmある。内容はなんらかの内訳を示すものらしい。余白からみて、「女」の上にはすぐ続く文字はない。したがって「五」の行は男の数を記した可能性が高い。横界線以下の2箇所にも墨痕がないことは、この文字部分が文書全体の末尾部分、ないしは一定の区切にあたることを示すと考えられる。

(4)

•

\* • □□  
□

縦横の界線がかすかに見える。縦界線は横界線の下へ伸びないから、文書の下端部にあたりと考えられる。「女」と左上の文字の位置関係からすると、「女」は割書きであろう。

(5) □子

\* 小子

「小子」は4～16才の男子を表す用語であり(戸令三歳以下条)、右行の「□子」もやはり年齢区分を表す語と考えられる。

- (6) □□  
 □部石村戸□  
 □財女□  
 □

「□部石村」は戸主であり、「□財女」はその戸口と推測される。

\*

- (7) 戸主  
 左文字であり、紙背に書かれたものである。

- (8) 婢

\*

- (9) 歳

「歳」の上には少なくとも一文字分余白がある。整った真書で(1)(2)と同筆の可能性がある。そうであるなら(1)(2)は年齢表記と考えられよう。

\*

- (10) □富売  
 □売  
 [足<sub>カ</sub>]

女性名を連記したもの。

- (11) ・□

\*

□塩麻□  
 ・□□  
 □

塩麻呂という男性名の断片であろう。

\*

- (12) □ □  
 □知君子□  
 □ [マ<sub>カ</sub>]

- (13) □戸

\*

- (14) □  
 式人

- (15) □□子

\*

(5)と同じように年齢区分を示すものであろうか。あるいは(5)と同筆か。

(16) ・□参拾

□□

・□□七

表裏の文字は天地が逆である。

\*

(17) 伯陸拾玖□

□□□□

左文字である。

\* (18) 郡司

「郡」の上には余白があり，郡名の記載はなかりう。

(19) ・□□

□奉塩

\*

・ □

□臣

□□

\* (20) □

寮牒

某寮の発給した牒と思われる。

(21) [須<sub>カ</sub>]  
□□

\*

□□小  
[淳<sub>カ</sub>]

(22) □

\*

道法御□

世天□□□□梵心従□

□作證□□彼説法初妙

□□□具□浄願□□

□曇□

\* 「梵心」「説法」等の語句から，仏典の一節とみられる。一紙が二つに折りたたまれている。これは漆液の蓋紙を捨てる際に，漆に触れていた面を内側にして折りたたんだためである。積文は表裏の写真をつないで作成した。

(23) ・ □周□  
正覚明□  
□師号佛  
[人<sub>ナ</sub>]  
□

・ 目  
□  
□

これも「正覚」「佛」等から、仏典の一節とみられる。「□師」は、仏の名号の一つ「天人師」であろうか。表裏は別紙である。(22)と同筆であろう。

(24) ・ □習  
悦□  
[釋<sub>ニ</sub>]  
□□

・ □

「悦」も「釋」もともに「よろこぶ」の意である。

(25) □□□  
歎歎

右の行の3文字は同じ文字のくりかえしと見られ、左の行とともに習書とみられる。右行の字の傍の下半部は「寸」であり、「寺」のように見える。

(26) ・ 広富□  
・ □□  
[戸<sub>ニ</sub>]

表は人名の一部であろうか。この文字の一部にかぶさるように、右にもう一紙が上に重なっており、さらに右に文字が書かれているが読めない。

(27) ・ □  
得  
□  
・ □  
□

(28) □日□

(29) □□  
□也

「也」の上の字の下半分は「心」である。

- (30) ・<sup>[家]</sup>  
 □□  
 □□  
 □  
 ・□□□

## \* C 墨書土器

墨書土器・刻書土器<sup>1)</sup>は、大和郡山市教育委員会による調査で27点(うち刻書7点)、第156-32次調査で2点、第168次南・北調査で85点(うち刻書10点、漆書1点)、179次調査で11点の、合計125点(うち刻書17点)が出土した。125点中須恵器108点、土師器17点と須恵器が圧倒的に多く、また、器種としては杯が多い。墨書の位置は杯・皿とも底面外部にあるが、杯蓋では頂部外面6点、頂部内面5点、内外ともにあるもの2点と内面・外面ほぼ同数である。それに須恵器壺の高台内に書かれたものも1点ある(Tab. 14-70)。

以下、注目されるものを選んで若干の注釈をつける。

+ (1~15・46・47・71・72) × (16・17・48~52) 「+」か「×」かは判定しにくい直角に交わるもの、縦線が横線に比して特に長いものを「+」とし、二本の線が直交していないものを「×」とした。「+」も文字というより記号と考えるべきであろう。十四坪西の西一坊大路東側溝の発掘調査でも「+」の墨書・「×」の刻書土器<sup>2)</sup>が出土している。

⊗ (20) ⊕ (53~58) これは同じものかもしれない。いずれも完全に残っているものはなく、残存している部分から類推した形である。「+」ないし「×」に半円がかぶさった形であり、先の「+」「×」となんらかの関係があるかもしれない。

\* 醬 (42) 容器の内容物を示すものであろう。

木 (37~39) 37・38とも第2画の縦棒を下に長く伸ばしている。また、37は一旦ヘラ書きした上から墨書している。39は「木」の右肩に小さい丸がつく。

Ⅲ (60~63) 記号であろう。「𠄎」(64) も同じものであろうか。

佃 (43) 佃のつく氏の名はこれまで知られていない。人名の一部であろうか。

\* 常麻呂 (24) この容器の所属を示す墨書であろう。

井 (29~33)・井□<sup>[家]</sup> (25) 氏名か人名かは不詳だが、「井家」という表記からすれば氏の一部であろうか。かつて十一坪東の西一坊坊間大路の西側溝 SD 920 を調査した際にも、「井」墨書が3点出土<sup>3)</sup>している。

西 (40・41) 十一坪東の西一坊坊間大路西側溝 SD920 から2点出土しており、本遺構出土のものともども、西市に近いことと関連するものかもしれない。

⊖ (65) 墨点を梅鉢状に5箇とその中心に1箇配する。単なる記号か、あるいは何らかの呪術的意味を有するものであろうか。

1) 本書では、便宜上、墨書・刻書のほか筒書、漆書によるものも含めて記述することにする。 京八条一坊) 発掘調査概要報告』1987, p. 25。  
 3) p. 120 註2) 前掲書, p. 32。

2) 大和郡山市教育委員会『平城京西一坊大路(右 4) 註2) に同じ。

番号	内容	器種	部位	PL. 番号	番号	内容	器種	部位	PL. 番号
1	+	須恵器 杯A	底部外面		40	西	須恵器 杯B	底部外面	
2	+	" "	" "		41	西	" 皿C	"	PL. 44-608
3	+	" 杯B	"		42	醬	" 杯蓋	頂部外面	PL. 44-606
4	+	" "	"		43	佃	" 杯A	内 面カ	PL. 44-609
5	+	" "	"		44	吉	" 杯Aカ	底部外面	
6	+	" "	"		45	丁	" 杯蓋	頂部外面	PL. 44-607
7	+	" "	"		46***	+	" 杯	底部外面	PL. 44-617
8	+	" "	"		47	□[+カ]	" 杯B	"	
9	+	" 皿C	"		48*	×	" (不明)	"	
10	+	土師器杯カ皿	"		49*	×	" (不明)	体部外面	
11	□[+カ]	須恵器 杯A	"		50*	×	土師器 杯A	底部外面	
12	□[+カ]	" (不明)	"		51**	×	須恵器 甕	口縁部内面	
13	□[+カ]	" (不明)	"		52**	×	" "	"	
14	□[+カ]	" (不明)	"		53	□[半カ]	" 杯蓋	頂部外面	
15*	□[+カ]	" (不明)	口縁部外面		54	□[半カ]	" "	"	
16	×	" 皿	底部外面		55	□[半カ]	" 杯B	底部外面	
17*	×	" (不明)	外 面		56	□[半カ]	" "	"	
18	岡	土師器 杯A	底部外面	PL. 44-610	57	□[半カ]	" "	"	
19*	大	須恵器(不明)	"		58	□[半カ]	" "	"	
20*	□[ㄨカ]	土師器杯カ皿	"		59	□[米カ]	" "	"	
21*	□[井カ]	" "	"		60	卍	" 杯A	"	
22*	井	" 杯B	"		61	卍	" "	体部外面	
23	観 二	須恵器 杯蓋	頂部外面	PL. 44-235	62	卍	" "	底部外面	
24	常万呂	" 杯B	底部外面	PL. 44-611	63	卍	" 杯B	体部外面	
25	井□[家カ]	" "	"	PL. 44-603	64	卍	" "	底部外面	PL. 44-615
26	毛 □	" 杯A	"	PL. 44-602	65	∴	" 皿	"	PL. 44-614
27	□ 定	" 杯Aカ	"		66	米	" 杯B	"	PL. 44-613
28	□ 人	" 杯A	"	PL. 44-601	67**	乙	" 甕	口縁部内面	
29	井	" "	外 面		68*	㊦	" 杯	底部外面	PL. 44-620
30	井	" 皿	"		69**	㊦	" 杯B	"	PL. 44-619
31	井	土師器(不明)	"		70	十寺□	" 壺K	高台内面	PL. 44-612
32	井	" (不明)	"		71	+	" 杯B	底部外面	
33*	井カ	須恵器(不明)	底部外面		72	□[+カ]	" "	"	
34	大	" 杯B	"		73	廿	" "	"	PL. 44-618
35	大	" "	外 面	PL. 44-604	74	廿	" 杯A	"	
36**	大	" 壺H	体部外面		75	吉	" 杯蓋	頂部外面	PL. 44-605
37*	木	土師器 皿	底部外面	PL. 44-616	76	大	" 杯B	底部外面	
38	木	須恵器 杯A	"		77	⊙	土師器杯カ皿	"	PL. 44-621
39	木°	" "	"		78	𠄎 𠄎	" 皿C	底部内面	Fig. 47-175

1～22：大和郡山市調査，23：第156-32次調査，24～69：第168次南・北調査，70～78：第179次調査  
1・4～8・10・12～15・19：SK2001，2・18：SK2033，3・11：SE2020，9：SK2036，16：SK2050，17：SK2032，  
20：SK2021，21：SK2022，22：SK2046，23：SE2070（掘形），24・27・31・36・47・55・60・63・68：SD1495，  
25・37：SE1365，26・30・40・44・56～58・65：SD1500，28・46：SD1440，29：SK1992，32・41・48：SE1550  
（48は掘形），33・53・54：SE1315（33は掘形），34：SK1356，35：SD1563，38：SE1375，39：SE1385，  
42：SK1307，43・61：SD1499，45：SK1520，49：SE1360，50：QG56 区灰褐土，51：QL64区灰褐土，  
52：SK1509，59・66：SE1555，62：SD1994，64：PE66 区バラス土，67：PB55 区灰褐土，69：SD1398，  
70・72・74～78：SE1867，71：P地区灰褐土，73：OD51区灰褐土

\* 刻書（焼成後） \*\* 銘書（焼成前） \*\*\* 漆書 無印は墨書 37は刻書の後墨でなぞったもの

Tab. 14 墨書土器一覧表

## 7 瓦 埴 類

4 次にわたる調査で出土した瓦埴類は、破片を含めて約11,500点ほどになるが、その多くは丸・平瓦である。軒瓦は36点出土しており、1アールあたりに換算すると約0.5点となる。平城宮内と比較してはもとより、平城京内においても、軒瓦の出土量の少ない地域といえる。

### A 軒 瓦

軒瓦36点のうちわけは、軒丸瓦14型式18種の25点と型式不明の2点、軒平瓦5型式6種の7点、型式不明の1点と近世の軒平瓦1点である(別表5)。

軒瓦の型式・種の特徴についての記載に関しては、平城宮・京出土の良好な資料も参考とした。製作技法、調整手法等については、本遺跡出土例において観察しえた結果を記し、破損、\* 摩耗等により観察不可能なものについては、記述を省略した。なお、各型式、種別の詳細については、『平城宮報告 I～XII』、『基準資料 瓦編1～9』等を参照されたい。

#### 1 軒 丸 瓦(PL. 53)

- 6011型式(以下「型式」を略す)、6012は内区主文様が三重圏線で構成される重圏文軒丸瓦。重 圏 文
- \* 6011は中央に珠点がない。B・Cの2種にわかれ、C種の破片6点が出土した。C種は小型で、3本の圏線がいずれも細いのが特徴である。瓦当裏面と側面はなでて仕上げているが、外縁から約0.8cm下がったところに、かまがた 箆型と榑型の合わせ目が瓦当面と平行のバリ状の突帯として残る。胎土に砂粒を含み、焼成は比較的良好、灰白色を呈す。6点のうち、井戸SE1550から出土した3点は同一個体と推定される。また、坪境小路の南側溝SD1495からは1点出土した。
  - \* 6012は中央に1個の珠点をともなう。A～Hの8種にわかれ、B種と種不明が各1点出土した。B種はA種に酷似するが、やや大振り。A種では第3圏線と外縁の基部が接するのに対し、B種では3mm前後の間隔があく。瓦当側面の上半部は縦方向に篋削りした後、横方向になる。胎土は緻密で、焼成は堅緻、黄灰色を呈す。種不明の1点は、第1圏線を残す破片で、瓦当裏面には篋削りが認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は堅緻、暗青灰色を呈す。
  - \* 6134は単弁蓮華文で間弁がそれぞれ独立している(間弁A系統)。A～Dの4種にわかれ、単弁蓮華文 B種1点が出土した。B種は単弁9弁で、D種に似て弁の彫りが深い、中房径がやや小さく、また蓮子数が1+6で異なる。間弁のうち4つは、その基部が中房に達していない。また、残りのうち1つは、基部近くで左右の蓮弁の輪郭線と重なる。瓦当側面の外縁から約0.6cm下がった位置には、箆端の痕跡が認められる。丸瓦部凸面は縦方向に篋削りした後、横方向になで、
  - \* 瓦当側面の下半部は縦方向になでた後、横方向になでて仕上げている。瓦当裏面はなでまわして仕上げる。丸瓦部凹面を調整した時の箆のあたりが、瓦当裏面近くに残る。胎土は緻密で、焼成は比較的堅緻、淡灰褐色を呈す。なお、丸瓦を接合した痕跡が認められない。(Fig. 56)
  - 6225は間弁A系統の複弁8弁蓮華文で、A～E・Lの6種にわかれる。A種1点が井戸SE 複弁蓮華文 1385、C種1点が井戸SE2070から出土した。A種には、瓦当裏面に半円弧状の溝(接合溝)
  - \* を彫って丸瓦を取り付けるものと、瓦当部分から丸瓦部分までを一連に共土でつくるものがある。出土したのは後者の例で、丸瓦部が瓦当裏面に向け、次第にその厚さを増す。丸瓦部凸

面は縦方向に篋削りした後、縦方向になでて仕上げる。丸瓦部凹面も、瓦当裏面の方から縦方向になでて仕上げているが、部分的に布目の圧痕が残り、また篋先のあたりが認められる。丸瓦部側面は縦方向に篋で削る。胎土に比較的大粒の長石類を含み、焼成はやや軟質、灰色を呈す。C種はA・D種に似るが、蓮子が最小で弁端に丸味があり、外区の凸鋸歯文が小さい。瓦当側面上半部は、縦方向に篋削りした後、横方向になでて仕上げる。瓦当裏面には接合溝が認められる。胎土に細かい長石類を含み、焼成はやや軟質、灰白色を呈す。

6229は間弁が連続する（間弁B系統）複弁8弁蓮華文で、A・Bの2種にわかれる。6229は平安京右京七条一坊<sup>1)</sup>や本遺跡東の西一坊坊間路西側溝<sup>2)</sup> SD920の出土例などで、瓦当裏面に丸瓦部凹面から続く布目の圧痕が確認されているように（Fig. 59）、瓦当部分から丸瓦部分までを一連で製作する。1点出土しているが、瓦当裏面が失われた小破片のため、種および布目圧痕の連続については明らかでない。瓦当側面上半部には横方向のなでが確認される。胎土に砂粒を少し含み、焼成は良好、淡灰褐色を呈す。

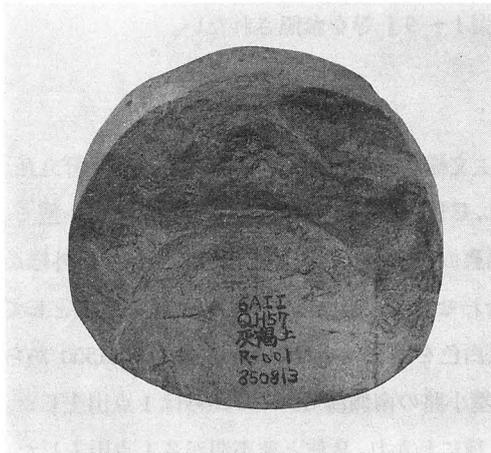


Fig. 56 6134 型式B種瓦当裏面

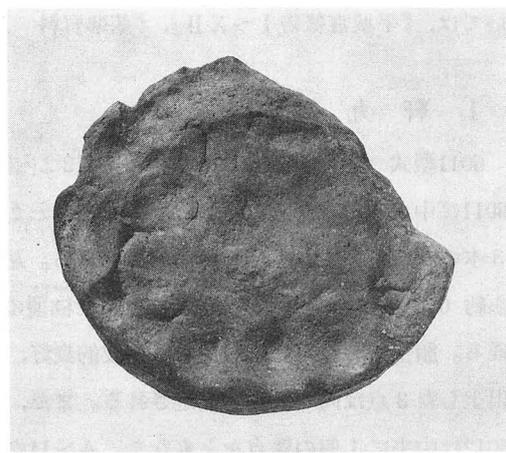


Fig. 57 6285 型式B種成形粘土篋詰め指の圧痕

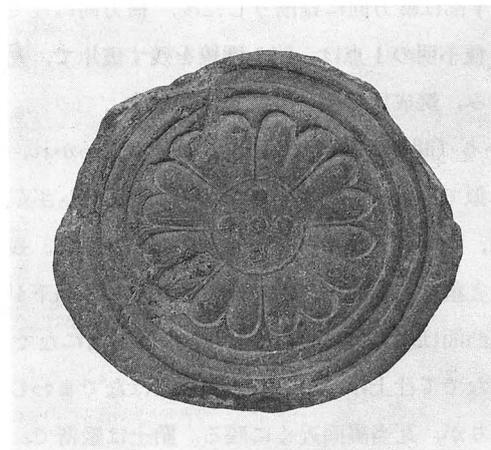


Fig. 58 西一坊坊間路西側溝 SD 920 出土  
6229型式A種

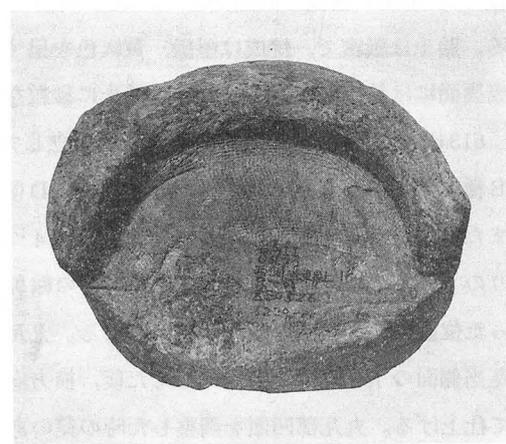


Fig. 59 6229 型式A種瓦当裏面の布目の連続

1) 鈴木久男「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会 1987。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告』1984, pp. 33・36。この報告書

では、新型式としているが、その後 6229A とした。なおA・Bの2型式は、長岡京の7228A・Bに対応することが判明した。『長岡京古瓦聚成』（前掲）参照。

6273, 6274は復弁8弁蓮華文, 間弁A系統の藤原宮式軒丸瓦。6273は外区外縁に凸鋸歯文がめぐり, A~Dの4種にわかれる。井戸 SE1335 から1点出土しているが, 摩耗がいちじるしく種は不明。胎土に砂粒を含み, 焼成は軟質, 淡灰褐色を呈す。6274は外区外縁に凸線鋸歯文がめぐり。A・Bの2種にわかれ, A種は, さらに Aa・Ab・Ac に細分される。井戸 SE1360からA種が1点出土したが, 外区部分の小破片のため, 細分については不明である。瓦当側面上半部は, 縦あるいは斜めに近い方向に篋で丁寧削り, 外縁に近い部分は, さらに横方向になでて仕上げる。胎土に細砂粒を含み, 焼成は良好, 茶褐色を呈す。

6282, 6285, 6304は間弁B系統の復弁8弁蓮華文。6282は中央の蓮子が大きく, 外区の圏線が太い。A・B・D~I・Lの9種にわかれ, B・G・H・I種は a・b, D種とF種は a・b・c・d に細分される。Fd種1点が土坑 SK 1508 から, G種1点が土坑 SK 1463 から出土した。F種はG・H種に似るが, 内区主文様が中房に向けて高くならない。範の彫り直しについては, 各復弁を構成する単位が, それぞれ独立しているもの (Fa種) から, 次第に弁中央部の輪郭線が重なるようになり, Fd種になると, 復弁の輪郭線が間弁と重なる部分がでてくる。全体に摩耗がいちじるしく, 接合溝を確認できるだけである。胎土に小礫と砂粒を多く含み, 焼成は軟質, 暗黄灰色を呈す。G種も摩耗のいちじるしい破片で, 僅かに接合溝を認めうる。胎土に砂粒を含み, 焼成はやや軟質, 暗灰色を呈す。6285は細長い弁端が丸味をもつ。A・Bの2種にわかれ, B種は, さらに Ba種と中房周線などを彫り直した Bb種にわかれる。Ba種1点が南北溝 SD1547 から出土した。瓦当の成形粘土と内面接合粘土との接合面で剝離しており, 成形粘土の裏面には, 下縁に沿って, 瓦範に粘土を詰めるにあたり指で強く押し込んだ跡をとどめている (Fig. 57)。瓦当側面は縦方向の篋削り, 瓦当裏面は篋でなでる。外面接合粘土の大半が失われているが, 丸瓦凸面は縦方向に篋で削る。凹面は縦方向になでるが, 糸切り痕と布の合わせ目の圧痕が残る。凹面両側端部は, さらに面取り風に斜めに篋で削っている。丸瓦側面は玉縁部まで縦方向に篋で削る。玉縁部の凸面及び端部は横方向になでる。なお, 丸瓦は粘土板巻きつけによるものである。丸瓦の先端に接合のための加工はみられない。また, 成形粘土と丸瓦の先端との間に 2mm 前後の隙間がある。胎土に砂粒を含み, 焼成はやや軟質, 黒色を呈す。全長 35.0 cm, 玉縁長 4.2 cm。6304は復弁の単位が離れ, 中房の高いものが多い。A~E・G・L・Nの8種にわかれ, A種1点が井戸 SE 1385, G種1点が土坑 SK 2001 から出土した。A種はB種とともに弁端が尖り気味であるが, B種より弁の盛り上がり\*が強い。瓦当側面の上半部には縦方向の篋削りも認められるが, 全体を横方向のなでで仕\*上げている。瓦当裏面は, なでまわした後, 丸瓦取り付け位置付近と下縁に沿って円弧状になでる。接合溝が認められる。胎土は微砂粒を含み, 焼成はやや軟質, 暗灰色を呈す。G種は中房がそれほど高くないが, 弁の盛り上がりは大きい。瓦当裏面はなでて仕\*上げている。丸瓦部凸面は縦方向になで, 外縁近くをさらに横方向になでる。瓦当側面の下半部は横方向になでて仕\*上げる。内面接合粘土には, 指で押さえた跡が残る。胎土に小礫と砂粒を含み, 焼成はやや軟質, 暗青灰色を呈す。

6308は間弁A系統の復弁8弁蓮華文で, 中房が低い。A~D・H~Nの11種にわかれる。井戸 SE 2070 から1点出土しているが, 摩耗が著しく種は不明である。胎土に砂粒を含み, 焼成は軟質, 黄灰色を呈する。

6313は複弁4弁蓮華文で、中房の蓮子が1。A～Iの9種にわかれ、B種1点が出土した。B種は間弁A系統、小形で弁の盛り上がり強い。瓦当側面は横方向になで、瓦当裏面もなでて仕上げる。瓦当径の大きさに比して、瓦当部分が厚い作りである。胎土に砂粒を少し含み、焼成はやや軟質、黒灰色を呈す。

6316は複弁蓮華文で間弁がない(間弁C系統)。A～I・K・M～Pの14種にわかれ、D・K種が複弁9弁蓮華文であるほかは、複弁8弁蓮華文である。H種1点とK種2点が出土した。H種は中房が高く、外区外縁の凸線鋸齒文をとまなわぬ。また、他種と異なり唯一複弁どうしが離れる。瓦当側面は横方向になでる。瓦当裏面は指で押さえてから横方向になでているが、雑な製作のため、指の圧痕などの凹凸がめだつ。接合溝を僅かに残す。胎土は緻密で、焼成は堅緻、灰色を呈す。北側溝 SD1499 から出土した。K種は中房の低い複弁8弁蓮華文で、外区外縁の凸線鋸齒文をとまなわぬ。Ka種と蓮子、中房圏線、蓮弁などを彫り直したKb種に細分され、各1点ずつ出土した。Ka種は小破片のため詳細は不明であるが、丸瓦部凸面に縦方向の篋削りが認められる。胎土に砂粒を少し含み、焼成は軟質、黒灰色を呈す。Kb種は井戸 SE1555 から出土した。瓦当側面は縦方向の篋削りを行なった後、上半部は外縁付近だけを、下半部は全体を横方向になでる。瓦当裏面にはなでが認められる。丸瓦の径が小さく、取り付け位置は低い。接合溝を残す。胎土は砂粒を少し含み、焼成はやや軟質、灰黒色を呈す。

**新 型 式** 新形式は土坑 SK1965 から出土した内区部分の資料である。圏線がめぐる低い中房に1+4+8と二重に蓮子を配置する。内区主文様は、複弁9弁と単弁1弁で構成される。また、複弁のうち単弁とほぼ対称的な位置にくる複弁は、複弁の単位の一つが子葉だけを表現したものである。間弁はB系統で、弁区の外には圏線がめぐる。瓦当裏面には横方向の篋削りとなでが認められる。接合溝が僅かに残る。胎土に長石類を少し含み、焼成は比較的良好、黄灰色を呈す。なお、井戸 SE1335 からは、型式不明の軒丸瓦1点が出土している。

## 2 軒 平 瓦 (PL. 54)

**偏行変形  
忍冬唐草文** 6646は変形忍冬唐草文を右から左に向かって5回反転させた藤原宮式軒平瓦で、上外区に珠文、下外区に凸線鋸齒文を配す。A～Iの9種にわかれ、B種1点、掘立柱建物 SB2075 の東北隅の柱掘形から、H種2点が井戸 SE2070 から出土した。B種はA種と同様、内区両端上部に珠文各1を配す。上外区の珠文が粗なBa種とそこに珠文を彫り加え、変形忍冬文と線鋸齒文を彫り直したBb種にわかれ、Ba種が出土した。顎部下半が剝離して失われており、そこに縦位の縄叩き目が認められる(Fig. 61)。平瓦凸面を縄叩きで叩きしめ、粘土板を貼り付けて段顎をつくる藤原宮式の6646、6647には、この種の状態を示すものがしばしばみられる。顎部に続く平瓦部凸面は横方向になでる。凹面は瓦当面近くを横方向に、側端部を縦方向に篋で削る。瓦当側面上端の角を縦方向に篋で削る。側面は横方向に篋で削った後、横方向になでるが、瓦当面近くは、さらに縦方向に篋で削ってからなでて仕上げる。胎土に長石類を含み、焼成は比較的堅緻、暗青灰色を呈す。H種は内区両端上部に半円形の表現がみられる。B種のばあいと同様の剝離状態を示し、そこに縦位の縄叩き目が認められる。瓦当側面には縦方向の篋削りを施し、凹面は横方向になでる。また、瓦当側面上端を斜めに落し、縦方向になでる。出土した2点はいずれも小破片であるが、同一個体と推定される。胎土に細かい長石類を

少し含み、焼成はやや軟質、灰色を呈す。

6663は単位文様を3回反転した均整唐草文で、外区、脇区の文様は圏線となる。同じ特徴をもつ6681とは、中心飾りが異なる。A～F・H～Oの14種にわかれ、M種1点が井戸SE1867から出土した。曲線顎で、顎部は断面三角形の粘土板を貼り付けてつくる。顎部を横方向にな  
\* でており、それに続く平瓦部凸面は横位の縄叩き。部分的に縦方向になでて縄叩き目を消している。凹面は全体を縦方向になでつける。また、瓦当面から約7cm前後の範囲をやや斜めの横方向に篋で削り、さらに瓦当付近だけを横方向になでる。平瓦部側面は横方向になでて仕上げる。瓦当面の上下外区の外縁部分を横方向になでている。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質、灰色を呈す。

\* 6666は単位文様を3回反転した小形の均整唐草文で、A種1種しかない。6664Nに似るが、唐草が界線から立ち上がることで、その立ち上がりが急である点で異なる。急傾斜で低い段顎となる顎部は横方向になでる。平瓦部凸面は横位の縄叩きで、一部を縦方向になで、顎部近くは横方向になでる。凹面も横方向のなでであるが、僅かに布目の圧痕の認められる部分がある。凹面の側端部付近を縦方向になで、さらに側面との角を水平に落として縦方向になでる。平瓦  
\* 部側面には縦方向のなでが認められる。範端が瓦当面の内側にあるため、その外になる上下外区の外縁を横方向になでる。胎土に長石類を含み、焼成は堅緻、暗青灰色を呈す。1点出土。

6689は単位文様を3回反転した大振りの均整唐草文で、A～Cの3種にわかれる。A種は、中心飾りの基部が二又に分かれるAa種とそこを楔形に彫り直したAb種にわかれる。A種1点が井戸SE1770から出土したが、小破片のため、細分については不明である。瓦当面の外縁  
\* 上には範端が認められる。胎土に微砂粒を多く含み、焼成はやや軟質、暗灰色を呈す。

6721は単位文様を5回反転した均整唐草文で、A・C～Kの10種にわかれる。C種1点が土坑SK1373から出土した。C種は中心飾りの左右葉が逆「八」字形をしているという特徴がある。曲線顎で、瓦当部と平瓦部を接合した痕跡は認められない(Fig. 62)。凸面の調整としては、縦方向になでつけた痕跡と顎部平坦面及び傾斜面の横方向のなでがかろうじて認められ  
\* る。凹面は瓦当近くを横方向になで、側端部を縦方向に篋で削る。側面は縦方向に篋で削り、上端を面取り風に落とす。凹面の瓦当外縁から約0.3cmのところに範端の痕跡が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質、中心飾り付近が淡灰褐色であるほかは、灰黒色を呈す。

近世の軒平瓦は菊花唐草文の破片。段顎で瓦当面の外区と顎部は横方向になでている。平瓦部凸面は縦方向になでて仕上げるが、顎部近くに篋先のあたりが認められる。凹面は横方向に  
\* なでて仕上げる。瓦当側面は横方向のなでであるが、瓦当面近くだけさらに縦方向になでる。胎土に小礫、砂粒を含み、焼成は比較的堅緻、黒色を呈す。

なお、土坑SK1782から出土した1点は左上端部の小破片で、外区、脇区の圏線しか残していないため、6663か6681かは不明である。凹面の瓦当面近くには縦方向のなでが認められる。胎土に小礫と微砂粒を含み、焼成は軟質、灰色を呈す。

## \* B 丸瓦・平瓦 (PL. 54)

整地土や遺構から出土した丸・平瓦の多くは破片であって、資料的に十分な検討をなしうるにいたっていない。しかし、全形を知りうる資料があるので、まずそれから記し、次いで、現

在までに知りえた若干の点について報告しておく。

丸瓦 井戸 SE1560 から出土。粘土紐巻き上げによるもので、全長 35.8 cm、玉縁長 4.7 cm、径は広端部で 15.6 cm、玉縁端部で 14.4 cm。厚さは広端部で 1.8 cm、玉縁端部で 1.4 cm。凸面は横方向になでた後、部分的に縦方向になでつけているが、僅かに縦位の縄叩き目を残す。玉縁部の凸面と端部及び丸瓦部の広端部と玉縁側の端部は、ともに横方向になでて仕上げ \* げる。側面は広端部から玉縁までを一連に篋で削っている。玉縁凸面には、0.8 cm 間隔で 2 条の低い突線がめぐる。胎土に小礫と長石類を少し含み、焼成はやや軟質、淡灰褐色を呈す。

丸瓦の破片は、凸面の縦位の縄叩き目をなでて消し、広端部径が 15~16 cm 前後のものが多く、確認できる範囲では、すべて玉縁をとまなう。土坑 SK1389 や南北溝 SD1407 などからは、凸面の縦位の縄叩き目をそのまま残すやや小形の丸瓦（推定径 12 cm 前後）が少数出 \* 土している。玉縁部に突線をめぐらすものは、井戸、側溝、土坑などから 10 点余り出土している。

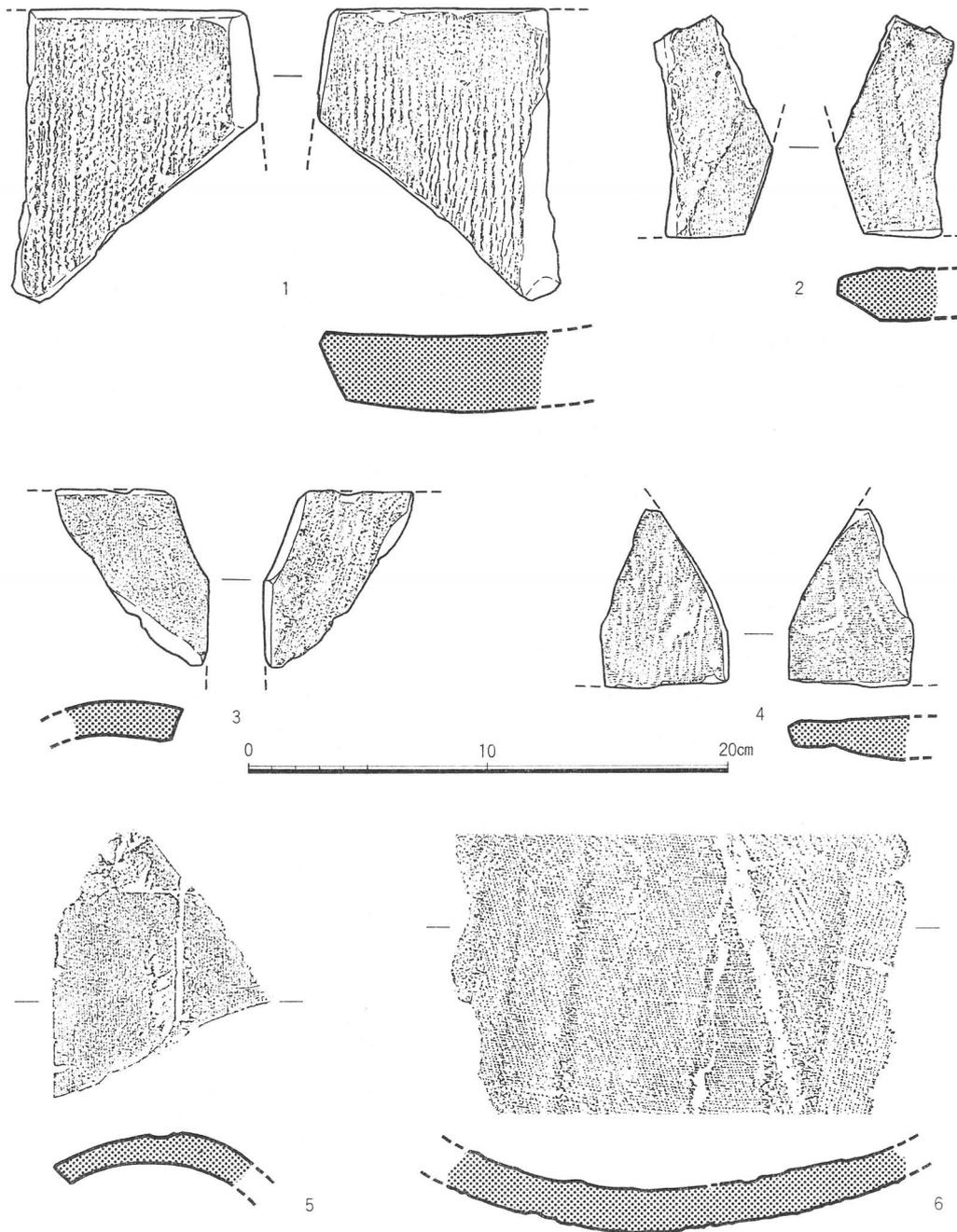
平瓦 平瓦 1 南北溝 SD1412 から出土。全長 33.7 cm、幅は広端部で 26.8 cm、狭端部で 26.1 cm、厚さは 1.7~2.1 cm と一定でない。凸面の縦位の縄叩き。凹面は一部縦方向になでるが、 \* 糸切り痕と広端部から約 1/3 のところに布目がつんでいる痕跡が認められる。側面は縦方向に篋削りした後、縦方向になでる。広端部と狭端部はなでて仕上げている。胎土に小礫と砂粒を \* 含み、焼成はやや軟質、黄灰色ないし暗灰色を呈す。

平瓦 2 南北溝 SD1412 から出土。狭端部の一角を欠くが、全長 34.0 cm、広端部幅 26.1 cm、 \* 厚さ 1.4~2.4 cm。凸面は縦位の縄叩きで、部分的になでつけており、凹面にも縦方向のなで \* が認められる。両端部付近には指先の圧痕が認められる。側面と端部の調整は平瓦 1 と同じで \* ある。また、凹面には僅かではあるが模骨の痕跡がみられ、また、側端部近くに布の綴じ合 \* わせ目の圧痕が認められる。胎土に微砂粒を含み、焼成はやや軟質、灰色ないし灰黒色を呈す。

平瓦 3 PC49 区から出土。これも狭端部の一角を欠くが、全長 32.7 cm、広端部幅 25.8 \* cm、厚さ 1.6~2.4 cm。凸面は縦位の縄叩きで、凹面は広端部を除く周縁部分を面取り風に篋 \* で削っている。側面、端部はなでて仕上げる。凹面には模骨の痕跡と両端部近くの布端の圧痕 \* が認められる。胎土に小礫と砂粒を少し含み、焼成はやや軟質、灰色ないし灰黒色を呈す。

平瓦 4 土坑 SK1373 から出土。狭端部を欠き現存長 26.2 cm。広端部の幅 22.8 cm とひと \* まわり小さい平瓦。厚さは 1.8~2.6 cm と一定でない。凸面は粗い縦位の縄叩きで、糸切り痕を残 \* す。凹面にも糸切り痕を残すが、広端部近くを面取り風に横方向に篋で削る。側面、広端部と \* も、篋削り後なでて仕上げる。胎土に小礫と砂粒を含み、焼成は比較的良好、黄白色を呈す。 \*

平瓦の多くは、凸面に縄叩き目が認められる。その大半は縦位の縄叩き目である。凹面に模 \* 骨の痕跡をとどめるもの (Fig. 60-6) と、側端近くに布端が認められるもの \* とがあることから、桶巻作りと一枚作りの両種の存在が知られる。横位の縄叩き目は、平瓦全体の約 4% を占める \* が、その約 1/3 が坪境小路の側溝 SD1495, 1496, 1499, 1500 から出土している。横位の縄叩 \* き目の例では、模骨痕をとどめるものがほとんどなく、加えて、側端部に布端を確認できるも \* のがあることから、その多くは一枚作りであった可能性が高い。また、格子叩き目の占める割 \* 合は 1% に満たない。このほか、土坑 SK2036、井戸 SE2070 などからは、凹凸両面に縦位の \* 縄叩き目がある厚手の平瓦（厚さ 3.0~3.5 cm, Fig. 60-1）が 7 点出土している。



1 : 凹凸両面に縄叩きのある平瓦 2~4 : 隅瓦 5 : 鏡書瓦 6 : 平瓦模骨痕

Fig. 60 平瓦の調整手法・隅瓦・鏡書瓦

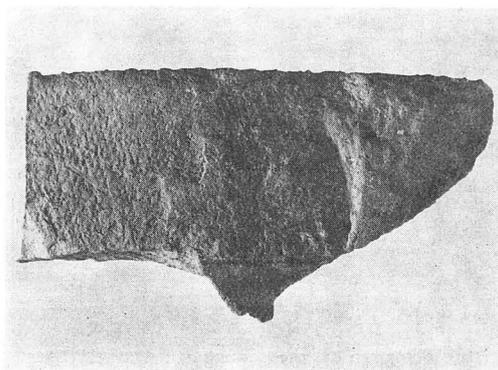


Fig. 61 軒平瓦6646型式Ba種

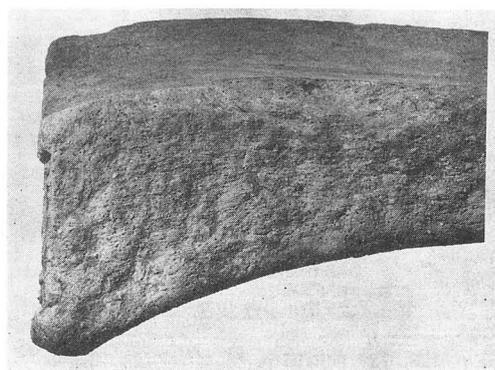


Fig. 62 軒平瓦6721型式C種

## C 道具瓦・埴 (PL. 54)

鬼瓦 南側溝 SD1495 から出土した蓮華文鬼瓦の上端右角の破片で、唐草文の一部を残す。側面は篋で削り、裏面には指で押さえたあととなでが認められる。類例は、本調査地東方の西一坊坊間路西側溝 SD920<sup>1)</sup> や左京八条二坊四坪から出土しており、それによると、中央に宝相華風の蓮弁と弁端の尖る間弁を、内区四隅には飛雲文を配し、圏線を隔てた外区は唐草文となる。胎土に小礫と多量の砂粒を含み、焼成は比較的堅緻、暗青灰色を呈す。

三彩瓦 南側溝 SD1496 から出土した一辺を残す三彩瓦片。現存長 9.0 cm、厚さ 1.6 cm で、裏面を除き釉がかかる。釉の剥落した部分からは、側面は篋削り、表面はなで、裏面は刷毛目であったことがわかる。埴になる可能性も否定できないが、極先瓦と推定される。胎土に砂粒を少し含むが、精選されている。焼成は比較的良好で黄白色を呈す。釘孔は認められない。

隅瓦 丸瓦先端の一角や平瓦広端部の一角を、ごく僅かではあるが、斜めに切り落とした隅丸瓦片 1 点と隅平瓦片 2 点 (南側溝 SD1495、北側溝 SD1499 上層出土) がある (Fig. 60-2~4)。これらは、いずれも焼成前に加工している。

篋書瓦 井戸 SE1315 から出土した丸瓦の破片 (Fig. 60-5)。文字か記号か判定できない。

埴 井戸、土坑、坪境小路の側溝などから合計 74 点の埴が出土した。埴には、①通常の無文の方形のものと、②裏面から刺突が加えられているものとの 2 種類がある。①は 59 点出土しているが、そのなかで大きさの判明するものは僅か 2 点である。井戸 SE1315 出土のものは、長さ 26.0 cm、幅 19.0 cm、厚さ 6.6 cm。土坑 SK1971 出土のものは、長さ 14.5 cm、最大幅 12.0 cm、厚さ 6.3 cm。後者の例は砥石に転用しており、長側面が凹面を呈す。この種の埴は、厚さが大別して、3~4 cm、6~7 cm、8 cm 強の 3 種類にわかれる。なお、表面になで、側面に篋削りの痕跡をとどめるものがある。②は 15 点出土しているが、厚さ 4 cm 前後の偏平なものと同側辺部に約 2.4 cm 高い段をつくりだすものがある。段の幅は 5.9~8.5 cm と一定していない。なお、段がつかない例で、土坑 SK1304 から出土したもの (Fig. 64) は、厚さ 4.0 cm、両側辺を残しており、その幅は 14.0 cm である。表面と側面は篋削りをした後、なでて仕上げる。裏面は深さ 2~4 cm の刺突があるほかは無調整である。②の埴は部分的な破片しか出土していないこともあって、その用途については不明である。段の部分を除けば、どちらも厚さが 4 cm 前後と近似していることから、段のあるものを扉の蹴放ちに、その他を床に敷くというような使い方も考えられよう。裏面の刺突に規則性はまったくみられない。

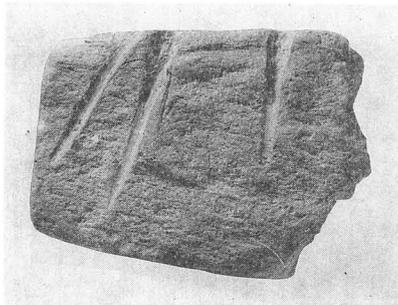


Fig. 63 埴の刺突状況

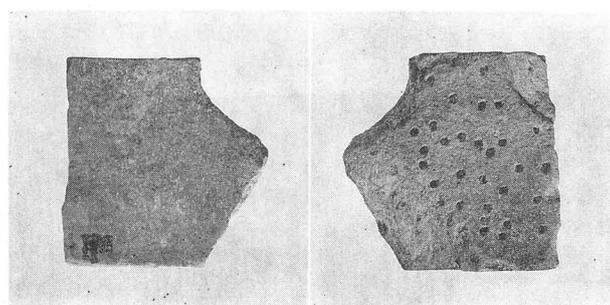


Fig. 64 両側が残る刺突ある埴

1) p. 128 註2) 前掲書 p. 36。

2) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告

書 昭和56年度』1982, p. 68。

## 8 動物遺存体

平城京右京八条一坊十三・十四坪の調査では、井戸や、道路側溝などの奈良時代の遺構からカエル・シカ・ウマなど破片数で87点に及ぶ動物遺存体が出土した。それらの埋没過程や、当時の利用状況などに関して興味ある知見が得られた。

### \* A 出土動物遺存体の概要

**両生類** トノサマガエル カエル類で種の同定が可能なのは腸骨、上腕骨などに限られる。トノサマガエル  
大きさ、形態からみてトノサマガエルに酷似するものを選び出すことができた。この他の部位にも、大きさからトノサマガエルに相当する保存状態の良い腓骨、大腿骨、下顎骨などが多く含まれるが種を確定するには至らなかった。<sup>1)</sup>

\* アカガエル 腸骨のなかにトノサマガエルとは異なる特徴をもち、アカガエルに類似する資料が含まれている。各部位の大きさはほぼ同大なので、他の部位のなかにアカガエルのものが含まれるかどうかは明白ではない。

その他のカエル類 保存状態の良い腓骨、大腿骨、下顎骨、椎骨などが採集されている。しかし上記の理由から種の同定にいたらなかったものである。大きさからみて、すべてがトノサマガエル、アカガエル相当のもので、アマガエルなどのより小型の種、ヒキガエルなどのより大型の種のものとは含まれない。アカガエル

**爬虫類** タイマイ 背甲板の外皮の破片が1点出土している。べっこう細工の材料であるタイマイ  
う。小破片のため、詳細は、不明である。

**鳥類** 指骨が1点出土しているが、この部位では科、属、種の査定は不可能であった。

\* **哺乳類** クマネズミ属の一種 日本にすむネズミ科クマネズミ属には、代表的なものとしてクマネズミ (*Rattus rattus*) とドブネズミ (*Rattus norvegicus*) があるが、いずれとも判定できなかった。後者に含まれるニホンドブネズミは、人間とともに大陸から渡って来たものと言われ、その年代が問題となっている。こんご、頭骨、顎骨など種名の判定に有効な部位を注意して、両種の日本での出現、分布の変化を検証しなければならないだろう。<sup>2)</sup> クマネズミ属の一種

\* ニホンジカ 右京八条一坊十三・十四坪の坪境小路 (SF2000) の北側溝 SD1499 上層から橈骨破片が出土している。火熱を受け白色に灰化しており、無機質化していたため、普通は骨の残らないこのような層でも残っていたものであろう。成獣のものである。<sup>3)</sup> 井戸 (SE1530) 底部から橈骨、遠位端が出土している。1才未満の幼獣のもので骨表面は、まだ粗く骨化が十分ではない。当然、骨端部は未癒着で失われている。その他の部位がないので、破片状態のままニホンジカ

1) 筆者の手元にはカエル類、小型哺乳類の同定のための現生標本が備わっていない。そのため、国立科学博物館人類研究部の松浦秀治氏のお世話により、カエル類については、野刈家宏氏の、ネズミ類については富田幸光氏の鑑定を得ることができた。御多忙中、わざわざ時間をさいていただいた各氏のご厚情に感謝する。しかし鑑定結果、所

見についての責任はすべて、筆者に帰する。

2) 林 壽郎『標準原色図鑑全集 19 動物 I』1968, p.96。

3) 資料があまりに小さく、種としての特徴が明らかでなく、同定に疑問を生じたため独協医科大学 茂原信生氏に確認をいただいた。氏に感謝する。

井戸に投棄されたものであろう。切傷、その他の加工痕はみられない。

ウ マ ウマ 黒褐色粘土の包含層 (PE65 区) から、複数個の臼歯のものと思われるエナメル質破片が出土している。破片の大きさ、数からみると少なくとも3本以上の臼歯のものである。哺乳類の歯は比較的残りやすいもので、とくにエナメル質は腐蝕に対して強く、最後まで遺存することが多い。おそらく、下顎骨または、上顎骨に生えていたものが、土中埋没中に他の骨質部、象牙質、パルプ質が腐朽した結果、エナメル質だけが残されたものであろう。そのほかには、井戸 (SE1530) 底部から、ウマの臼歯のエナメル質破片が1点出土している。土壌水洗選別によって採集されたものである。

ウマ/ウシ不明 井戸 (SE1530) 底部からウマまたはウシに相当する大きさ、形態をもった肋骨破片が1点出土している。割れ口へのぞく肋骨の内部の海綿質には、わずかに濃青色の藍鉄鉱 (ビビアナイト) が析出しているが、保存状態はよい。外面部の表面には鋭い金属器による切傷が2条、ほぼ、平行してつけられている。この痕跡から、このウマ、またはウシが、当時の人々によって食べられた残滓<sup>1)</sup>であることは明白である。

両生類 Class Amphibia
トノサマガエル <i>Rana nigromaculata</i>
アカガエル 類似 <i>Rana sp. indet.</i>
カエル科 属, 種不明 <i>Anura fam., gen. et. sp. indet.</i>
爬虫類 Class Reptilia
タイマイ <i>Eretmochelys imbricata</i>
鳥類 Class Aves
科, 種不明 <i>Aves, gen. et sp. indet.</i>
哺乳類 Class Mammalia
クマネズミ科の一種 <i>Rattus sp. indet.</i>
ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
ウマ <i>Equus caballus</i>
ウマ・ウシ不明 <i>Equus/Bos(fam. et gen. indet.)</i>

Tab. 15 出土動物遺存体種名表

## B 考 察

今回の発掘で出土した動物遺存体の大部分は、井戸 (SE1530) の底部の堆積土を持ち帰り、\* 少しずつ水洗選別を行なって採集できたものである。井戸の堆積物には、多くの土器その他の生活廃棄物、呪術関係の遺物、食料残滓などが含まれていることが多い。しかし、今回の発掘で出土したカエル類は、人間が直接利用したものではなく、「井の中の蛙」が自然死したか、あるいは不用になった井戸を埋め立てるにあたって生き埋めになったものであろう。\* 部位別の出土量では、腓骨、腸骨、大腿骨が多いけれども、これは骨本来の強度の違いによるものであ

ろう。  
タイマイの出土も興味深い。タイマイの背甲板の外皮を磨いたものが<sup>べつこ</sup>鱗甲である。鱗甲製品

1) この部分の肉は、俗にいう「カルビ」「スペアリブ」にあたり、脂肪のよく乗った部分である。

は、奈良時代では奈良県東大寺正倉院に例があり<sup>1)</sup>、また、平城京では左京二条三坊十六坪の土坑 (SK2338)<sup>2)</sup> からの出土に次いで2例目であり、古代でも珍重されていたことがわかる。

従来、こうした小さな破片は発掘中に見逃されることが多かったと思われるが、土壌の水洗選別によって、これまでの発掘では報告例の少ない、このような遺物を採集することが可能に

\* なったといえよう。今後、こうした発掘が一般的になることを望みたい。

## 9 植物遺存体

種子、核、堅果などの大形植物遺存体は、9基の井戸内堆積土から出土したものである。

同定結果は、別表にまとめて示し、学名は北村四郎らによった。木本はアンズ、ウメ、スモモ、モモ、オニグルミ、ヒメグルミ、ハシバミ (?), クリ、ムクロジ、センダン、ヤマモモの11種類を同定した。ハシバミ (? )については、遺存状態が悪いので断定できない。しかし、ハシバミの可能性が大であるので (? )を付した。草本はオナモミの1種類を同定した。種類ごとの出土量はモモの核がとりわけ多いのが目立つ。

木本11種類のなかで食用に利用されたとと思われるのは、アンズ、ウメ、スモモ、モモ、オニグルミ、ヒメグルミ、ハシバミ (?), クリ、ヤマモモである。このなかで注目されるのは、アンズの出土である。岡田文男氏によると、このアンズの核は、わが国最古の出土例であるとのことである。アンズはウメ、スモモ、モモ等と同様、外来の果樹であるが、いつ頃渡来したかは不明であった。しかし、今回の出土によって少なくとも奈良時代には渡来していたことが判明した。万葉集、古今集の古歌にはいずれもカラモモの名で呼ばれており、アンズとは言わない。なお、アンズとは杏子の唐音である。

種 類	出土遺構 (カッコ内は点数)	出土部位
ア ン ズ (バラ科) Prunus Armeniaca L. var. Ansu Max.	SE 1550 (1)	核
ウ め (バラ科) Prunus Mume Sieb. et Zucc.	SE 1530 (4), SE 1550 (3), SE 1560 (7)	核
ス モ モ (バラ科) Prunus salicina Lindley	SE 1530 (3), SE 1305 (2), SE 1315 (1) SE 1335 (1)	核
モ モ (バラ科) Prunus Persica Batsch	SE 1385 (5), SE 1530(147), SE 1550(170) SE 1555(53), SE 1560(221), SE 2020(90)	核
オニグルミ (クルミ科) Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana Kitamura	SE 1560 (3)	核
ヒメグルミ (クルミ科) Juglans mandshurica subsp. Sieboldiana var. cordformis (Makino) Kitamura	SE 1560 (1)	核
ハシバミ ? Corylus heterophylla Fisher	SE 1385 (1)	堅果
ク リ (クルミ科) Castanea crenata Sieb. et Zucc.	SE 1385 (4), SE 1560 (3)	堅果
ムクロジ (ムクロジ科) Sapindus mukorossi Gaertn.	SE 1335 (2)	堅果
センダン (センダン科) Melia Azedarach L.	SE 1530 (1), SE 1550 (1), SE 1560 (1)	核
ヤマモモ (ヤマモモ科) Myrica rubra Sieb. et Zucc.	SE 1550 (1)	堅果
オナモミ (キク科) Xanthium Strumarium L.	SE 1530 (22)	種子

Tab. 16 出土植物遺存体同定一覧表

1) たとえば、奈良国立博物館『正倉院展目録』1978に「瑠璃如意」がある。  
2) 奈良国立文化財研究所『昭和57年度 平城概報』1983, p. 43。

3) 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑』木本編 I・II, 1979。植物遺存体の同定に関しては、京都市埋蔵文化財研究所の岡田文男氏の助力を得た。氏に感謝する。

## 10 土器埋納遺構出土遺物

調査区内において10基の土器埋納遺構を検出した。出土時に内容物が明らかになったものもあるが、現場では土器内流入土には手をつけず、室内でのX線写真撮影によって内容物の確認作業をおこなった。その結果 SX1535, SX1400, SX1578 出土の土器に内容物の遺存していることが判明した。以下、この3基について埋納状況と内容物を報告する。\*

**SX1535 出土遺物** (Fig. 65) 十四坪検出の土器埋納遺構。出産後の胎盤、すなわち、胞衣<sup>えな</sup>を土器に納めて埋納した遺構である。東西34cm, 南北21cm, 深さ18cmの平面隅丸方形の坑内に、蓋をした須恵器杯Bを正位に納める。土器は坑の底面から4cmほど浮き、わずかに南方に傾いた状態で出土。杯・蓋ともに完形品で、蓋は杯を完全に覆っていたが、土圧で割れ、1/3ほどに灰色の粘質土が流入していた。X線透過写真により、流入土の下に墨挺と和同開珎の存在が明らかになった。杯は口径 20.0 cm 器高 7.1cmの深めの土器である。底面へラ切り後に体部の下半から底面をロクロ削りし、高台の貼付後に高台周囲をロクロなどで仕上げる。蓋は口径 21.6 cm, 高さ 2.8 cm。やや扁平で端部がわずかに屈曲する。頂部外面はへラ切りのまま。この須恵器は、杯B I で I 群土器に属し、奈良時代中頃、平城宮土器Ⅲに属する。

杯の中には5枚の和同開珎と墨挺を納めていた。和同開珎はいずれも銭文を上、相互に接するように弧状に並べ、銭に近接して墨を置く。その配置は底面の周縁に沿う形で片側に偏在し、中央は大きく空いた状態にある。和同開珎はすべて隸開の新和同であるが、腐朽が著しく細部は不明。墨挺も崩壊が進み、摘出不可能な状態にあったが、X線写真によって形状が判明し、使用半ばの墨挺を納めたことがわかる。本来は唐墨形、もしくは截頭船形をした墨挺であるが、ほぼ中央最大部までを使用しており、長軸に対して垂直に近い使用面を確認できる。復原寸法は、現存長5.6cm, 最大幅3.2cm, 頭部幅1.2cm。\*

**SX 1400 出土遺物** (Fig. 66, Tab. 17) 十三坪検出の土器埋納遺構。地鎮祭の供物・祭具を納めた遺構である。発見時に一部が遺構から遊離したため、埋納状況の一部に不明な点が残る。小土坑の埋土を切って掘られた長軸(南北) 20 cm, 短軸 16 cm の埋納坑内に、4点の土師器小皿を埋納したもの。土器の内外から和同開珎、ガラス小玉、金箔・鉄片が出土した。埋納坑の深さは2~6 cm と浅いが、検出面のかなり上位から遺物が出土しており、本来の埋納坑の深さは15cm 以上と推定される。\*

4点の埋納土器は、口径 10 cm 前後、器高 2 cm 前後のほぼ同一法量の土師器皿Cである。いずれも口縁部の内外をよこなでするにとどまり、底部外面は不調整。これらの土器は規格性に富み、祭祀用に特別に用意された土器とみられる。年代は奈良時代前半、平城宮土器Ⅱと考えられる。説明上、出土順に上位から皿1~皿4とよぶ。皿1・2は坑底から5cm ほど浮いて出土。皿1は坑の東壁面に沿うような形で斜めに立って出土し、皿2は西壁に接するように逆位で出土した。皿3・4はともに正位の状態で坑底近くから出土。皿4が坑底の南半に、皿3が北半に位置する。皿4は坑底に密着するが、皿3は坑底からわずかに浮いており、皿4の口縁上に底面の一部が重なる。これらの内容物は土器底に密着するものが少なく、大半が充満土中に包含されている。土器の外側から出土したものには、皿3の直下から出土した6点の和同開珎があり、そのうち5点は2枚と3枚が重なって出土した。また埋納坑埋土の水洗によつ

て和同開珎の細片17点と多数の金箔片，鉄片を検出している。このほかに遺構の発見時に遊離し，出土位置の不明な14点の和同開珎がある。

出土した和同開珎は腐蝕が進行し，遺存状態が悪い。すべて新和同で，出土総数は51点。そのうち完形に近いものは15点。他は欠損品や細片で，本来の埋納数を特定しがたい。そこで銭

\* 文をもつものについて，字ごとの遺存数を整理すると，「和」28点，「同」32点，「開」31点，「珎」29点という数値が得られる。したがって現時点では， $32 + \alpha$  枚の和同銭の埋納を想定しておく。ガラス小玉は12点を数える。腐朽崩壊が進み，土中から摘出できたのは5点にすぎない。いずれも小さく痩せ，白色に変質して本来の色調を失っている。皿1には芯に銅線が通り4点が連結したガラス小玉がみられる。十四坪の SE1555, SE1560 出土のガラス小玉や，西

\* 一坊坊間路西側  
溝 SD 920 出土のガラス小玉に近似し，本来の大きさは径 0.6 cm, 高さ 0.4 cm 前後で，緑色をした鉛ガラスであった可能性が高い。金箔は土器の内外から特定の箇所集中することなく出土した。微細化しており，最大

\* のもので 5 mm 程度の大きさである。他に 2~1.5 mm 大の薄い鉄片が40点近く出土している。

\* SX1578 出土遺物 十四坪検出の土器埋納遺構である。径33 cm, 深さ約 8cm の円形の坑内に，把手付きの

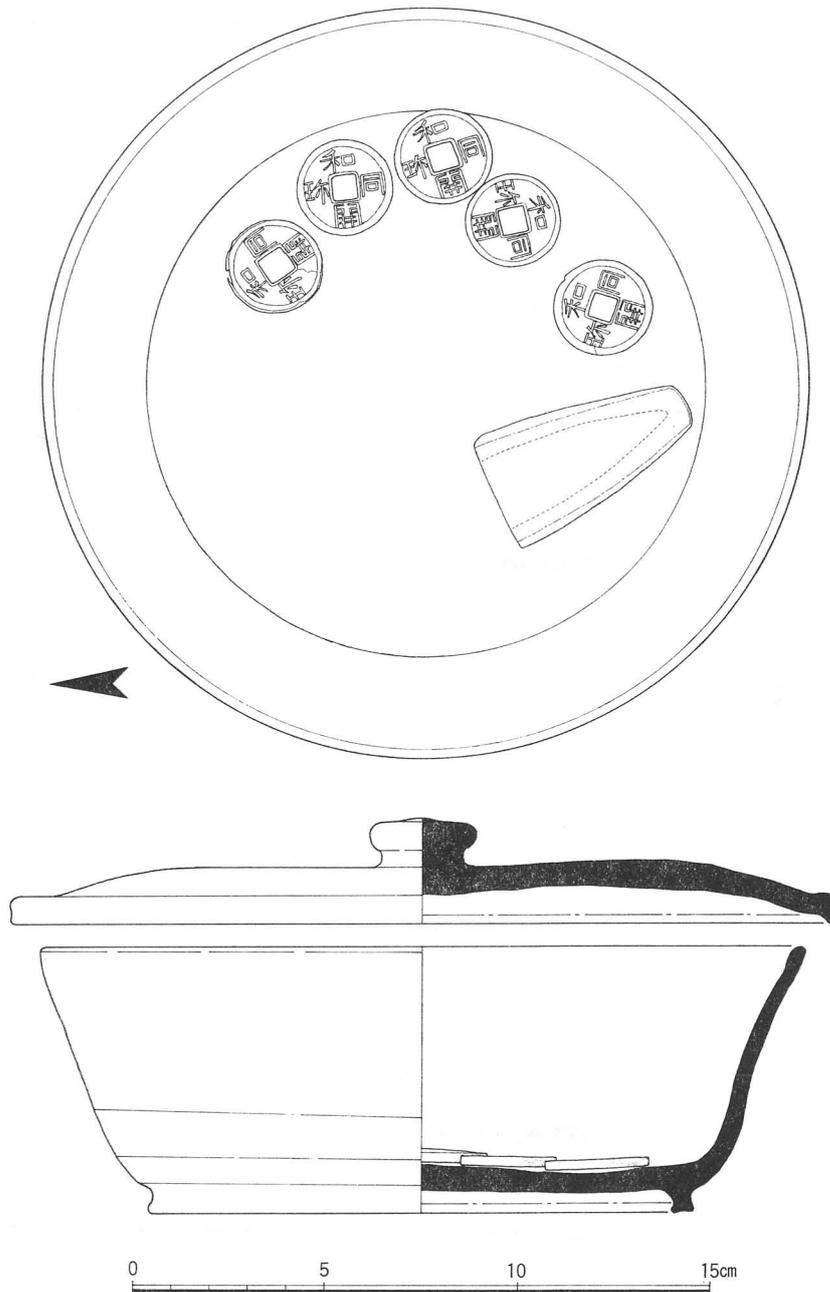


Fig. 65 SX 1535 出土遺物 (1 : 2) 矢印は出土時の北をさす。

土師器甕Bを倒立させて納めたもの。甕は後世の破壊により、体部下半を欠く。坑底部中央やや西寄りの浅いくぼみから金箔が出土。出土範囲は7×5 cmほどに限定される。金箔は100片近いが、大部分が微細なもので、2~5 mm大のものは20片ほどである。埋土のX線写真撮影と水洗を行なったが、金箔のほかに内容物は認められなかった。

土器番号	口径	器高	出土状態	坑底からの出土レベル	遺存状況	和同開珎	ガラス玉	金箔
Ⅲ 1	9.8 cm	2.1 cm	斜位	+4.5 cm	ほぼ完形。	9	5	有
Ⅲ 2	9.9 cm	1.8 cm	逆位	+5 cm	出土時3/5片。その後接合し、口縁1/4を欠く。	2	0	無
Ⅲ 3	10.4 cm	2.1 cm	正位	+1~3 cm	口縁1/6を欠く。	3	2	有
Ⅲ 4	10.0 cm	2.0 cm	正位	密着	出土時口縁1/4欠。その後接合しほぼ完形となる。	0	5	有

Tab. 17 SX1400 出土遺物

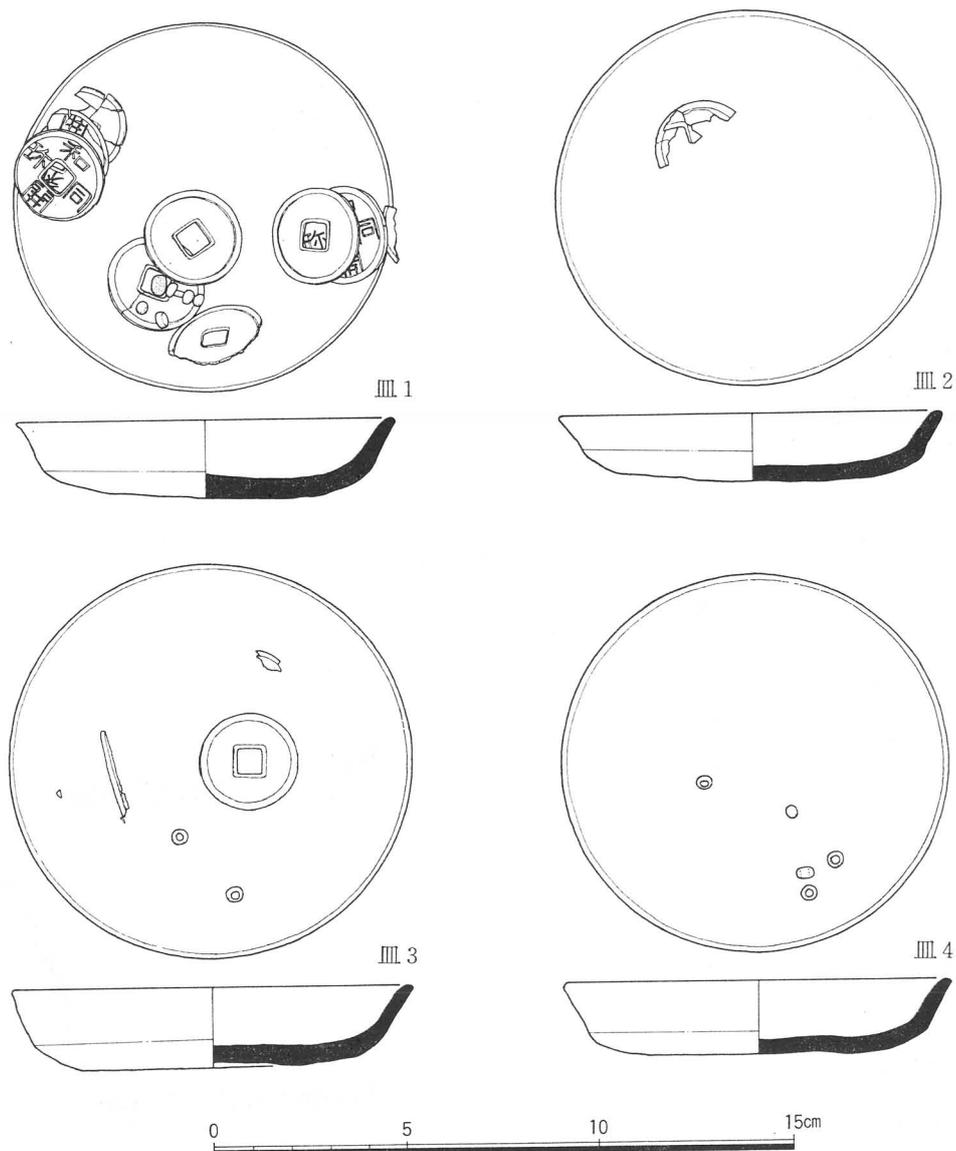


Fig. 66 S X 1400出土遺物